

終章

初任者研修と相互授業参観について
一年間の活動を振り返って（編集後記に代えて）

初任者研修と相互授業参観について

①初任者研修について

他大学では初任者を対象とした研修を実施するケースが多いことはFD委員会としても把握していた。平成23年度に本学に着任した教員は3名おり、本来であればFD活動の一環として初任者研修を行うべきであったかもしれない。その際には、学園の建学の理念、教育目標等の確認から、シラバスの記載方法、教育上の具体的な注意事項に至るまで、FD委員との遣り取りを行うことになるだろう。

しかしながら、該当する3名は前任校あるいは非常勤での教育経験が豊富であり、授業を運営する上でスキルにおいて既に成熟していると判断された。また、大学運営上の経験や知識に関しても殊更にサポートを必要とする状況になかった。

そこで、他大学で実施されている形態での初任者研修について、FD委員会として今年度において必要ないものと判断した。

②初任者インタビューについて

そこで、FD委員会では年度後半に初任者研修に代わって、初任者に対するインタビューを行う計画を立てた(11月22日第26回FD委員会議事録参照)。まず、各該当教員とインタビューの質問項目や全体の流れに関して事前の打ち合わせを行う。後日個別に30分程度のインタビューを行い、ビデオ撮影する。その後、映像記録を元にブログ原稿を作成して大学HP上に掲載するほか、映像を昼食時に学内の食堂等で放映する。以上が当初の計画であった。

しかし、FD委員がそれぞれ多忙を極め、計画を遂行する十分な時間的余裕がなかった。また、教員もそれぞれ制作展の指導に忙殺される時期を迎え、遺憾ながら計画は頓挫することとなった。

③相互参観について

本学ではかつての京都市立芸術大学の時間割を踏襲しており、火曜日から金曜日までの3・4時限目は実技系の必修科目が配置されている。実技系教員は基本的にそれぞれの専門分野において授業を受け持っている。そのため、互いの授業を参観することが基本的に不可能である。

もちろん、平日3・4時限以外の講義系科目(講義科目および一部の演習科目)において相互参観は可能であるが、相互参観を呼びかけても、多忙な大学業務に加えてFD委員会の思惑通りに教員が動いてくれるのか大いに疑わしい。実を挙げないまま計画倒れになる可能性の方が高い。

教授法においてFDのサポートを必要とするケースが学内に皆無とは思われない。相互参観については、教員の業務繁多を招かない配慮をしつつ、また、教員管理の色彩を極力排しながら、ビデオ機器等の利用も視野に入れつつ、慎重に企画する必要があると委員会では考えている。

一年間の活動を振り返って（編集後記に代えて）

今年度のFD活動を振り返って

造形学科 日本画分野

仲 政明

今年度からFDの活動方針が新たになり、期待と不安を抱きながらのスタートであった。特に私はFD委員としては3年目であり、過去2年とは全く違った活動内容に戸惑いを隠せなかった。しかしながら、他のメンバー全員からの、新たなFD活動を行うことによって、結果はともかく学内の活性化への契機になるようにしたいとの強い意志が、私を触発し感化したのは事実である。その意志があったからこそ、各自が忙しい中でもほとんど欠席者が無く29回の委員会が開催され議論することが出来たのだと思う。頻繁に話し合う時間を全員が共有できたことは、お互いをより深く理解することとなり、各自の個性を尊重した活動に繋がったと感じている。

FDカフェ・FD研修・実習授業アンケートなど多岐に渡る企画、活動を行ったが、現時点で評価することは早計であろう。これらの活動がどの程度の成果を揚げたのか、或いは上げていくのかは、今後これらの活動を地道に続けていくことで、自ずと結果が導き出されるものと考えます。また委員会メンバーの力だけでなく、より多くの教職員と学生が一体となった活動が必要不可欠であり、教員の惜しみない協力と努力が無ければ、教育の質的向上を高めるという目標に到達することは出来ないことは明らかであろう。

最後になったが、個人的にはFDカフェの企画段階で学友会メンバーを参加させた会議が印象に残っている。一回生から三回生までの数名であったが、各自がそれなりに考えを持ち、学生の立場から大学をより良くしたい、より良くしなければならぬとの自覚を持ち、それをしっかりと発言しようとする姿勢に感動を覚えた。この会議は学友会メンバーの負担を大きくしているとの判断から、途中で中止した形になったが、本来はこのような形で学生参加をさせ、学生の意見も聞き入れながら活動することも重要であると改めて感じた。しかしながら学友会の現状は学生が集まらず壊滅寸前の状態である。どのようにして学生に関心を持たせるかという難題にぶち当たっており、メンバーの負担も増大している。大学が何らかの手立てを打って助けてやらなければ、学生の自主性が益々無くなっていくのではないかと危惧する。

2011 年度の FD 活動について

倉山裕昭

今年度の FD 委員会で行った活動について振り返り、感想とともに次年度に向けた目標をまとめてみたい。

●研修会

テーマ設定には無理が無く、教員の関心を集めることは出来ていると思う。議論を時間内にまとめるつもりなのか、問題提起だけでよいのか、その都度スタンスを明確にした上で進める必要があるのではないかな。

●FD カフェ

参加してくれた学生達は各回のテーマへの関心は高く、発言者の意見を集中して聞いている。しかし前半のグループディスカッションに比べ、後半の全体討論では積極的な発言が少なく、本来の意図であった、学生と教員が分け隔てなく議論する場とはなり得ていない。

前半のグループごとの着席ではお互いの顔が見えることで連帯感を感じ、発言し易い雰囲気を作っているが、後半の講義的な着席では孤立感があり、その場の全員に対して発言する事に緊張感を感じている可能性がある。前半の空気感のまま後半を迎えるための方策を考える必要があるのではないかな。

●実技系授業アンケート

アンケートする項目内容を従来の授業を行う教員の能力評価を中心としたものから、学生自身の学びの達成度を自己チェックさせるものへ変えた。また全ての実習・演習授業に対して記入させていたのを、実習・演習の中から一つを選択し記入させることとした。学生自身に「最も習得したいもの」を意識させることで、受け身の学習から能動的な学びへ体質が変化することを狙いとしている。

初めての試みであった今回は教員間に変更意図や実施の段取り等伝えきれていないことで現場に混乱が生じた。また集計結果の扱い方や利用方法についても十分な検討がなされていない。記入用紙の書式にもまだ改善点がある。これらの問題を解決し、学生にとって有用なアンケートが実施されることを目指したい。

2011年度FD活動の反省と今後

山本直樹

2011年度のFD活動は一言で言うと「種をまくーコミュニケーションのきっかけをつくる」ことであつたと思う。社会全体もそうであるが、とかく大学も「タコつぼ的」な内向きベクトルに陥りがちな現状である。しかし、「それでは駄目だ。何とか打開し、大学を活性化させよう！」との強い意志をFD委員の各先生の言動からひしひしと感じ、大いに励まされた。この熱意がFDカフェはじめ、FD研修や授業アンケートなど数々の新しい企画を立ち上げ、遂行できた最大の原動力であろう。ただ、全てが上手くいったわけではなく、いくつかの反省点・改善点もあつた。今後の活動・方向性も含め、以下の様に考えていきたい。

□反省点・改善点

- ・FDカフェ --- で使いづらい。ワークショップ
ブルームがあればよいのだが...

FD研修 --- 美術大学とは違う立場での講演会等、切り込み方はよい。実際それを適用するにはもう少し改善の余地があると思われる。あとそもそもの「FD」という意味合いから教員能力向上のための企画（グループ活動、プレゼン）をやるのはどうだろうか。

- ・実技系授業アンケート --- アンケートをとることに對して大切なポイントは開始・終了するタイミングや内容が公正でなければならない。今年度は教員に対するインフォメーションに統一されていなかったのが昨年の問題点であり、今後はそのようなことが内容にすべきである。

□今後について

- ・上記にあげた改善点を再検討しつつ、今年度はよりFDを「浸透させる、実りあるもの」にしていかなければならない。ポスター掲示やブログ掲載はもちろんであるが、やはり内容の充実が一番である。そのためにFDカフェでの討論だけでなく、実践していくプロジェクトの様なものをする、さらに達成感がそこで得られたならFDの趣旨に合致するのではないか。

資料

FD 委員会規程

FD 委員会議事録

FD 研修アンケート用紙・アンケート集計データ

FD カフェのアンケート用紙・アンケート集計データ

学生授業アンケート集計データ

FD 講演会配布資料

大学共通規則 FD 委員会規程

(設置)

第1条 本学にFD（ファカルティ・ディベロップメント）委員会（以下、「委員会」という）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、教員の教育活動の質的向上を促し、授業の内容及び方法の改善を図ることを目的とする。

(任務)

第3条 委員会は、第2条の目的を達成するために、次の事項を審議し、実行するものとする。

(1) FD 活動の企画立案

(2) FD 活動の実施

(3) FD 活動の指針に関する冊子及びFD 活動報告書の刊行

(4) その他 FD に関連する事項

(組織構成)

第4条 委員会は次の委員をもって組織する。

(1) 芸術学部（実習系）から1名

(2) 短期大学部（実習系）から1名

(3) 講義部門から1名

(委員選出)

第5条 前条の委員は教授会において選出する。

(任期)

第6条 委員の任期は1年とする。ただし再任は妨げない。

(委員長)

第7条 委員会は委員の互選により委員長を置く。

(所管課)

第8条 委員会の事務は総務課が行う。

(改廃)

第9条 本規定の改正、廃止については、教授会の議を経なければならない。

附 則

この規程は、平成20年4月9日から施行する。

第一回自己点検評価委員会・FD委員会（合同）議事録

出席者（敬称略）：

（学 長）三好

（企画室長）佐藤

（自己点検評価委員）森山、入佐、坂上、木田、森野、土井、（佐藤）

（FD委員）山本、神谷、倉山、（佐藤）

（総務課）午居、新谷、大前、

配布資料：レジュメ、大学教育推進プログラム企画案、FDとは・・・

1. 学長から方針

自己点検評価委員会とFD委員会は、これまで独立したものであったが、FDが義務化されたこともあり、今後は体制作りを含め、全学をあげて取り組みたい。基本として委員会で検討された活動方針等については、大学評価会議で検討し、決定する。決定したのに対し、自己点検評価委員会とFD委員会が実行していく。年度、年度で方向性を持たず実施するのではなく、方向性に一環性を持たせ、それに基づいて本年度は、どこにポイントを当てて実施していくという方向で進めていただきたい。また、機関評価項目以外に他に検討する課題があれば、それについても検討していただき、一定の評価がいただけるものに仕上げていただきたい。委員会は、FDを推し進め、事務局はSDを推し進めていく。

自己点検については、前回は平成18年度にうけたことから次回は平成25年度に評価を受けることになる。そのため、平成24年度のデータの積み上げが必要になる。大学評価会議は、年3、4回の開催予定であるが、大学評価会議には、中間報告、年度末報告を行うこととし、5月末までに一定の方向性をまとめ、報告いただきたいと今後の委員会開催に当たって説明がされた。

2. 総務課から配布資料について、説明があり、FDの法的基礎などを認識した上で、進めていただきたいとの説明の後、佐藤企画室長から、いままで狭義であった教育方法（教員個々による能力開発）から、教員団の職能開発の活動全般を指すことに傾注することが必要であるとの補足説明があった。

3. 午居事務局長から評価機関について

平成18年度に受けた評価機関からの評価について説明があった。評価機関からの指摘事項として、①本学は芸術学部と短期大学の教授会を合同で実施しているが、本来は個々に実施すべきとの見解。②短期大学部としてはカリキュラムが多く、これを合理的に効率よくスリム化することはできないかとの指摘があり、これらの課題を踏まえた上で、評価機関の選定も必要になる。評価機関については、平成18年度は芸術学部は日本高等教育評価機構、短期大学部は、短期大学基準協会を受けたが、3年前から日本高等教育評価機構も短大評価が実施可能となった。同一機関で受けることについてデメリットはなく、メリットは、書類の一元化（項目の統一性）、経費削減ができることがあげられる、また、短期大学基準協会は、総合大学が対象である。など別紙資料に基づき説明がされた。

佐藤企画室長から機関選定にあたり、次回委員会までに、各委員は評価機関のホームページ等を一読のこと。

4. 佐藤企画室長から企画室としてのFDの考えかた、構想について説明教員の個々の技能をあげるためのFDから組織力をあげるFDにとらえなおされてきていることから、教員の教育に対する考え方を共有する、方向性を同じにするという意味でFDは重要であり、大学の質保証に対して教職員なりの答えを見出す必要がある。また、教員の教え方の評価から学生自らの学びを自己点検するというように意識を変えることが必要であるなどの説明のあと、企画室からFDカフェの設置の提案がだされた。FDカフェに関しては、申請内容を一読の上、次回の会議で内容について検討をいたしたい。

大学推進プログラムのGP（学術振興会）は、5月中旬に申請が必要であること、自己点検については、点検項目を絞り込んだものとして毎年自己点検報告書を提出する。またFDカフェ活動の成果を実施報告書、ホームページに掲載するなど、学外にも広報し、本学の取り組みを伝えていくことが必要ではないか等の説明があった。委員からは、委員会の位置づけや業務のすみわけなどについて、種々意見があったが、委員長選出については次回持ち越しとし、FD委員会、自己点検委員会の業務内容の明確化と棲み分け（どの範囲まで行うのか）については佐藤企画室長から学長、事務局長に確認をすることとした。

5. 山本先生を委員とすることについて、全員承認した。

次回委員会に向けて

- ①佐藤企画室長から評価機関の選定にあたり、次回委員会までに、各委員は評価機関のホームページ等を一読のこと
- ②FDカフェに関しては、申請内容を一読の上、次回の会議で内容について検討をいたしたい。（アイデア等も含め）
- ③委員長選出
- ④FD委員会、自己点検委員会の業務内容の明確化と棲み分け（どの範囲まで行うのか）については佐藤企画室長から学長、事務局長に確認をすることとした。

第二回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 4 月 14 日、11h50-12h50

場所：食堂

出席者：倉山、神谷、山本、仲、佐藤

議題：

1. FD 研修の開催日および開催場所について
2. 今年度の FD 活動の見通しについて
3. 今年度 FD 委員長の選出について
4. その他、連絡事項等

1. FD 研修（仮称：FD Café in Saga）の開催日および開催場所について

企画室案では 5 月 3 日、4 日を想定していたが、ゴールデンウィーク中の開催では参加者が限られる公算が大きいため、第一回目を 5 月 8 日（日）、第二回目を 6 月 5 日（日）という方針で関係部局との調整を行うこととなった。場所は大覚寺の研修スペースが利用できないか検討する。また、第一回目は性急に結論を急ぐことなく、議論を拓げる方向で企画し、第二回目以降に議論を絞り込んで結論を導くという方針で企画することとなった。（その後、大学評価会議での承認を待って、具体案を推進する方針とした。そのため、本義案は一時保留とし、時機を待って再審議することとした）

2. 今年度の FD 活動の見通しについて

今回は FD 活動の様々な可能性についてアイデアを出し合うこととなった。そのうち主な者を下に挙げる。

- ①入試委員会と連携して、受験生獲得のための研修を企画する。学生参加も促し、入試業務における学生ボランティアの組織化を目指す。
- ②学校説明会やオープンキャンパスの際に、中庭で教職員と学生の座談会を開催、さまざまなテーマでディスカッションを行う。受験生にも自由に見学させる。
- ③合評時に様々な教員や他領域の学生を受け入れる工房を募り、試験的に合評を実施する。ピア・レビューの観点にとどまらず、様々な領域の学生間の意見交換の場としていくことで、合評自体の活性化を図る。
- ④その他、様々な座談会、ワークショップ、シンポジウムを企画運営し、学内における意見交換の機会を提供する。

3. 今年度 FD 委員長の選出について

議論する十分な時間がなく、選出は次回まで持ち越しとなった。

4. その他、連絡事項等

①次回会議の日程

今回は 4 月 19 日（火）11h50-12h50 に食堂で開催することとなった。また、それ以降は毎週木曜日の同一時間帯に同じく食堂で開催することとした。

- ②島根大学教育開発センター年報 3・4 号を委員の人数分印刷・配布することとした。

以上。

2011 年 4 月 14 日

文責：佐藤

第三回 FD 委員会 議事録

日時：2011年4月19日、11h50-12h50

場所：食堂

出席者：倉山、神谷、山本、仲、佐藤

議題：

1. 今年度 FD 委員長の選出について
2. FD 委員会の業務範囲について
3. FD 委員会年次計画案の検討（企画室資料）
4. その他、連絡事項等

-
1. 今年度 FD 委員長の選出について

規定に従い互選の結果、神谷先生を委員長として選出した。

2. FD 委員会の業務範囲について

全委員で規定を確認した。なお、授業アンケートに関しては、その企画運営に関して FD 委員会の業務とすること、アンケート実施と実際の集計については総務課の職掌、アンケートを元にした点検作業は自己点検委員会の業務とすることで、次回自己点検評価委員会との合同会議において提案することとなった。

3. FD 委員会年次計画案の検討

各委員が企画室資料を持ち帰り、次回会議までに検討しておくことが申し合わされた。

4. その他、連絡事項等

①次回は4月26日、自己点検評価委員会との合同会議が予定されていることが確認された。

②4月28日の昼休み時間中の FD 委員会単独の会議は、デザイン学科共同研究室で行うこととなった。

以上。

2011年4月19日

文責：佐藤

第二回自己点検評価委員会・第四回FD委員会（合同）議事録

出席者（敬称略）：

（学 長）三好

（企画室長）佐藤

（自己点検評価委員）森山、入佐、坂上、木田、森野、土井、（佐藤）

（FD委員）山本、神谷、倉山、仲

（総務課）午居、新谷、大前、

配布資料 ①第一回自己点検評価委員会・FD委員会（合同）議事録

②第二回FD委員会議事録

③第三回FD委員会議事録

④自己点検評価・FD合同委員会

（第二回自己点検評価委員会・第四回FD委員会レジュメ）

⑤自己点検評価委員会およびFD委員会の業務範囲について
（企画室案）

⑥自己点検評価活動に関する覚書

⑦2011年度FD委員会年次計画案

⑧2011年度自己点検評価委員会年次計画案

⑨第一回大学評価会議議事進行案（企画室案）レジュメ

⑩事務局よりフローチャート図

⑪[学長よりの指針] 概要

⑫[FD, SD 他大学に実例より]

⑬認証評価に関する事務概要

1. 第一回自己点検評価委員会・FD委員会（合同）議事録について、一部訂正の上、承認
2. 神谷先生をFD委員会の委員長として承認
3. 仲先生をFD委員会の委員として承認
4. 森野経理課長を自己点検評価委員会の副委員長として承認
5. 佐藤企画室長から自己点検評価委員会およびFD委員会の業務範囲について企画室からの提案として、授業アンケートについての説明と各ステークホルダーとの関係について説明があった。
 - ・授業アンケートはFDカフェを企画して項目立てを検討、合議することとし、授業アンケートの企画運営は、FD委員会が担当。
 - ・具体的な作業は、総務課が担当
 - ・アンケート結果は、自己点検評価委員会が報告書に反映する。
 - ・ステークホルダーからの意見聴取については、学友会がFD委員会と学生部と連携して担当、同窓会はFD

委員会、教育後援会は企画室と総務課が担当になるだろう

- ・ 大学評価に関する中期目標を策定する場合、企画室が計画案を大学評価会議に提案する。
- 6. 自己点検評価委員会およびFD委員会の業務範囲について（企画室案）、各委員は精読のこと、またこの件については指摘いただいた各委員からの意見を修正案としてまとめ、メールで各委員に配信し、承認を得る形をとる。
- 7. 本日資料のFD委員会の議事録についても参考として精読のこと
- 8. 事務局ならびに佐藤企画室長から学長の方針をフローチャート化したもの、方針の再確認のため学長が作成された「学長よりの指針」概要、参考資料としてFD、SDの他大学の事例などについて説明された。上記資料について各委員は精読のこと
- 9. 続いて佐藤企画室長から自己点検評価活動に関する覚書について、先ずFD委員会の方針などが説明された後、資料に基づき、PDCAサイクルの弱点(ア)～(オ)、大学とは教養理念を共有した“目的の共同体”であることが大前提(ア)～(オ)についての説明（本学が求める、またやるべき自己点検評価活動ではないのか）、本学なりの自己点検評価活動とは何か、目的はなにか、本学独自の自己点検評価項目とは何か、そしてその必要性、また委員からPDCAサイクルに対する解釈や前回実施した認証評価実地調査についての参考意見など種々意見がだされ第三者評価を見据えながらも、我々がどう向上していくのかを第一に考えながら、過去の資料も参考に検討し、FD委員会とも連携をとりながら進めることになった。また次回の委員会までに委員は、再度、両機関に関する情報を確認しておくこと。
- 10. 事務局から認証評価に関する事務概要について説明がされた。
- 11. 佐藤企画室長から企画室案として提案のあった2011年度FD委員会年次計画案、2011年度自己点検評価委員会年次計画案について説明の後、委員からの意見により一部訂正。2011年度FD委員会年次計画案については、I基本方針の4、職員、非常勤教員の活動参加→非常勤教員に関して文言を緩やかに書き換える。（参加を受け入れる等。）活動の内容と目標が混在しているため、I基本方針の2. 自己点検評価委員会との緊密な連携→削除する、文言など書き方を変更、項目立ての整理を行う。
- 12. 2011年度自己点検評価委員会年次計画案については、3. 機関別第三者認証評価に向けた準備作業の3-2を削除
- 13. 自己点検評価委員会・FD委員会（合同）は大学評価会議が立ち上がる（5月半ばぐらい）までは合同で開催する。
- 14. FD研修（案）の見解をまとめ、合同委員会に諮る
- 15. 各委員会の年次計画は、次回へ持ち越し
- 16. 次回委員会は5月10日（火）16時30分から開催予定

第五回 FD 委員会 議事録

日時：2011年4月28日、12h10-12h50

場所：デザイン学科共同研究室

出席者：倉山、神谷、山本、仲、佐藤

議題：

1. 自己点検評価委員会との連携について
2. FD Café in Saga 案の検討（継続）
3. FD 委員会年次計画案の検討（継続）
4. その他、連絡事項等

1. 自己点検評価委員会との連携について

FD 委員会では、授業アンケートにおいて教師の教え方を評価するという考え方から、学生自身が自分の学びを自己点検するという考え方への漸進的な転換を図っていきたいと考えている。また、そのために FD 研修会を開催して、学生も交えて教育目標を共有し、アンケート項目をディスカッションを通して決定していきたいと考えている。重要なのは、教師目線と学生目線の乖離を小さくすること、教育目標を教員間のみならず教員と学生の間で共有していくことである。

こうした転換と自己点検評価とは無関係ではあり得ない。各授業において教育目標に向けた学びがなされているか、教育目標に向かって教員と学生の意識が共有されているか、アンケートで明らかにされるのであれば、評価方法もそれに応じて変化させる必要があるものと思われる。

以上のことを FD 委員間で確認した。また、自己点検評価委員にも次回合同会議で理解を求めていくことで合意した。

2. FD Café in Saga 案の検討

企画室の提案した企画案を検討した。その結果、基本的に了承された。ただし、様々なテーマを選んで年間を通して開催する学生と教員の座談会等にも FD カフェの名称をつけるべきこと、それらの年間スケジュールを早期に定めること等の意見が出され、企画案をその方針で修正することとした。

3. FD 委員会年次計画案の検討

審議の時間が取れなかったため、委員各自が持ち帰り、次回会議（5月10日）までに修正点をメールで伝えあうこととした。

4. その他、連絡事項等

- ①次回は5月10日、自己点検評価委員会との合同会議が予定されていることが確認された。
- ②FD 委員会単独の会議は、5月12日（木）、デザイン学科共同研究室で行うこととなった。

以上。

2011年4月28日

文責：佐藤

第三回自己点検評価委員会・第六回FD委員会（合同）議事録

開催日：平成23年5月10日 16:30～19:00

出席者（敬称略）：

（学 長）三好

（企画室長）佐藤

（自己点検評価委員）森山、入佐、坂上、木田、森野、土井

（FD委員）山本、神谷、倉山、仲

（総務課）午居、新谷、大前、

配布資料：①第二回自己点検評価委員会・FD委員会（合同）議事録

②第三回FD・自己点検合同会議

（第六回FD委員会、第三回自己点検評価委員会）

③FD Café in Saga（仮称）企画案（FD）委員会案）

④札幌大学FD推進委員会に、4月より学生が正式委員として参画

●第二回自己点検評価委員会・FD委員会（合同）議事録について、一部訂正の上、承認

●授業アンケートに関しては、①企画運営がFD委員会 ②実行、施行が総務課 ③自己点検項目に反映させる方策の検討は自己点検評価委員会が担当することを再確認した後、継続審議である自己点検評価委員会およびFD委員会の業務範囲、自己点検評価のあり方について委員から種々意見を聴取した。佐藤企画室長から今回、改めて組織を変換するということは、大学の総意を形作り、教育目標をたて、それに向かってFD活動をし、大学自治の形の現れとして報告書を出すという発想に切り替えようとしているとの説明があり、大学の組織としての自律を重んじ、それに対して構成員全員が当事者意識を持てる仕組みづくりをしなければならない。また、自己点検報告書を継続して出し続けていることは大切にしながら、今まで通りの自己点検にならないために自己点検評価委員会とFD委員会は基本的な問題点を共有し、連携をとりながら、問題点が浮き彫りに、明確になる自己点検報告書を作成すべきである。そのためには項目の見直し、公表の仕方、分析手法などの評価手法も交え、具体的に授業の改善に係わるアンケート項目の整理、結果をどのように共有していくのが重要であるとした。またフィードバックされた結果の検討はFD委員会が実施し、回答された種々結果についてFD委員会で利用するかどうか検討するという一文を業務範囲の中に入れてほうがよいのではとの意見などがあり、フィードバックの実施方法等については、年度をまたいで検討し、第2回あるいは第3回大学評価会議に上程する。

●続いて委員からの種々意見に関連し、前回に続き、FDカフェの今後の活動についての説明があり委員から種々意見が出されたが、FD委員会提案のFDカフェ等は、基本的に承認された。

委員間での意見は以下の通り。

- ・いかに学んでいるかを学生に自己点検をしてもらうための項目立てを考えてみる。
- ・自主的にどこまで学習意欲があるかという項目を大きくアンケートの中で取り上げる。
- ・グループディスカッションの実施
- ・学友会との連携した企画、座談会などを企画しながら意識共有を学びの場において作り出す努力をする。

- ・学友会に参加している学生の意見だけで本学の学生の意見であるという様に見えることができるのか疑問が残る。
- ・不本意入学の学生、むしろ大学に出て来ない学生などに対しての項目立ての検討、意見集約の方法の検討
- ・学生は同じ類似の学生と話をさせて意見を聞く 学生のみで行う 学科ごとに行ってみるとか
- ・たとえば問題のある学生についての対処方法などについて教職員のみでディスカッションをする機会を年に1, 2回程度開催することも1つの方法
- ・また全学生個人の情報をカルテ化しておくことも必要であるが、システムの問題、使用側のリテラシーの問題もあり、またどこまで開示するかの問題も残る。紙媒体・どこが集約・いつ実施するかは次の問題

●自己点検評価のあり方については、今回の議事録を確認した上で暫定的であるが大学評価会議に向け上程することとした。

●FD・自己点検評価活動計画年間スケジュール案は今回の大学評価会議には提案しないこととし、今年度前期をかけて立案することとする。

●第三者認証評価機関の選定については、同機関で行う事務的メリットや機関の現在の大学、短期大学の受け入れ状況、年会費等について検討し、芸術学部は日本高等教育評価機構（前回機関とどう）に継続して受審する。また組織的にも、日本高等教育評価機構の事務局がしっかりしていること、報告書の体裁、聞かれている設問が機関によって微妙に違ってきているので、それに対応した文章化をするなら同じ機関のほうがいいのではないかとの意見もあり、短期大学部も日本高等教育評価機構で受信することとした。これに伴う短大基準協会からの退会については、学長にも事前に確認しておくこととした。

（その後、学長と企画室の協議の結果、第一回大学評価会議への提案は見送り、一年ほどをかけて検討を継続することとなった。）

●年次計画についてFD委員会年次計画案について指摘があった事項の確認を行った。

- ・I基本方針の2. 自己点検評価委員会との緊密な連携を全カット
- ・4. 非常勤教員、職員の活動参加の4-1は参加を促すくらいのやわらかい表現に変える。
- ・情報の公開については大きな項目として追加する。FD委員会は積極的に情報公開すべきであると考えている（広報室との連携）。自己点検評価委員会年次計画案にも追加する。文部科学省の情報化しなさいということもあるが、本学独自の判断としてどこまでは情報公開をするということを明確にしておく必要がある。また過去の自己点検評価報告書をわざわざデータにして公開することが望ましいかは1年間かけて慎重に判断する。また要約版の作成や学生募集に結びつけるなら外部への見せ方も考慮する等種々意見がだされ、各委員から指摘のあった内容は訂正版（訂正は赤字）として佐藤企画室長が作成し、各委員の承認を得た後、大学評価会議に上程することとした。

●自己点検評価委員会年次計画案について項目の確認を行った。

- ・I基本方針の2. FD委員会との緊密な連携は削除
- ・5. SDとの協働の推進は削除
- ・情報の公開については大きな項目として追加する。
- ・2. 機関別第三者認証評価に向けた準備作業の3-2. と3-3は削除

- ・ 2. 機関別第三者認証評価に向けた準備作業の 3-2. と 3-3 は削除
 - ・ 3-4 は機関別評価に向けたデータ集の作成として記載 3-6 はそのまま 今回の項目と前回の項目をくらべながら教育憲章、教育目標が実際の教育とどう結びついているか、教育組織、教育課程も考慮し適宜順番も入れ替え、佐藤企画室長が整理、訂正版（赤字で訂正したもの）を作成、各委員の承認を得た後、よければ大学評価会議に上程することとした。
- 引き続き第 1 回大学評価会議議事進行案（企画室案）について佐藤企画室長から説明があった。
- ・ 5. 自己点検評価委員会・FD 委員会年間スケジュール案の審議は削除
 - ・ 議題に関しては全委員承認した。
 - ・ 出席者については、自己点検委員会、FD 委員会のメンバーについても学長と相談し、決定次第 各委員に報告をする。
- 大学評価会議の開催日時を 5 月 31 日（火）とした。
- 事務局より FD 活動について参考となる札幌大学の FD 活動の資料が配布された。

第七回 FD 委員会 議事録

日時：2011年5月12日、12h10-12h50

場所：デザイン学科共同研究室

出席者：倉山、神谷、山本、仲、佐藤

議題：

1. FD 委員会の今年度前期の予定について
2. FD 委員会の次回予定について
3. その他、連絡事項等

-
1. FD 委員会の今年度前期の予定について

5月31日に予定されている大学評価会議、および、6月15日の教授会を経て、全学的体制が承認されることが確認された。また、FD委員会ではその後に行われるであろう、FD研修や座談会について具体的実施計画をまとめ上げること、他部局との連携を含めた実施体制を準備することを目標に活動を進めることとした。日程については、授業アンケートを対象としたFD研修を7月10日(日)、7月24日(日)に開催することを委員会内で仮決定した。また、FD座談会については、学生部および学友会との協議の中で検討していくことで、日程調整を企画室に一任することとなった。

2. FD 委員会の次回の予定について

神谷委員長より、次回はFD座談会の予行演習を兼ねてその課題発見と検討を行うこととなり、5月19日(木)午後5時半から行うこととなった。

3. その他、連絡事項等

なし

以上。

2011年5月12日

文責：佐藤

第八回 FD 委員会 議事録

日時：2011年5月19日（木）、17h30-20h00

場所：グラッチェ

出席者：倉山、神谷、山本、仲、佐藤

議題：

1. 学友会との協議の予定について
2. ブレーン・ストーミングの予行演習
3. その他、連絡事項等

1. 学友会との協議の予定について

企画室より、大学評価会議が5月31日から6月8日に日程変更されたことが報告された。この事態を受けて、FD委員会としては大学評価会議の承認を受ける前に、今年度前期のFD活動に向けて最低限必要な準備作業を進めることで意見の一致を見た。また、企画室が既に学友会との会合・協議を打診していることが報告された。そこで、委員間で検討の結果、5月24日（木）18時以降に学生ホールにおいて学友会執行部との協議に臨むことが合意された。

2. ブレーン・ストーミングの予行演習

神谷委員長の提案により、学生と教員間のディスカッションの予行演習を行うこととなった。そこで、教員役と学生役に分かれて、ブレインストーミングの予行演習を行った。その結果、次のような注意ポイントを委員間で確認・共有することができた。

- ・ディスカッション中、発言者の意見を他の発言者が否定しないようにすべきこと
- ・相手の発言を肯定しながら、多様な意見が出揃うようにチームで努力すべきこと
- ・教員としての立場や学生の立場にこだわらず、対等なメンバーとしての意識を最大限重要視すること
- ・最悪の事態を想定した後に最良の事態を想定するなどのテクニックによって出されるアイディアの幅が広がること

3. その他、連絡事項等

次回会議は5月24日（木）、18時以降、場所は学生ホールとなった。

以上。

2011年5月20日

文責：佐藤

第九回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 5 月 24 日（火）、17h00-19h00

場所：学生ホール

出席者：

(FD 委員・企画室)：倉山、神谷、山本、佐藤（欠席：仲）

(学友会)：大野、田鹿、徳田、藤原、大城、三好、山口

議題：

1. FD 研修案の説明
2. FD 座談会の日程および各回テーマの検討
3. その他、連絡事項等

1. FD 研修案の説明

企画室より学友会に FD 委員会で承認された FD 研修案（「FD café in Saga」案）の趣旨説明を行い、理解を得た。また、学友会執行部からこの研修に参加・協力すること、FD 研修以外の座談会のテーマ設定等に企画段階で参加することへの了承が得られた。

2. FD 座談会の日程および各回テーマの検討

FD 座談会は年間 5 回程度実施すること、時には座談会に代えて講演やシンポジウムを設定する可能性があること、テーマは大学教育に関わるものである必要があることなどが確認された。企画室から、日程については多くの人が集まる機会、学園祭やオープンキャンパスと同日に行ってはどうかとの提案があったが、オープンキャンパスについては意識の高い学生が各研究室や入試課のアルバイト業務に従事する可能性が高く、望ましくないとの意見が出された。

また、各回の座談会のテーマについては、「芸術教育におけるディスカッションの位置づけ」、「制作展のあり方」、「合評のあり方」、「大学教育の一貫性」などのアイデアが出されたものの結論を出すには時期尚早であるとの意見が座を占めた。そこで、次回もう一度、学友会と FD 委員の間で継続協議の日程を組み、日程とテーマを決定していくこととなった。

3. その他、連絡事項等

- ①次回会議は 6 月 1 日（水）、17 時に学友会と合同で開催、場所は学生ホールとなった。
- ②次回会議までに各自、FD 座談会の年間テーマ候補を一つ、各回のテーマを三つ考えてくることとなった。

以上。

2011 年 5 月 25 日

文責：佐藤

第十回 FD 委員会 議事録

日時：2011年6月1日（水）、17h00-19h50

場所：第4ゼミ室

出席者：

(FD委員・企画室)：神谷、倉山、佐藤（欠席：仲、山本）

(学友会)：大野、藤原、三好、山口、福井

議題

1. FDカフェの年間テーマおよび各座談会のテーマについて
2. その他、連絡事項等

.....

前回に引き続き、今回も学友会執行部を中心とする学生の参加を得た。前回の議事録読み上げの後、議題の検討に入った。

1. FDカフェの年間テーマおよび各座談会のテーマについて

出席者より、FD委員会の「FD Café in Saga 案」の趣旨に沿って、年間テーマ候補一つ、および、座談会テーマ候補三つを挙げてもらい、その結果、下表に示すアイデアが出された。中にはFD委員会の業務範囲を超えたテーマもあるが、それらも含めてディスカッションを進めることとした。

年間テーマ候補	目指すべき芸術教育
	やわらかな感性、豊かな美意識、かけがえのない自分の創り方
	大学に対して興味を持つ
	共有
	制作環境の最適化
	学生による意識改革
	芸大の教育とは
各座談会のテーマ候補	学生と創る授業とは？
	短大の可能性
	現代の芸大の課題と可能性
	合評について
	授業アンケートの意義
	制作展について
	学生の自己管理が足りない
	学生の就学意欲の問題
	ディスカッションの意義
	制作時間の延長
	実習スペース利用への意識向上
	考える授業とは
	育っていききたい人間像
学生さんの抱えている問題	

ディスカッションを通して、理念を踏まえて教育方針を策定することの重要性、目的を共有することの重要性、大学人としての自覚を分かち持つことの重要性について、出席者の共通理解が得られた。ただし、年間テーマと各座談会のテーマを時間中に決定するには至らなかった。そこで、次回もう一度同議題で会議を開催し、そこで結論を出すこととなった。

2. その他、連絡事項等

- ①次回会議は6月6日（月）、17時に学友会と合同で開催となった。
- ②次回会議までに年間テーマ候補、各回のテーマを各自絞り込んでくることとなった。

以上。

2011年6月7日

文責：佐藤

第十一回 FD 委員会 議事録

日時：2011年6月6日（月）、17h00-19h50

場所：第4ゼミ室

出席者：

(FD委員・企画室)：神谷、倉山、佐藤（欠席：仲、山本）

(学友会)：大野、田鹿、藤原、三好、山口、福井

議題：

1. FD カフェの各座談会のテーマについて（継続）
2. その他、連絡事項等

前回の議事録読み上げの後、議題の検討に入った。

1. FD カフェの各座談会のテーマについて

出席者間で、FD 委員会の「FD Café in Saga 案」の趣旨を再確認、目的を共有することの重要性、大学人としての自覚を分かち持つことの重要性を踏まえて協議を行った。その結果、下表のラインナップに沿って、各回テーマを設定することとなった。

座 談 会 の テ ー マ	①なんで共有するか？何を共有するか
	②合評
	③大学生
	④リーダーシップ
	⑤授業

2. FD カフェの年間のテーマについて

出席者各人がテーマ候補を改めて挙げ、議論した。その結果、「共有一考える芸大を目指して」とするか、副題に各座談会のテーマを入れるか、いずれかが望ましいとの意見に至った。それを受けて、企画室が最終決定を預かり、学内各部局において意見を聴取し決定に導くこととなった。（後日、学長の見解も参考にして、「共有一考える芸大を目指して」が適当ということになった。）

3. 座談会の日程について

座談会は6月末、9月末、10月、11月、12月に開催すること、水曜日か金曜日を中心に候補日を選定すること、調整役は企画室が担当することとなった。（企画室と総務課の協議の結果、第一回目を7月6日（水）の16時半から20時まで学生ホール使用の予定を入れた。）

4. その他、連絡事項等

学友会との次回協議は座談会第一回目の前に設定すること、決定し次第メンバーに連絡することとなった。

以上。

2011年6月16日

文責：佐藤

第十二回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 6 月 15 日（水）、12h10-12h50

場所：デザイン学科共同研究室

出席者：

(FD 委員・企画室)：神谷、山本、仲、佐藤 (欠席：倉山)

議題：

1. FD 活動の目的について
2. FD 委員会規程の改定について
3. 学友会執行部との連携について
4. その他、連絡事項

1. FD 活動の目的について

前週の第一回大学評価会議の審議経過の報告が企画室からなされた。それを受け、同会議で配布された学長メモを元に、今年度以降の FD 活動の定義や目的について確認が行われた。FD 活動が従来の教員個々の教授技能の向上を目指すばかりでなく、教員団の組織的な教育力向上を目指すこと、さらには、職員による SD 活動との連携を強化し、学生の参画も視野に入れることを原則として FD 活動を展開していくことで出席者の了解を得た。また、その活動は将来的に大学の全構成員による自治の実現という形で実を結ぶべきことについても同意が得られた。こうした委員会の合意は、大学評価会議において一定の承認が得られたものとして、その明文化に取り組むことも合意された。

2. FD 委員会の規程について

現行の規程には不備があること、活動目的の条文を大学評価会議の合意事項に合わせて改定すること、委員の定数および選出方法も現行に合わせて改定すること、委員の任期を 1 年から 2 年にすること、大学の組織図上、FD 委員会が大学評価会議の下に配置されたことを受けて、その旨を規程上に反映させることが出席者間で合意された。

3. 学友会執行部との連携について

FD 委員会と学友会執行部は今年度の FD 研修や FD 座談会において、企画段階から連携関係を組んでいる。このことについて、より精緻な取り決めが必要ということになった。そこで、FD 委員会と学友会執行部はそれぞれ独立した団体として相互認識すべきであり、現時点で学友会執行部が FD 委員会に吸収されているわけではないこと、事業の主体はあくまで FD 委員会にあり、事業推進の責任は FD 委員会が負い、学友会執行部はあくまで趣旨に賛同したうえでそこに協力する連携団体であること。事業を進めていくに当たって、両者には自ずと役割分担があり、学友会が学生を代表する自治組織であることを今後とも両者ともに尊重していくこと。ただし、連携事業をするからには、学友会執行部にも大学の運営組織や意思決定の仕組みについて最低限の知識を有していることが必要との点で合意がなされた。

4. その他、連絡事項等

翌日 16 日（木）17 時半に学友会執行部との協議のため、学生ホールに集合すること確認された。

以上。

2011 年 6 月 16 日

文責：佐藤

第十三回 FD 委員会 議事録

日時：2011年6月16日（木）、17h30-21h00

場所：第四ゼミ室

出席者：

(FD 委員・企画室)：神谷、山本、仲、佐藤、倉山

(学友会執行部)：大野、田鹿、徳田、福井、藤原

議題：

1. FD 活動の目的について
2. 座談会年間テーマと個別の座談会テーマについて
3. その他、連絡事項

神谷委員長から開会が宣言され、佐藤企画室長より、前回（第12回）会議の審議結果および第1回大学評価会議の決定事項について報告がなされた。

1. FD 活動の目的、目標の再確認

大学評価会議で配布された学長メモを元に、FD 活動の定義や目的について確認が行われた。また、今年度のFD研修やFD座談会において企画段階から連携関係を組んでいるFD委員会と学友会執行部は、それぞれ独立した団体として相互認識すべきであり、学友会執行部がFD委員会に吸収されているわけではないこと、FD事業の主体はあくまでFD委員会にあり、事業推進の責任はFD委員会が負うこと、学友会執行部はあくまで趣旨に賛同した上でそこに協力する連携団体であること。事業を進めていくに当たって、両者には自ずと役割分担があり、学友会が学生を代表する自治組織であることを今後とも両者ともに尊重していくこと。事業の性質上、性急に事態の進展を図ることは得策でない場合が多いことなどが双方で確認された。

2. 座談会年間テーマと個別の座談会テーマについて

学友会執行部大野君よりプレゼンがあり、座談会に関する基本的理解について教員と学生の両者間で確認作業が進められた。学友会執行部からは、“共有”の対象として“教育目標”の共有を優先したいとの基本的な要望が出された。教員側の基本的な了解は得られたが、同時に、佐藤より大きな視点で学園の意識共有を推進する必要があるとの指摘がなされた。

また、学友会執行部としては、「やわらかな感性、ゆたかな美意識、かけがえのない自分の創り方」というテーマへの思い入れがあるとの意見が出されたが、この問題に関しては十分に合意に至ることはできなかった。そこで、テーマについてはもう一度会合を開いて、そこで最終決定することとなった。

3. その他、連絡事項等

- ①次回の学友会執行部との合同会議は6月22日（木）16時半から行われ、学生ホールに集合することが決められた。
- ②また、7月6日の第一回目座談会の前にもう一度、打ち合わせのために会議を開くべきことが申し合わされた。

以上。

2011年6月17日

文責：佐藤

自己点検評価・FD 合同委員会
(第四回自己点検評価委員会・第十四回 FD 委員会) 議事録

日時：2011年6月21日(火) 16h30-18h30

場所：第三会議室

出席者：

(総務部) 新谷、大前

(自己点検評価委員) 森野、土井、森山、入佐、坂上、木田、佐藤

(FD 委員) 仲、山本、神谷、倉山、佐藤

(企画室) 佐藤

議題：

1. 平成23年度の自己点検評価委員会の報告書方針

(自己点検評価報告書か相互点検報告書か)

23年度については、自己点検評価報告書とする。

2. 第三者認証評価受審までのタイムスケジュール、今年度の作業スケジュールについて

(特に事務局の作業スケジュールについて)

受審までに報告書の本書、データ編、資料編と3つをまとめる必要がある。またその手順について確認を行った。データ編については、事務局が主となり、23年度バージョンとして作成する。作業については、評価項目を確認し、関連各部署へ6月中にデータ依頼をする。

3. 報告書データ編の編成作業開始と作業分担について

平成23年度前後期の授業アンケート実施方針について

(前期に授業アンケートを実施するか?後期に実技系演習科目の授業アンケートのみ実施するのか?)

アンケートを実施しなかった場合のリスクやアンケートの目的、項目の内容の変更、また項目の内容が前期、後期で異なることは統一的な評価とするのに支障はないか、フィードバック後の活用の仕方など種々意見があったが、結果として多少の変更も視野に入れ、講義系のみ前期に実施、後期は全科目について実施することとした。

4. 新大学評価基準(日本高等教育評価機構)の基準1、基準2の検討

佐藤企画室長から大学評価基準と新大学評価基準意に照らした本学の現状に関する覚書(上)等の内容について説明がされた。評価項目について各委員に分担する等の意見もあったが、関連部署に依頼をする前段階として大学評価基準と新大学評価基準について次回会議までに各委員は前回受審した評価資料等のチェック、また25年度の受審にあたり課題となるであろう項目、抜け落ちていると思われる事項等についてリストアップし、全委員が問題共有できるよう6月中に気づいた点を総務課までメールで提出していただくこととした。

5. 連絡事項・その他

次回会議日は7月5日(火) 16時30分 第2会議室で開催予定

以上。

第十五回 FD 委員会 議事録

日時：2011年6月22日（水）、17h30-21h00

場所：第四ゼミ室

出席者：

(FD 委員・企画室)：神谷、山本、仲、佐藤、倉山

(学友会執行部)：大野、田鹿、徳田、福井、藤原

議題：

1. FD 活動の目的について
2. 座談会年間テーマと個別の座談会テーマについて
3. その他、連絡事項

1. 第一回 FD 座談会の概要について

審議の効率に配慮して神谷委員長より、試案が出され出席者間で検討の結果、第一回目の FD 座談会を以下の概要で行うこととなった。なお、時間については予定よりも 30 分程度長引く可能性も考慮することが申し合わされた。

日程 : 2011年7月6日（水）、17h00-19h00
場所 : 講堂（第二候補として第6演習室）
お題 : 「授業」に関するテーマを設定する
メンバー : FD 委員（5名）、学友会執行部（6名）、教員有志（若干名）、一般学生
(各 FD 委員が最低限1名は連れてくる)

2. 二回目以降の座談会のテーマについて

委員長の試案を出席者で検討した結果、次のテーマに合わせて各回の題名を適宜考えることとし、出席者の賛同を得た。

第2回（9月実施） : 合評
第3回（10月実施） : アンケート
第4回（11月実施） : 制作展（卒業制作展と進級制作展の両方）
第5回（12月実施） : 大学生像

なお、第3回アンケートでは、FD 研修で定められる新方式のアンケートのプロモーションとしての位置づけもあること、第4回までのテーマ設定では現状確認の比重が重くなる可能性があり、年度最後の第5回ではむしろ理想共有の方向性を強める必要があること、各座談会の締めくくりで、現状把握から理想共有への方向性を示す必要があることなどが確認された。

3. 第一回 FD 座談会の段取りについて

総出席者数は 50 名前後と考えられ、その想定を元に座談会の進行スケジュールを出席者間で検討した結果、下表のとおりにとまとまった。

①	FDとは？	10分
②	座談会の基本的ルールの確認	
③	グループ・ディスカッション	30分
	(休憩)	10分
④	グループ毎のプレゼンテーション	30分(～60分)
⑤	全体討議	30分
⑥	まとめ	10分

また、座談会の進行スケジュールに付随して以下の事項が申し合わされた。

- ・グループ・ディスカッションは最大で5グループまでとすべきこと
- ・各グループはホワイトボードにディスカッションの結果をまとめ、プレゼン時に利用すること
- ・学友会執行部はグループ・ディスカッション時には各グループに分かれて議論に加わり、議論がテーマを大きく外れないように配慮すること、全体討議時には議論の活性化のためにファシリテーターとしての役割を演じること
- ・コーヒー・紅茶はFD委員側で準備し、その他の飲み物については参加者が持参すること

4. 第一回FD座談会の題名について

案内チラシにおいて、「授業について」をメインに据え、以下の出席者からのアイデアを周りに散りばめるような方式でレイアウトをすること、作成は神谷委員長に一任することで出席者の賛同が得られた。

現在の授業って？	授業とわたし	授業ってな～に？
授業っておもしろい？	テンションの上がる授業	授業ねむくない？
ねむらない授業	授業楽しんでる？	授業たのしめてる？
授業と眠りの深さとの関係	ブルータス、お前もか？	俺のはなしを聴け！
授業つまらん		

5. 授業アンケートの方針に関する一部変更

前回(第14回)のFD委員会(自己点検評価委員会との合同会議)において、今年度の授業アンケートの方針についてさらなる検討を要する事案について、FD委員5名での話し合いを行った。

- ①前期実施することとした講義系科目の授業アンケートについて、専任教員の担当科目に対象を絞らず、非常勤教員担当の全科目についてアンケートを実施すべきことが申し合わされた。
- ③今年度より新たな方針でアンケートを行う科目は、1、2年次の実技系演習科目に限られる予定であった。しかし、実情として演習科目が技能教育に比重を置いているケース、実習科目において学生の思考力養成を実質的に行っているケースが多く、しかも実技系演習科目を担当している教員が非常勤であるケースが多いことも判明した。そこで、今年度は予定していた適用範囲を実習科目にも拡大することが望ましいとの意見で一致した。また、教務委員会には、実習と演習に関する学内のガイドラインを策定し、運用管理のさらなる徹底を依頼することとした。

6. その他、連絡事項等

- ①第1回座談会の撮影およびブログ等の作成については広報室との連携を再確認すべきことが申し合わされた。

②次回の学友会執行部との合同会議は、6月30日（木）16時半～、学生ホールに集合となった。

以上

2011年6月23日

文責：佐藤

第十六回 FD 委員会 議事録

日時：2011年6月30日（木）、16h30-20h00

場所：第四ゼミ室

出席者：

(FD 委員・企画室)：神谷、山本、仲、佐藤、倉山

(学友会執行部)：大野、田鹿、福井、徳田、藤原、三好

議題：

1. 第一回 FD 座談会の展開に関する予測
2. FD 研修案の変更について
3. その他、連絡事項

1. 第一回 FD 座談会の展開に関する予測

「授業」をテーマにした座談会の展開をある程度予想し、テーマからあまりに外れた議論や、細部の議論で終始してしまわないようにグループディスカッションにおいてどのような意見が出されるのか、それに対する対応をいかにすべきか話し合いを行った。以下に、予想される意見とその対応について整理する。

	予想意見	対応
①	講義中のおしゃべり、出欠管理の杜撰さ、遅刻者の管理、成績管理の問題	管理の厳格化と方針の一本化は確かに重要。しかし、もっと重要なのは大学という共同体を構成しているという意識、履修意識の共有であり、無闇に管理することは大学の本来の姿ではない。大学における勉学は、単位取得のためだけにあるわけでない（単位の取りやすい科目は私語がうるさい、）
②	講義が面白くない、チンプンカンプン、何を意図しているかわからない、講義に参加する意欲がわからない	教員と学生との意識の乖離の結果であるカリキュラム・ポリシーを理解していない結果でもある。問題は、教員の側にも学生の側にもある。
③	なぜデザインに学生にデッサンが必修なのか	
④	大学の勉学について、それを就職やスキルの問題にすり替えてしまう傾向があるのではないか？	
⑤	成果物だけを求めて共有すべき目標を示してくれない授業が多い	
⑥	シラバスでは授業の内容が分からない講義科目がある。	
⑦	イラストレーターやフォトショップのよ	

	うな情報技能に関する授業は今のままでいいのか？	
⑧	面白い実習とは成果が学習者自身に見える授業	自己チェックの重要性を教員と学生で共有
⑨	自由課題で悩む学生が多い、特に卒業直前、卒業後に自分の方向性や表現に気づく学生がいる	重要な問題であるが、アート論に発展すると、短い時間がたりなくなるので、早めに切り上げる
⑩	教員側が座談会を仕切ってしまうのか？	冒頭で、学生の意見をなるべく引き出すように各先生方をお願いしておく

2. FD 研修案の変更について

当初の計画を変更して、一日目に四大デザイン学科、造形学科、短大美術学科の1、2回生の実技授業を対象とした授業アンケート項目の検討を行い、二日目に四大3、4回生、短大専攻科学生を対象とした授業アンケート項目の検討を行うこととした。

3. その他、連絡事項等材については、以下の表の通りに調達することとした。

ICレコーダー	大畑、仲、大野、佐藤、総務課
模造紙	佐藤
マジックペン	山本、佐藤
マグネット	佐藤
ドラムコード	倉山
延長コード	山本
紙コップ	佐藤
ゴミ袋	佐藤
コーヒーサーバー	神谷
ポット	神谷
コーヒー、紅茶	神谷が調達
雑巾	神谷
クーラーボックス	学友会
ソフトドリンク	神谷
ビデオカメラ	固定用(倉山)×3 (撮影は広報室に依頼)
マイク	総務課
プロジェクター	山本
スチールカメラ	倉山×1

なお、ソフトドリンクは前日までに学友会冷蔵庫に運び入れることとなった。

②座談会当日の各自の行動

FD委員と学友会執行部もグループディスカッションに参加することとした。その際に、学友会執行部はタイムキーパーの役割も果たすこととなった。

③会場について

神谷先生が7月1日に講堂の暑さを確認し、場合によっては第6演習室への会場変更も検討することとした（後に、講堂のクーラー使用が認められ、会場は予定通り講堂となった）。

④当日の集合時間について

教員は原則として16時に講堂に集まること、学友会執行部は省エネルギー推進委員会出席の関係で、16時半に集合する予定であることが確認された。

⑤座談会終了後のアンケートについて

アンケートは神谷先生が作成すること、アンケートには所属学科、分野、系、領域、学年を記入する欄を設けることとなった（後日、神谷先生多忙につき、作成は佐藤が引き受けることとなった）。

以上

2011年7月6日

文責：佐藤

第十七回 FD 委員会 議事録

日時：2011年7月7日（木）、12h00-12h40

場所：デザイン学科共同研究室

出席者：神谷、山本、仲、佐藤（欠席：倉山）

議題：

1. 講義系科目授業アンケートの項目検討
2. 第一回 FD カフェのブログ作成について
3. その他、連絡事項

1. 講義系科目授業アンケートの項目検討

アンケート項目の大幅な改変は学内のコンセンサスを得ていない現段階では望ましくないとの意見で一致した。そこで、方針として、①改変は最小限にとどめる、②「設備・環境の適正度」に関しては学生支援課が実施すべき学生満足度調査に移管して、授業アンケートの項目から外す、③試験的に、新しい視点からの質問項目を加えてみる、とし、佐藤が叩き台を取りまとめて7日15時40分までに各委員にメールで送信し、17時までに確定させて総務課に提出することとなった。

2. 第一回 FD カフェのブログ作成について

ブログ作成の責任者を委員中から選ぶ必要があることから、倉山委員の意向を確認することとした。また、FDカフェ前半のグループディスカッションの内容は雑駁であり、これに関する記述で紙面を占めることを避けること、後半の全体討議の内容を中心としてブログを作成することなどが申し合わされた。また、江村先生のアイデアとして、座談会の模様を生中継でストリーミングする可能性を委員会として積極的に検討することも申し合わされた。

3. その他、連絡事項等

学友会執行部が現在、多業務を抱えている状況であり、負担軽減をFD委員会としても検討して欲しいとの坂田学生部長の要望があったことが報告された。

以上

2011年7月7日

文責：佐藤

第十八回 FD 委員会 議事録

日時：2011年7月12日（火）、17h30-19h30

場所：佐藤研究室

出席者：神谷、山本、佐藤

欠席者：倉山（体調不良のため）、仲（香川方面での入試業務のため）

議題：

1. 7月10日FD研修の反省点
2. その他、連絡事項

1. 7月10日のFD研修の反省点

- ①FD座談会には綿密な事前のシミュレーションが功を奏したことを踏まえ、その作業をしなかったために無用の混乱を招いたものとの反省点が挙げられた。また、FD研修の趣旨に関して一般教員の理解を得るための対策が不足していたとも考えられ、24日に向けて一度教員だけで集まって、綿密なシミュレーションを行うこととなった。
- ②10日の終了時では、アンケート項目の決定まで至っておらず、項目設定の方針もグループ毎に幅のある状態であった。このままの状態では24日を始めた場合、成案を得る十分な時間が確保できるか心配との声が上がった。そこで、10日のグループディスカッションを踏まえて、24日までにFD委員会として叩き台となる案を用意し、そこを出発点として議論を再開することとなった。
- ③休日に研修日を当てたためか、お茶はないか、長すぎるといった不満が見受けられたことに着目、参加者に対する配慮、不満への対策として24日にはソフト・ドリンク、菓子などを用意することとした。また、弁当を出すことができるか、総務課の見解を確認することとした。
- ④朝早い開始時刻は参加者への負担となることを考慮して、24日の開始時刻を10時からに変更することとした。

2. その他、連絡事項等

- ①7月24日のFD研修では、グループディスカッションの組み分けを、学科毎のくじ引きで行うこととした。
- ②同日の参加学生確保のため、神谷先生がチラシを用意することとなった。
- ③次回のFD委員会の議題は24日に向けたシミュレーションとし、開催日時は20日から22日の17時半以降に設定することとした。

以上

2011年7月15日

文責：佐藤

第十九回 FD 委員会 議事録

日時：2011年7月20日（水）、17h00-20h00

場所：グラッチェ

出席者：神谷、仲、倉山、佐藤

欠席者：山本（課外授業のため）

議題：

1. 7月24日FD研修のシミュレーション
2. その他、連絡事項

1. 7月24日FD研修のシミュレーション

7月24日の一日でアンケート項目を決定するために、FD委員会として前回の議論を踏まえて叩き台を作っておくことで委員の意見が一致した。そこで、叩き台をどのような方針でまとめるべきかを協議し、以下の方針にまとまった。

■記名式

■年間4回実施（中間、期末）

■質問は、「技能」「思考」「社会性」の3つの項目について。学生自身が自らを振り返ることができるような質問とする。回答は、5段階評価に○をつける形式に加え、○をつけた理由を具体的に記述する「自由記述欄」を設ける。質問数は、アンケート全体として6個以内とする。（たとえば、技能について2つ、思考について3つ、社会性について1個、合計6個の質問というように）そこで、質問項目について、具体的に文章化し、次回の会議までに各委員が持ち寄ることとした。

2. その他、連絡事項等

- ①次回会合は7月22日（金）の12時から12時50分まで、デザイン学科共同研究室にて開催することとなった。
- ②21日（木）までに各自アンケート案を作成し、相互にメール送信することとなった。

以上

2011年7月23日

文責：佐藤

第十九回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 7 月 20 日（水）、17h00-20h00

場所：グラッチェ

出席者：神谷、仲、倉山、佐藤

欠席者：山本（課外授業のため）

議題：

1. 7 月 24 日 FD 研修のシミュレーション
2. その他、連絡事項

1. 7 月 24 日 FD 研修のシミュレーション

7 月 24 日の一日でアンケート項目を決定するために、FD 委員会として前回の議論を踏まえて叩き台を作っておくことで委員の意見が一致した。そこで、叩き台をどのような方針でまとめるべきかを協議し、以下の方針にまとまった。

■記名式

■年間 4 回実施（中間、期末）

■質問は、「技能」「思考」「社会性」の 3 つの項目について。学生自身が自らを振り返ることができるような質問とする。回答は、5 段階評価に○をつける形式に加え、○をつけた理由を具体的に記述する「自由記述欄」を設ける。質問数は、アンケート全体として 6 個以内とする。（たとえば、技能について 2 つ、思考について 3 つ、社会性について 1 個、合計 6 個の質問というように）そこで、質問項目について、具体的に文章化し、次回の会議までに各委員が持ち寄ることとした。

2. その他、連絡事項等

- ①次回会合は 7 月 22 日（金）の 12 時から 12 時 50 分まで、デザイン学科共同研究室にて開催することとなった。
- ②21 日（木）までに各自アンケート案を作成し、相互にメール送信することとなった。

以上

2011 年 7 月 23 日

文責：佐藤

第二十回 FD 委員会 議事録

日時：2011年7月22日（金）、16h30-18h30

場所：グラッチェ

出席者：山本、神谷、仲、倉山、佐藤

議題：

1. 叩き台の扱いについて
2. 7月24日FD研修に向けた最終調整
3. その他、連絡事項

1. 叩き台の扱いについて

7月24日のFD研修の叩き台候補として神谷案、佐藤案が出されたが、具体性が高いアンケートよりも、当日参加者に検討・討議する余地の大きい叩き台の方が、ディスカッションを通して意識共有を図るというFD研修の企画意図に相応しいとの見解が共有され、神谷案を採用することとなった。

2. 7月24日FD研修に向けた最終調整

アンケート項目を「技術」、「思考」、「社会性」の三領域に分けたことには、参加者から多様な意見が出されることが予想される。この議論に時間を取られることを避ける意味で、FD委員会が前日の議論を踏まえ、その最大公約数として提案したものであること、分野・領域の実情に合わせたい場合はその分野・領域で独自のアンケートを並行して実施することを想定していることを伝え、出席者の理解を求めることとした。

また、当日のタイム・スケジュールについて、委員間で話し合いを行った。その結果をまとめ、神谷委員長が教職員当てにメール連絡することとなった。

3. その他、連絡事項等

- ①7月22日当日のソフトドリンクは神谷委員長が用意することとなった。
- ②学生参加者が少ないと見込まれるため、各委員は学生たちに最終の呼びかけを行うこととした。

以上

2011年7月23日

文責：佐藤

第二十一回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 7 月 24 日（日）、16h30-18h30

場所：グラッチェ

出席者：山本、神谷、仲、倉山、佐藤

議題：

1. 実技系授業アンケートの確定に向けて
2. 今後の FD 活動について
3. その他、連絡事項

1. 実技系授業アンケートの確定に向けて

同日行われた FD 研修での各グループのディスカッション内容を記したメモが全委員に配布された。その上で、神谷委員長が研修結果を踏まえてアンケートを作成すること、各委員がチェックしたのちに、全教員にメール送信すること、メール送信を 2 回経て、意見聴取が完了した時点でアンケートを確定させること、9 月 14 日の教授会で報告すること、以上の方針が確認された。

2. 今後の FD 活動について

今年度後期には、教授会後の時間帯を利用して講演・ディスカッションなどを行うこととした。その際に、本学学生がお世話になっている精神科医を講師に招くなどの案が出された。また、大規模な講演会、あるいは、シンポジウムの開催の可能性については継続的に調査研究を行うこととした。以上の仮の方針を、27 日の大学評価会議で告知することとした。

3. その他、連絡事項等

- ①FD 研修に職員の参加が得られなかったことについては、日程の都合もありやむを得ないものとする。今後は企画室との連携のもとで職員の参加を模索することとした。
- ②授業アンケートについての確定に向けて、その前に FD 委員会を開催すべきであるという点で合意が得られた。

以上

2011 年 7 月 28 日

文責：佐藤

第二十二回 FD 委員会 議事録

日時：2011年9月2日（金）、16h00-18h00

場所：短大デザイン共同研究室

出席者：山本、神谷、仲、倉山、佐藤

議題：

1. 実技系授業アンケートの FD 委員会案に関する検討
2. 第一回 FD 座談会（FD カフェ）ブログ作成について
3. その他、連絡事項

1. 実技系授業アンケートの FD 委員会案に関する検討

神谷委員長作成の原案に基づいて審議が行われた。基本となる考え方について委員間で相違していないことが確認された上で、①「(1) 準備計画」については原案通り、②「(2) 学習・準備」についてはそれぞれの設問に自由記述欄を設けること、③「思考力」の設問をどのような具体的表現で設定するか検討の結果、「思考力」という表現をそのまま用いること、各教員や学生に向けた記述上のガイドラインを補足として定め、混乱の起きないようにすること等が申し合わされた。

また、数値を問う設問と記述を求める設問をペアにする場合、数値設問を記述設問の後ろにおいてはどうかとの提案があり、委員間の了承を得た（後日、この順番では設問がうまく設定できないことが判明、数値設問を記述設問の前に置くこととした）。以上の検討を受けて、神谷委員長が修正案を作成し、近日中に委員にメール送信することとした。

2. 第一回 FD 座談会（FD カフェ）ブログ作成について

倉山委員より、前回 FD カフェの音声記録を起した原稿が配布され、内容確認が求められた。委員からは基本的な了承が得られた。また、グループ討論の内容はなるべく簡素に記述し、全体討議の内容を中心にブログを編集する方針が基本的に了承された。

3. その他、連絡事項等

①次回 FD 座談会を9月28日（水）に開催すること、座談会の企画運営については前回同様、学友会執行部の参加を求めること、学友会との打ち合わせは9月22日（木）を予定することが申し合わされた。

以上

2011年9月11日

文責：佐藤

第二十三回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 9 月 22 日（木）、17h00-19h00

場所：第四ゼミ室

出席者：

(FD 委員・企画室)：神谷、山本、仲、佐藤、倉山

(学友会執行部)：田鹿、福井、徳田、藤原（最初の 10 分のみ）、三好

議題：

1. 第二回 FD 座談会の最終打ち合わせ
2. 座談会の進行、運営について
3. その他、連絡事項

1. 第二回 FD 座談会「合評会おもしろい？」の最終打ち合わせ

下記の通り、7 月 28 日（水）17 時より、講堂にて FD 座談会を開催することとした。

①当日のタイムスケジュール

時刻	進行
17:00	スタート あいさつ 趣旨説明 グループ分け（最大 5 グループまで）
17:20	グループディスカッション（30 分）
17:50	グループ毎のプレゼンテーション（30 分）
18:20	全体ディスカッション
18:50	まとめ
19:00	終了

②必要機材と手配

IC レコーダー	大畑、仲、佐藤、総務課
ドラムコード	倉山
延長コード	山本
紙コップ	佐藤
ゴミ袋	佐藤
コーヒーサーバー	神谷
ポット	神谷
ゴミ袋	佐藤
コーヒー、紅茶	神谷
ポット	神谷
雑巾	神谷
ソフトドリンク	神谷
ビデオカメラ	倉山
マイク	神谷

プロジェクター	山本
スチールカメラ・三脚	山本
ホワイトボード	神谷 × 4、倉山 × 1
スクリーン	倉山

なお、ソフトドリンクは前日 16 時に学友会冷蔵庫に運び入れることとなった。

③その他の確認事項

- ・当日に学食にチラシを配布する
- ・後日、記録映像を学食で流すことも検討する
- ・グループ分けに際しては、まず教職員をグループに分け、その後、学生には個々に好きなグループを選ばせる。その際に、学友会執行部はタイムキーパーの役割も果たすこととなった
- ・全体会議では極力、誘導的な司会進行を避けるようにする。ただし、議論テーマの拡散を避ける意味で、冒頭に何が本質的な問いかを参加者に問いかけて、議論を始めるようにする

2. 連絡事項・その他

学友会は当日開始時刻まで参加者の声掛けを行う。

以上
2011 年 9 月 28 日
文責：佐藤

第9回自己点検評価委員会・第24回FD委員会（合同）議事録

開催日：平成23年10月6日 16:30～18:30

場所：第三会議室

出席者（敬称略）：

（企画室長）佐藤

（自己点検評価委員）森山、入佐、坂上、木田、森野、土井

（FD委員）山本、神谷、倉山、仲

（総務部総務課）午居、新谷、大前、

配布資料：①レジュメ

②実技系科目授業アンケート実施に関するガイドライン（教員用）

③実技系科目授業アンケート記入要領

④授業アンケート

議題

1. 実技系授業アンケートの集計方法について
2. 実技系授業アンケートの分析方法について
3. 実技系授業アンケート結果の自己点検報告書への反映について
4. 実技系授業アンケート結果のフィードバックの方策について
5. 連絡事項・その他

●佐藤企画室長から下記事項について学長に提案した旨の報告がされた。

1. 将来構想部会の立ち上げの提案

（自己点検委員会が粛々と作業するための基本的な項目等について議論し、決定する部会）

●議事

実技系授業アンケートの今後の処理等について、佐藤企画室長からアンケートの配布、回収、分析等、種々問題が予想されるのが、問題点の洗い出しと並行しながら実際の作業を進め、方針を決定していく。ただし今回実施にむけての方針は仮決定とし、自己点検活動の進展に従って必要に応じて修正していくとの説明があった。続いて神谷先生からアンケート（実習、演習）を実施するにあたり、その趣旨説明

(i. 今までの形式的なアンケートから今後の改善につながる有効なアンケートの検討

ii. 学生の向上心の低下もあり、アンケートを利用して向上心を促せないか) がされた。また既存のアンケートからの変更点（3つ）として、下記の通り説明がされた。

i. 学生の氏名記名欄を設ける。（個々の学生に対し、担当教員は具体的に今後の対策を立てられる。）

II. 学生が教員に対し評価する性格であったものを、学生が自ら自分の学ぶ姿勢などを自己点検する。

iii. 自由記述欄の追加（具体的内容の把握）

出席者からは、授業アンケートは成績評価とは無関係である旨を学生に周知する必要があるとの指摘がなされ、そのことを含め、FD委員会が先に配布したガイドラインの補足説明を教授会において行うことになった。引き続きアンケート実施に向けて、実施時期、配布方法、配布時の注意点、回収方法、集計方法、集計者、結果のまとめ方、分析方法、結果の公表方法等の検討を行った。

- ・配布、回収
 - i. 配布・・・授業（後期）はじめに学生へはアンケートの趣旨を説明し、配布する。
 - ii. 配布時の注意・・・教員には学生への注意点等について、説明資料を作成する。
（神谷先生）
 - iii. 回収は、学期末とする。
 - iv. 回収したアンケートは原本を教員が保管し、コピー版は総務課が保管

- ・大学院も対象とするか・・・FD委員会で検討する。

- ・集計作業はFD委員会で行うものとする。（ただし、実技系科目の授業アンケートの記述欄については、専任教員が分野、領域コースごとに担当学生のアンケートを集計することにする。提出されたデータはFD委員会が整理する。数値で答える設問および講義系科目アンケートについては事務局でまとめる）

- ・データの公表

公表については総務部と相談しながらFD委員会で検討する。
（詳しいデータについては学内のみの公表とする）

- ・講義 非常勤教員の同意が得られておらず、今年度の結果公表は困難 まとまりにくい場合は、次年度に回す 非公表

- ・実技系はアンケート内容が違うので、試験的に公表する。非常勤教員にも理解を求めていく。

- ・ホームページでは授業アンケートを実施したという報告および全体的な集計結果程度にとどめる。

- ・今後の非常勤教員への対応

非常勤教員にも実施していただく方向で、ただし契約のときに趣旨説明し、願います。
（年度初めに了承を得る）

- ・アンケートに関する報告会・・・教授会、FD研修会などで実施

第二十五回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 10 月 6 日（木）、19h00-21h30

場所：グラッチェ

出席者：神谷、山本、仲、倉山、佐藤

議題：

1. 第三回 FD カフェの日程・会場およびテーマについて
2. 教授会後の FD について
3. FD ブログ制作の分担体制について
4. FD 委員会規程の見直しについて
5. その他・連絡事項

1. 第三回 FD カフェの日程およびテーマについて

①日程・会場について

教職員、学生の参加を得やすい曜日は水曜日と木曜日であり、他の会議予定も考えあわせて 10 月 20 日（木）を第一候補とした。当日に会議を予定している制作展委員会とは、委員長間で調整を図ることとした。また、会場は第 6 演習室を利用することとなった。

②テーマについて

当初は「授業アンケート」が予定されていた。しかし、教員側（特に FD 委員側）が学生を説得する構図になり、自由闊達な意見交換が望めないとの一致した見解から、予定を変更することとした。松尾橋付近の河原を会場にして、焚き火を囲みながら FD カフェを開催するという案も出されたが、雨天の場合の対応、参加者の確保の観点から今回の実施は見送ることとした。

最終的に、前回（第二回）では実技教育に焦点を当てた分、今回は講義系授業に焦点を当てるべきとの意見で一致した。テーマは「講義おもしろい？」に決定した。

2. 教授会後の FD について

当初は複数回の開催を予定していた。しかし、参考とすべき学生参加型 FD 活動を展開している他大学の事例が少なく、当初の予定が難しいことが分かったこともあり、当面は今年度一回の開催を方針とすることとした。教授会後の FD の内容としては、学生相談員のうちどなたかをお招きし、学生相談員から見た本学学生の状況を 15 分程度お話しいただき、その後は講演者と出席者の間の自由な質疑応答の時間とすること、時間は全体で 1 時間程度とすることで意見が一致した。それを受けて、神谷委員長が学生支援課に問い合わせを行うこととなった。

3. FD ブログ制作の分担体制について

ブログ作成の倉山先生の負担を考え、原文の文字起こしと校正を佐藤研究室、ページ加工やブログの掲載を倉山研究室が担当し、それぞれ学生等の手を借りて進めることとした。

4. FD 委員会規程の見直しについて

緊急の案件ではないため、学内の状況を見守りつつ検討を継続することとなった。

5. その他・連絡事項

- ①今年度着任した本学の専任教員は楠林先生、岩崎先生、上田先生の三名であり、いずれも教育経験が豊富な中での着任である。従って、初任者FD研修という位置づけで、FD委員がインタビューを申込み、その内容をブログの形で学内外に公表してはどうかとの提案がなされ、佐藤が中心となってコーディネートに当たることとなった。

以上

2011年10月7日

文責：佐藤

第二十六回 FD 委員会 議事録

日時：2011 年 11 月 22 日（火）、18h30-21h30

場所：グラッチェ

出席者：神谷、山本、仲、倉山、佐藤

議題：

1. 第四回 FD カフェの日程・会場およびテーマについて
2. 教授会後の FD 講演会の日程について
3. 今年度新任教員への取材について
4. その他・連絡事項

1. 第四回 FD カフェの日程およびテーマについて

11 月 25 日（金）17 時半より中庭にて第四回 FD カフェを実施することが確認された。当日の気温等が懸念されることから、会場については当日に臨機応変に対応することが申し合わされた。また、学生に周知をすることも申し合わされた。

2. 教授会後の FD 講演会の日程について

12 月に開催に適切な日程が組めないことが判明した。そこで、2 回の開催を 2 月中に行う方針に変え、準備作業を進めることとした。

3. 今年度新任教員への取材について

委員がそれぞれ多忙で相互の予定調整が煩雑であることから、佐藤が単独で打ち合わせおよび取材を当該教員との間で行うこととした。

4. その他・連絡事項

特になし。

以上

2011 年 11 月 23 日

文責：佐藤

第二十七回 FD 委員会 議事録

日時：2012年1月20日（金）、18h30-20h00

場所：グラッチェガーデンズ

出席者：佐藤、山本、仲、神谷

議題：

1. 3 / 2（金）教授会後のFD講演会について
2. FD研修の内容について
3. 実習演習アンケート自由記述欄の要約について
4. 活動報告書について
5. その他・連絡事項

1. 3 / 2（金）教授会後のFD講演会について

立命館大学 沖裕貴先生

「DP、CPの作成方法と運用方法、それにもとづくカリキュラム構成の作成方法」

上記の内容で申請することとなった。

2. FD研修の内容について

- ・実習・演習アンケートの検証をおこなう。
- ・教員も同じアンケートに取り組み、材料とする。
- ・学生も参加。
- ・2012年4月17日（火）16時～

上記のとおり予定とした。

3. 実習演習アンケート自由記述欄の要約について

- ・実習・演習アンケートの自由記述欄の要約は専任教員でおこなうことになった。
- ・要約用紙は佐藤委員が作成することになった。

4. 活動報告書について

- ・大西さんがイラストレータでPDFファイルとして作成することを確認した。
- ・FD Caféに関する画像は倉山委員へ提出、FD研修に関する画像は佐藤委員へ提出することを確認した。
- ・編集作業は佐藤委員がおこなうことを確認した。

5. その他・連絡事項

- ・FD年次計画案を佐藤委員が作成することを確認した。
- ・佐藤委員より、FD関連セミナー、フォーラムの開催情報の収集と、積極的に参加していくことの提案があり、実施していくことになった。

- ・ 山本委員より、授業参観の推進、FD 委員会専用掲示板の設置、FD Café のストリーミング配信の提案があった。

以上

2012 年 2 月 25 日

文責：神谷

第二十八回 FD 委員会 議事録

日時：2012年2月23日（木）、9h00-12h00

場所：短大デザイン研究室

出席者：佐藤、山本、仲、倉山、神谷

議題：

1. 2012年度年次計画について
2. 中期目標について
3. 3/2（金）教授会後のFD講演会の段取りについて
4. 実習演習アンケート、FD Café アンケートの集計と公開について
5. その他・連絡事項

-
1. 2012年度年次計画について

佐藤委員作成の年次計画案について検討し、一部編集を加えた。編集後の計画案については、次回FD委員会で確認することになった。

2. 2012年度年次計画について

将来構想部会作成のFD活動に関する中期目標案について検討し、下記のとおりになった。

中期目標

- 学生の主体的な学びを促す自己点検型授業アンケートを継続的に実施し、成果を毎年検証する。
- 授業アンケートの集計・解析結果について、継続的に検討する。
- 大学院において授業評価アンケートを実施する。
- 教職員、学生の意見交換を行い、大学人としての自覚を意識するよう促す。
- ピア・レビュー導入の可能性について実例調査を行い、導入が可能な範囲で実施する。
- 職員の職能向上に関わるSD活動との連携を強化する。

3. 3/2（金）教授会後のFD講演会の段取りについて、下記のとおり決定した。

- ・ 佐藤委員と神谷委員が17時頃に沖先生を講師控室へお迎えする。
- ・ 司会は佐藤委員と神谷委員がおこなう。

4. 実習演習アンケート、FD Café アンケートの集計と公開について実習アンケートの集計結果については、以下のとおりに扱うこととなった。

- 掲示板※とホームページでの公開（公開期間は2012年4月から一ヶ月間）
ただし、数値集計結果のみの公開とする。
掲示板※には、印刷した集計結果を公開。H.P.には、デジタルデータを公開。
※FD委員会の掲示板を作成することを検討中

- 書類による公開

数値集計結果と自由記述の要約した書類を総務課で保管し、希望者が閲覧できるようにする。持出禁止。
公開期間は2012年度前期。

● 活動報告書による公開

数値集計結果と自由記述の要約を掲載する。ただし、自由記述の要約については、傾向を記す程度とする。

5. その他・連絡事項

次回 FD 委員会は 3 / 9 (金) 14 時を予定。議題は下記のとおり。

議題 1. FD Café アンケート、FD 研修会アンケートの集計作業について

議題 2. 2012 年 4 月 1 7 日 FD 研修会の内容について

以上

2012 年 2 月 23 日

文責：神谷

第二十九回 FD 委員会 議事録

日時：2012年3月13日（火）、13h00-17h00

場所：短大デザイン研究室

出席者：佐藤、山本、倉山、神谷

議題：

1. FD Café アンケート、FD 研修アンケートの集計作業について
2. FD 研修について
3. FD Cafe について
4. 実習・演習アンケート実施後の反省点について
5. その他・連絡事項

-
1. FD Café アンケート、FD 研修アンケートの集計作業について

- ・アンケート集計作業を分担しておこなうこととなった。(FD Café の分のフォーマットは佐藤先生が作成)
集計結果は3月23日（金）までに、メールで神谷まで送信。

2. FD 研修について

- ・実習・演習アンケートの改訂を目的として、学科ごとのD.P. の策定をおこなう等の案があがり、継続して審議することとなった。次年度第1回FD委員会（日程未定）で決定する。

3. FD Cafe について

- ・下記のとおり実施することとなった。

日 程：2012年4月17日（火）16時～

会 場：講堂

テーマ：大学って何？

4. 実習・演習アンケート実施後の反省点について

- ・新旧2種類のアンケートを配付してしまった。
- ・実施のタイミングについて、期末の忙しい時期は不適切との意見が多かった。
- ・自由記述について
学生の自己点検に対する意識が低さが目立った。受け身である。
教員のアンケートに対する理解が不足していた。(教授会での説明回数を増やす)
- ・アンケートの改変について
学科別の観点別チェック項目（5段階）を策定。自由記述は1項目とする
(自らの学びを振り返ることができる内容)
- ・原因を調べ、改善を考える、という記述が少ない。
- ・委員会として、学生の言語運用能力について何らかの改善策を考える必要があるとの見解が一致した。

5. その他・連絡事項

なし

以上

2012年3月13日

文責：神谷

FD 研修アンケートの集計データ

①FD 研修アンケート用紙

第一回 FD 研修 (7/10)

(該当箇所に○をおつけください)

1. 学生

2. 職員

3. 教員

以下の質問にお答えください。なお、問題点がある場合はその改善方法も記してください。

質問1 今回の研修の企画目的は適当でしたか？

--

質問2 今回の研修のタイム・スケジュールに不都合はありませんでしたか？

--

質問3 今回の研修を通して、大学の教育目的をより明確に理解できましたか？

--

質問4 今回の研修で参加者間の意識共有が進んだと思いますか？

--

質問5 今回の研修が、大学全体の教育力向上にどのように結びつくと思われますか？

--

質問6 その他、ご自由に感想を記入してください。

--

ご協力ありがとうございました。

FD 委員会一同

第2回 FD 研修 (7/24)

(該当箇所に○をおつけください)

1. 学生

2. 職員

3. 教員

以下の質問にお答えください。なお、問題点がある場合はその改善方法も記してください。

質問1 今回の研修の企画目的は適当でしたか？

--

質問2 今回の研修のタイム・スケジュールに不都合はありませんでしたか？

--

質問3 今回の研修を通して、大学の教育目的への意識が強まりましたか？

--

質問4 今回の研修で参加者間の意識共有が進んだと思いますか？

--

質問5 前回の研修時と比較して相互の参加意識に変化を感じましたか？

--

質問6 その他、ご自由に感想を記入してください。

--

ご協力ありがとうございました。

FD 委員会一同

①第1回FD研修アンケート結果

質問1：今回の研修の目的は適切でしたか？

- ・ 適切だった。(12)
- ・ 適切ではなかった。アンケートの目的自体がすでに決定されていた。あらかじめ予想されることを確認したにすぎない。
- ・ 当初やや不明瞭なところがあった。(3)
- ・ 最初は戸惑ったが、検討項目を整理してもらいわかりやすくなった。(2)
- ・ 盛り込み過ぎはよくない。いろいろな話を聞けてよかった。
- ・ 前半と後半のディスカッションの関連が不明瞭で、研修の目的が伝わりにくかった。(3)
- ・ 教員と学生とのディスカッションの場が持てたことは有意義。
- ・ もう少し討議のテーマを絞っていた方がよかった。
- ・ 企画目的は適切。内容の設定に問題あり。
- ・ 午前中の説明が分かりにくく、混乱を招いていた。
- ・ 学生の自発性・向上心を高めるためのアンケート作成という点においては適切。
- ・ 研修というより、他学科教員との交流としての意味が強かった。
- ・ 計画、内容が粗かった。
- ・ アンケートだけに内容を絞ったことに疑問。
- ・ 思考力について意見が言いたかった。
- ・ 幅広い目的と企画設定のため、議論をまとめにくかった。
- ・ 午前中の設定の意味がわからなかった。
- ・ 最初、作業レベルで何をすれば良いのか理解しにくかった。
- ・ 目的と方法(=アンケート項目の設定)が合致していない。
- ・ 研修目的を明確にし、参加者の共通認識を持たせることが必要。

質問2：今回の研修のタイムスケジュールに不都合はありませんでしたか？

- ・ 長いがこれくらいは必要。(5)
- ・ 休日開催は学生や職員の参加もむずかしいので再考を求める。(3)
- ・ 朝早い。
- ・ ない。(5)
- ・ もっと事前に告知するべき(2)
- ・ FD委員間での相談の時間は無駄。
- ・ 第2部授業アンケートについては議論の時間を増やすべき。
- ・ 午前中は不要。午後からテーマを絞りブレインストーミング(1時間で1テーマ)
- ・ 1回目のディスカッションの時間が短かった。
- ・ ばたばたしていた。
- ・ 90分毎に15分休憩がほしい。
- ・ 準備資料がそろえば午後からで十分。
- ・ アンケート内容の見直しだけでよかった。
- ・ 10時からでもよい。
- ・ テーマを細分化して話し合うべき。
- ・ 前期授業の終盤で大変。

質問3：今回の研修を通して、大学の教育目的をより明確に理解できましたか？

- ・ 明確にせねば、という問題意識が芽生えた。
- ・ いろいろな見解があることがわかった。
- ・ できた。(5)
- ・ むずかしさを実感した。
- ・ 教育目的と今回のテーマとの関連性は部分的であるので、質問の意味が理解しにくい。
- ・ ディスカッションが拡散したので、明確な理解は得られなかった。
- ・ 教育目的を理解する研修ではなかったなので、変化はない。(2)
- ・ まだこれから。
- ・ コミュニケーションできたのは○
- ・ 大学としての最終学生像に共通理解を持つよう、今後の目標設定をお願いしたい。
- ・ 十分ではなかった。
- ・ そこまで言えない。
- ・ 本来の教育目的が明解にならないままの話し合いに終わった。
- ・ 理解できたというよりも
- ・ 大学としてより明確にしなければいけない。
- ・ 授業内容が改善されてはじめて理解が可能。
- ・ 本学の教育目的が明確でないため、理解ができていない。
- ・ そんなことは議論していない。
- ・ 話し合えたことがよかった。結果より経過重視。
- ・ 教育目的とアンケート検討の話に分けて説明するべき。
- ・ 概ね理解したが、その先の具体案は不明瞭。
- ・ 「大学の教育目的」を議論していく場としては議論の幅が狭いが、それを自覚することを促す効果はある。
- ・ 他学科の教員との考え方の差異を感じ、そのズレにより逆に見えなかった目的が明確になった。
- ・ 可もなく不可もなくという感じ。
- ・ 教育目的そのものの理解は大きく変わらなかったが、それに向けて学生や教員が効率的に動くことの難しさを痛感した。

質問4：今回の研修で参加者間の意識共有が進んだと思いますか？

- ・ 進んだ。(21)
- ・ 講義部門と実技系教員との交流が深められたことがよかった。
- ・ グループの中では一定共有が進んだが、大学全体として見ればとても共有しているとは思えない。
- ・ グループ内での意見交換ができた。
- ・ やや進んだが、誘導に近い進行だった。
- ・ 今日の段階ではまだ不十分。
- ・ アンケートに対しての共有はできた。
- ・ 「思考力」という点では幅が見えた。
- ・ 全員で議論する機会が少ないので貴重な時間だった。

質問5：今回の研修が大学全体の教育力向上にどのように結びつくと思われますか？

- ・ 問題点を共有し得るかもしれないことが有意義に思えた。
- ・ 教育に対する意識の深さが少しずつ伝播し、理想的な教育形態を大学に関する全体が目指すように結びついてほしい。

- ・ 結びつくかはわからないが、向上はしていくであろう。
- ・ 新しい試みなので何か教育向上に発見があるようにも思う。
- ・ 学生のモチベーション向上に役立てたい。
- ・ 教育力とは学生の意欲次第かもしれない。
- ・ 結びつくと思う。良い機会であった。(2)
- ・ 具体的実施に至れば可能。
- ・ 各グループで具体的な改善策が話されていると思う。今回の研修会の目的ではないが、副産物として実現に向けてることが必要。
- ・ 組織の教育力の向上が大切、その共通認識が大切。
- ・ まだ不透明な部分が多いが教育向上に結びつけて行かねばならない。
- ・ 教育現場の問題を学生の自己点検としてすり替えた感じがする。
- ・ 具体的なアンケート、自己点検カルテができて、それがどのように活用されるかが重要。
- ・ 少しずつ意識が変わると思う。
- ・ このようなことを積み重ねていく必要がある。ただし、集約したポイントでしっかり時間をとって議論できればいいかと思う。
- ・ 今後の方針次第。(2) まとめの冊子ができれば効果的。基盤が出来そう。
- ・ 学生個人をさらに深く見つめることになる。
- ・ 教員間のコミュニケーションが活発になり、夫々の授業目的を知ったことで組織として学生を見ることに資した。
- ・ 学生たちの視点を共有しての改善活動は大きな可能性を感じる。彼らとのより有意義なやりとりと学びの実現をめざしたいと思う。
- ・ 事業アンケートについてはその主旨を学生が性正確に理解してくれるかどうかにかかっている。
- ・ 無記入 (5)

質問6：その他、ご自由に感想を記入してください。

- ・ お茶くらい出ないでしょうか。
- ・ 委員の方は本当にお疲れさまでした。(3)
- ・ 私自身、悩み、不安、失敗などたくさん抱えている。少しずつ思考しながら改善していく。
- ・ 「これはむずかしい」「それは無理」などの発言からは諦観が感じられた。
- ・ FD委員会の誘導にならないことを切に願う。
- ・ 次回、同じグループで討論(意見が深まる)するか、新しいグルーピング(意見のバリエーションが増える)で討論、どちらのするか。
- ・ 3、4、5月の実施が望ましい。学生参加であるなら、もっと具体的な意見を聞いた方がよいのでは。
- ・ 最初に様々な先行事例を見て、本学に合ったものを作っていく方が効果的では。
- ・ 教員自身の気づきをどのようにするのか？どのような行動に移すかの方が問題。
- ・ 次回が大変。具体的内容に入ると予想していない問題がたくさん出てくるはず。
- ・ 欲張り過ぎず、できることをひとまずテスト的に行えたらいい。
- ・ 教員、職員、学生が話し合える機会がもっとあればいい。平日実施希望。
- ・ 教育向上のための意識共有に向けての第一歩として有意義であった。
- ・ 大変な企画だったが、各出席者の真剣な話ぶりが印象的。今後定期的に開催希望。
- ・ 学生間で「温度差を感じる」と言っていたが、個人個人が目標を明確にし、到達するため努力し反省することで自然とアツい環境になるのでは。

- ・ アンケートを書くってやっぱり大変なんですね。
- ・ 学生にもう少し参加してほしかった。論点がはじめから明確だとよかった。
- ・ どんなに目標が同じでも、一度や二度では意識の共有には限界がある。でもそれを重ねることにより、理想は確実に具体性を伴い、現実味を増していく。話し合いは結果を求めるだけではなく、話し合うことと辞退に強い意味がある。これからも続けていくべき有意義なものである。
- ・ 無記入（8）

②第2回FD研修アンケート結果

質問1：今回の研修の目的は適当でしたか？

- ・ 適当だった。（11）
- ・ メールでの告知内容が変更されていた。課題の設定は変えない方がよい。
- ・ 目的についての考察は深まった。
- ・ 前提条件が不明瞭の部分が多かった。
- ・ 目的は一定理解できたが、効果やその他のことを考えるとわからない。
- ・ ディスカッションのテーマであれば学生の参加がもっと多いと良い。
- ・ もう少し強い仮設定されても良い。
- ・ 時間に対して目標が遠かった。目的は良いがFD活動全体で考える機会があるべき。
- ・ 徐々に目的が理解できていった。

質問2：今回の研修のタイムスケジュールに不都合はありませんでしたか？

- ・ よい。（3）
- ・ 後半ディスカッションにもっと時間を取りたかった。
- ・ 特になし。（6）
- ・ 柔軟な設定がよかった。
- ・ 時間不足。話し合いの継続が必要。
- ・ 日曜日は避けてほしい。（4）
- ・ 欠席の教員には結果の伝達を。
- ・ 開催日時のご案内は2ヶ月前にはお願いしたい。（2）

質問3：今回の研修を通して、大学の教育目的をより明確に理解できましたか？

- ・ 新アンケートの実施によって教員が授業目的を学生に伝えていく中で意識の共有ができていくことを期待。
- ・ 強まった。（9）
- ・ 直接的には効果がないかもしれないが、次ステップに向けての布石にはなった。
- ・ 他の先生方とのコミュニケーションがはかれた。
- ・ 自身の考えと他教員との差異がよく理解できた。それぞれに目的意識があり、新しい発見ができた。
- ・ 組織をあげての取り組みとしては参加者がすくなかったのが残念。
- ・ 今回の趣旨が質問と合っていない。しかし、それぞれが大なり小なり教育目的について考えるようになったと思う。
- ・ ない。手法論が合致していない。
- ・ 変化なし。

- ・ 通常意識していることの再認識となった。
- ・ 共通認識への手がかりになった。

質問4：今回の研修で参加者間の意識共有が進んだと思いますか？

- ・ こうした研修をいろいろなテーマで行うことで意識共有が進んでいくと思う。
- ・ 意識共有が進み、考え方の違いも明確になった。(2)
- ・ 徐々にではあるが、全体の方向性が見えやすくなった。
- ・ 共有においてはまだ。
- ・ はい。(5)
- ・ 職員の参加意識があまりに低い。
- ・ 参加者が少ないのが残念。
- ・ デザイン教員との意識共有がはかれたことは大変有意義であった。
- ・ 実効力を持つ案の構築のためには事務職員の意識改革も必要。
- ・ ない。手法論が一致していない。
- ・ 大学全体として意識共有が進んだとは思わない。
- ・ 他の教員の考え方がわかり参考になった。
- ・ 芸術とデザインという違いを共有できればよかった。
- ・ FACE TO FACE で語るのはよい。
- ・ 参加していない教職員との差が問題。

質問5：前回の研修と比較して相互の参加意識に変化を感じましたか？

- ・ 問題は明確になったが、教育目標の共有化ができたかどうか？
- ・ 前回は不参加。(3)
- ・ 感じた。(2)
- ・ 前回は大きな、しかしぼうよとした参加目的。今回は具体的な、しかし実用的な参加目的。
- ・ 明らかにそうであったとは認められない。
- ・ 前回より参加者が減った。その原因を探る必要がある。(3)
- ・ 変化なし。(5)
- ・ 前回とメンバーが変わったのが良かった。
- ・ 具体的な内容に踏み込んだこともあり、多く意見が出たし、協力的であった。
- ・ 前回よりスムーズに会議に入ることができたが、内容そのものへの理解や合意形成にはまだまだ時間がかかるだろう。

質問6：その他、ご自由に感想を記入してください。

- ・ 大学、学科といった範囲での「教育目的」について、「授業の進め方」について等のテーマでの研修も行ってみたい。
- ・ 参加者が少なかったことが気になる。今回の意見、策をどのように集約していくかが大事。
- ・ 日曜日にも関わらず、総体的に好意的に受け取ってもらえたように思う。参加者が少なかった。職員の参加も望まれる。
- ・ 組織の方向性をまとめるのはむずかしい。
- ・ できるだけ「変化」が見えやすいアンケートを作るのが良い。いろいろな意見をまとめるのは難しいが頑張してほしい。
- ・ ご苦勞様でした。(3)
- ・ おもしろい試みであった。今回は飲み物などがあり、なごんだ。

- ・ 前回アンケートでお茶を出して欲しいと書いた。即対応してもらい感謝。
- ・ まとめ役が意見をコントロールしようとするのは不可解。会議の意味がない。
- ・ 日曜日に委員会活動の一部を負担するのは難しい。日～土でお願いしたい。
- ・ 基調講演について、1回目は佐藤先生のものでよかったが、2回目にデザイン理論家のそれが欲しい。「講義と実技の関連を問う」という問題意識にはもう少しテコ入れをしないとだめだ。
- ・ アンケートの作成について全教員参加でおこなうことは大きな意義がある。
- ・ 最後に紹介していただいた、学生と先生の交換ノートのようなプリントはすごくやってみたいと思いました。私は講義と実技授業の切り替えがうまくできなくて、どの授業でどんなことを学んだかがごちゃごちゃになってしまいます。なので、今まで書いていたものが見れるのはうれしいです。
- ・ 先生方が学生のことをこんな親身になって考えてくれていることを知り感動しました。色々な個性を持った学生が沢山して大変だと思いますが、今後も充実した授業のため頑張ってください。学生もきっと反応を返してくれると思います。今回の研修に参加できたことを嬉しく思っています。ありがとうございました。
- ・ 無記入（5）

FD カフェのアンケート用紙・アンケート集計データ

①FD カフェのアンケート用紙

FD カフェ終了後に実施したアンケートの質問項目は年間を通して変えなかった。質問項目はの数値で回答する設問8項目と自由記述欄1項目より成っている。以下に例として第3回FDアンケート用紙を示す。

--

所属	学科	分野	系	領域	学年

アンケート項目

1. 今回の座談会を何で知りましたか？
2. 教員との座談会開催の必要を感じていましたか？
3. グループ・ディスカッションの人数は適当でしたか？
4. 座談会のテーマは適当でしたか？
5. 今回の座談会で実りある対話ができましたか？
6. 教員と学生の意識共有は進みましたか？
7. 授業に対する問題意識は深まりましたか？
8. また機会があれば参加したいですか？
9. 自由記述欄

1. チラシ	2. 教員	3. 口コミ
1. はい	2. 何となく	3. いいえ
1. 適当	2. 多過ぎ	3. 少なすぎ
1. はい	2. まあまあ	3. いいえ
1. はい	2. まあまあ	3. いいえ
1. はい	2. まあまあ	3. いいえ
1. はい	2. まあまあ	3. いいえ
1. はい	2. まあまあ	3. いいえ

--

ご協力ありがとうございました。

FD 委員会、学友会執行部一同

①第1回FDカフェ アンケート集計結果

1. 回答者

教職員・教務助手	4
造形学科	12
デザイン学科	1
観光デザイン学科	1
メディアデザイン学科	9
短大美術学科	3
短大専攻科	3

2. アンケート選択項目集計結果

アンケート項目	回答欄1	回答欄2	回答欄3
1	17	16	4
2	18	15	2
3	18	8	5
4	19	5	1
5	13	20	2
6	15	14	5
7	21	11	3
8	34	2	0

3. 自由記述欄

- ・これからもこの機会を大切にしていきたい。
- ・次は場所を変えてほしい（イスが欲しい）。あと、食堂で配られたFDカフェのチラシが手続き不備で食堂の職員に回収されていたのでちゃんとしてほしい。
- ・少しずつ参加する学生の数が増え、教員も含め、深い問題意識を伴う対話をしたいです。
- ・今まで大学に対して思うことは学生ホールにある掲示板に学生が意見の紙を貼付ける。で、終わりみたいになっていて何も変わってないように思っていたところ、このような企画、お互いに議論して共有し合ったことで前進していこうという気持ちが湧く、動くきっかけになったのではないだろうか。皆さんの色々な考えがきけて良かった。自分の行動も改めていきたいと思う。
- ・僕自身、めちゃめちゃ休んだり、授業に対して真剣ではないところがあったりするので、先生の本音など聞くことが出来て、良い勉強になりました。これからもっとマジメに授業受けたいです。
- ・意識の共有が抽象的なのか具体的なのか、個々で別れるところが多いなあと思いました。またやりましょー。
- ・学生は本来学ぶ立場で、先生、目上の方に不満なんて言うてはいけないよなあ…と、思っていたのですが、聞かなければ分からないことはたくさんあるし、本音で話せることによって、分かることもあるだろうから来て良かった。
- ・僕が今回の講演で気になったのは、学生の大学・先生に対する姿勢と先生の学生・大学、授業に対する姿勢の問題でした。

- ・アートに関わりながらどう生きていくか、ということを通題の課題として話し合いを深めていけると良いと思います。
- ・先生達が、どういう気持ちや思いで授業をしているのか？より内容を伝えるために授業でどういう工夫をしているかに興味があって参加しました。
- ・夏休みを挟むのが惜しいです。次も参加します。とても刺激になりました。
- ・人の意見がだーっと出てきたという印象で、まとまったことは言えないかなと思ってます。大学の方にも問題があるでしょうが、学生にもものすごく問題があります。これをどのように解決していけるかが、これからのFD caféの意義だと感じました。
- ・教員と学生間の問題とか色々あるけれど、両者がモチベーションをもっと持っていくことが大切なんだなーと思いました。
- ・色々な人の意見が聞いて楽しかったです。
- ・おそらく出てくる問題点は、かなり身近で目的的だと思います。本質にせまるには、「○○」という問題に対して「なぜ○○なのか」「○○になってしまうのか」というギモンをもって、解決に向かえたらいいなと、思います。
- ・色々な人の考え、意見が聞いて嬉しかったです。もっとゆっくりじっくり話せたら良かったと思います。
- ・学生の考えかたと先生の考え方の違いがあるのではないかって話が上がったので、私たち学生が求めているものと、先生方が思っているものを座談会で話し合えたらいいなと思います。楽しかったです
- ・聞いて下さり有難うございました！話が進む、進まないは関係なく、ただ純粋に参加して良かったと思いました。次回も参加します♯
- ・普段聞けない先生方の授業に対する考え方などが聞いてとても楽しかったです。
- ・私は一回生です。最初は意見など何ももっていないで参加しました。けれど、先輩たち、教員の話聞いて私にも意見があったんだと気付かされました。年に5回ではなく、もっともっと沢山聞いてほしいです！
- ・先生方と話し合う機会をもっと持ちたいと思いました。
- ・次回は初めから参加したいです。
- ・楽しかったです。
- ・ここに参加していない学生…が最も問題がある…のでは？
- ・学生と教員の間の教育像（欲するもの）の違いが問題との意見が出た。次に向けてこの部分をまず具体的に再度把握すべきかと。
- ・意識の高い学生ばかりで感心しました。

②第2回FDカフェ アンケート集計結果

1. 回答者

教職員・教務助手	5
造形学科	10
デザイン学科	2
観光デザイン学科	1
メディアデザイン学科	2
短大美術学科	8
短大専攻科	1

2. アンケート選択項目集計結果

アンケート項目	回答欄1	回答欄2	回答欄3
1	16	14	9
2	19	8	1
3	23	0	6
4	21	8	0
5	17	12	0
6	9	19	1
7	22	7	0
8	24	4	1

3. 自由記述欄

- ・議題自体でも多く取り上げられていた学生の発言についてですが、カフェ自体でも少なく講堂という場所設定はどうか、と思いました。
- ・今回も、深く話が進むこともあって、こういう人たちが集まる場だなあ…と思いました。逆にこういう人たちじゃない人たちが聞いてほしい！…と思いました。
- ・時間オーバーになりましたね。
- ・いろんな人に話をふってもいいと思いました。
- ・合評がどういうものであってほしいか、多くの意見が聞けて合評に対する意識が深まった。学科によって合評の仕方がいろいろあっておもしろかった。
- ・もっと人が集まってほしい。
- ・合評でもそうですが、座談会でも学生の意見をもっと引き出してあげるべきだと思います（教員がしゃべりすぎるかも…）。
- ・自分自身もっと先生につっこむ必要がある。自分の想いを伝えることも大切だと思った。少しその点足りなかったと思った。
- ・手軽に参加できるディスカッションはいいなと思いました。スキルが上がる気がする。トイレ時間があると助かります。前はディスカッションが終わった直後にトイレに駆けこんだのでアンケートが書けませんでした。今回はアンケートを書いてからトイレに駆けこみます。
- ・今回のような機会がないと絶対に話すことのなかった先生とお話しできてうれしかったです。

- ・参加者がいつも少なくて困っていると聞きましたが、何か良い方法でもっと伝わればいいと思いました。なんだかおもしろいのに…。勉強になりました。もっと勉強しようとも思いました。
- ・合評を良い方向に向かわせるには合評じゃないところで何かしたり起きたりしないといかんのやないかと思った。
- ・最大公約数を壊す、というのは難しいと思いますので、何か起爆につながるような行動（イベント）が必要かと思います。
- ・今回のような顔ぶれじゃなくて、イヤイヤな人もいていいかなと思ったり、思わなかったりします。
- ・先生のわけ方なのですが、デザインの先生と造形の先生を均等にしてほしいです。（私の班は二人とも日本画の先生で、FD委員の先生が少しデザインの話フォローして下さったのですが、少し話が難しかったです。）
- ・観光デザインは特に他と異なる内容を改めて感じた（グループワーク、社会との連携による第三者の評価が常にある）。
- ・遅れたので、最初の議題設定を逃してしまいました。学生には話しやすいトピックだったと思います。
- ・まだ1回生なので合評というテーマでの参加は難しいところもありましたが、先輩方や先生方、ちがう分野の方の意見や経験が聞けたのでおもしろいなと思いました。
- ・まだ1回生なので経験が少なく、多くを語れることが少なかったのですが、先輩と先生の意見が聞けてよかったです。
- ・もう少し時間があっても良かったかも。合評への意識（考え方・求めるもの）を整理できると良かった。
- ・このFDカフェの存在を知らない学生はもっとまだまだいる気がするので、もっと拡散できたらなあと思います。FDカフェの様子を録画したビデオを食堂等で流してはどうでしょうか？
- ・面白かったです。
- ・合評を良くしようという考え方じたいが優等生的だったり。が、コミュニケーションがとれて良かったです。合評でへこむ人がいるのはコミュニケーションがとれていないからだだと思います。話さないから一方的になるのかと。
- ・各分野・領域内で誰が自分と同じ分野にいるか知らない人が多い。知人でなく赤の他人として合評が始まるから、言いたい意見も言いづらい人が多いと感じる。
- ・過去の作家の作品を元に「合評」をする機会を増やしてみてもどうだろうか？いきなりクラスの人作品（目の前にいる人）の講評するのはゆとり世代（他人に嫌われることをものすごくおそれる世代）にはキツイと思う。親しい間になる必要は全くないが、その人を少しでも知っていると話し合い（「合評」＝評価？）がしやすい。
- ・「合評」というテーマは学生自身の問題が多いのだろうかと思いつつ、雰囲気作り、学生の割り振りが先生方にも協力していただきたいと思いました。個人的な意見ですが、少人数での合評は比較的意見が言いやすいです（クラスによって限界ありますが…）。学生同士でも教員・学生間でも面と向かって批評できる状態をつくっていきたいです。自分のことだけでなく他人に興味を持つこと、多様な価値観を共有できる機会は、合評だけでなく日頃から設けたらよいのではと思います。
- ・自分はどういう立場か、これからどうしようか考えられてよかったです。解決のできない内容ですが、自分の問題が晴れてよかったです。
- ・まだ1回生なので今回のテーマは少し難しかった。できればもう少し経験をつんでから参加したかった。
- ・今日初めて参加して、身近で手ごたえはありました。自分で合評についての認識や意識の違う箇所や足りなさなどを改めて考える機会がありました。
- ・今日の「合評会」についての座談会に参加して、様々な分野の学生さんの意見が聞けて、合評の様々な

形式や認識に対する知識を得たのと、自分も今まで合評に参加するときの気持ちがあやふやであったので、今回の場で合評に対する価値観が、もっと自分も作品に対する目的意識をしっかり高めて事前に自分自身で確認しながら合評に臨もうという意識に変わったので、今回の座談会は非常に有意義な時間となった。

- 学生の参加がもっと多いと良い。問題をかかえている学生の参加がほしい。どうしたら参加してもらえるのか考えていきたい。

③第3回FDカフェ アンケート集計結果

1. 回答者

教職員・教務助手	3
造形学科	5
デザイン学科	3
観光デザイン学科	2
メディアデザイン学科	2
短大美術学科	6
短大専攻科	2
無記名	1

2. アンケート選択項目集計結果

アンケート項目	回答欄1	回答欄2	回答欄3
1	12	7	5
2	12	10	3
3	14	0	3
4	10	12	2
5	5	15	4
6	3	17	4
7	15	9	0
8	21	4	0

3. 自由記述欄

- ・講義に対する問題意識を学生の間で日頃から検討していくことが必要だと痛感しました。教員だけでなく学生の資質の問題でもあるので…。学生の授業評価シラバスという提案良いと思いました。授業アンケート作成の改正にも反映できると思います。ただ、「とりやすいから」「楽だから」でなく、いかに興味をおこすかということが最重要です。卒業し社会に出て行っても恥ずかしくないような、学生に育てるには、新聞、ニュースなどにふれる社会、掲載の話を盛り込んだらいいのになあ…と思っています。
- ・本学を閉鎖的な学校であると思う。しかし、それは学生にアクションをおこす人が少ないと思う。う〜ん、なんかさみしいな、自分の学校なのに。
- ・先生方が思ったよりフレンドリーだった。
- ・先生方が無表情でこわいです。ですからもっとニコニコしてほしいです。
- ・内容的に全く役に立たない授業というのは自分はないと思っていて、ただ役立てられるかどうかだと考えます。人間の脳は忘れるように出来ているので、授業の全てが知識となるわけではありません。となれば、大事なのはいかに心に残るかかどうかであり、そういう意味では教員の個性は絶対に大事だと思います。あと、偉そうな先生はいやです。
- ・私がいかに賢くないことが理由なのか何なのか、今回はついていけない部分もありました。テーマに関係ないのですが、あの先生が、あんな風に笑うんだ！とか、こんな意見があるんだ！とか、発見が楽しかったです。

- ・机とイスがあると“ざっくばらん感”がうすまってドキマギしました。大畑先生がいなくて残念です。チラシに参加する先生を書いて頂けると幸いです。おやつおいしかったです。
- ・人が少なかったですね…講義系の科目は、実習の疲れを癒す貴重な睡眠時間になってるんで、もったいないです。すみません。先生方の授業への熱意が伝わりました。
- ・このFDカフェはいつも最終的には迷走していて、もやもやのまま終わってしまいますよね？「美大の講義」とはどうあるべきか…なんで自分が思うに、答えは個人の意識なので、考えたくなかったです。
- ・今日の座談会で教員と学生との意識のずれがあるかなと思いました。教員はより深い普遍性のようなものを伝えようとしているのに、学生はコミュニケーションや話の上手さなど、表面的なおもしろさで判断しているように思えました。学生と教員とが同じビジョンを持ち「この授業を受けて変わった自分」を持つことが重要ではないでしょうか？
- ・まず、学生側から学生が講義を受ける意識・態度についての話がなかったようなので、ひとりの学生として非常に恥ずかしく思いました。学生から教授への要望のみでなく、教授から学生への要望を受け入れてこそ話し合いではないでしょうか。学生側の意識に、少々気持ち悪さを覚えました。
- ・学生にも、教員にも組みしないフラット？な場所から参加しましたが、どちら側の意見も判りますし、深いところ大学とは何？という目的意識…。ただ、十人十色様々なところで通っていて、自立、意欲目標を設定できる環境作りをしていきたいです。会話をする場所は、必要ですね。
- ・先生にもっと疑問や質問を学生に投げかけてもらって、学生がそのもやもやを解消しようと行動させるような刺激を与えてほしいと思う。
- ・役に立つから講義をとっている訳ではないです。自分の視野を広げてくれるもの（まるまる概要を教えてくれるものはちょっとつまらない）、いろんな分野への魅力的な導入であることに期待しています。
- ・頭の体操になりました。全体ディスカッションでは、教員対教員の討論にもなりそうだったので、学生としてはもっと発言すべきだったことが反省です。グループ・ディスカッションでは、ただ学生の愚痴を聞くような形にならないようにするべきだなどと思いました。今回のディスカッションで、授業を受ける学生の方にも改善点はあると思いました。
- ・講義系の先生は自ら講義に対する目的や意義を意識している人が少ないんだと感じた。森本先生と芳野先生の反論のしあいが良かった。先生同士ももっと話してみても？あと、告知が遅いと思います。
- ・議論が拡散するので、図などを使って論のエリアを。授業を自分のカラオケルームにして私分化していることを公然と指摘されたのは、大学として対応すべき。授業点検の仕組みを持っていないことが課題。
- ・教員です。全体討議では教員が多く発言し学生の発言が少なく、進行に問題があるように思いました。もっと学生の発言を促進すべきです。またリベラル・アーツに関しては学生は全く理解していないので、正確な情報を提供できる人物が説明すべきであると思いました。学生の参加も少なく疲労感が残りました。
- ・講義について学生が求めているものと教員が与えようとしているものは同じだけど、それが伝わっていない授業があるということは問題です。
- ・毎回結論は出ていない（出す必要がないが）ですが、今日は結論からとおすぎて煮え切らなかった。

④第4回FDカフェ アンケート集計結果

1. 回答者

教職員・教務助手	1
造形学科	8
デザイン学科	0
観光デザイン学科	1
メディアデザイン学科	1
短大美術学科	6
短大専攻科	1

2. アンケート選択項目集計結果

アンケート項目	回答欄1	回答欄2	回答欄3
1	8	4	5
2	10	7	1
3	8	2	3
4	8	8	0
5	8	10	0
6	6	11	1
7	13	5	0
8	17	1	0

3. 自由記述欄

- ・短大ミクストでは授業で四大と合同で展覧会をします。他分野との交流だけでなく、自分の作品を発表するプロセスが学べます。こういう授業がもっとあればいいなあと思います。短大ミクストでは実習で課外があったり、美術以外の話も先生から聞くので面白いです。一回生のときは別のクラスにいましたが、いまのクラスに満足する部分は多いです。
- ・授業はさわりの部分しか教えていないという発言をしましたが、それは別に批判ではなくきっかけだととらえています。10を教えてもらうより1を教えてもらって自分から勉強した方が身に付くと思うし、他の可能性も外の世界からたくさん見つけられる機会が出てくると思います。
- ・他分野の授業を受けることができるということはとても面白いと思いました。短大は特に受ける事のできる授業が少ないので、実技的な授業（油画、日本画の演習など）ぜひ受けてみたいです。ぜひ議論だけに終わらず取り入れてほしいです。
- ・研究機関、教育機関の話聞いて人の脳はインプットよりアウトプットの方が先だという話を思い出しました。何が学生の身になっていくかという、知らないから知りたいなど現実に直面したときに出てくる物だと思います。こうしたいという思いのアウトプットが先であってそれは授業よりも学外に多くあると思います。それがないと学校も学生も発展がないのかなと感じました。バランスも大事ですが研究機関としての発展が先ではないでしょうか。
- ・関係ない話ですが学費もう少し安くなりませんか?! 設備費とかを最初に全部払わなきゃならないのは特に…。だから皆エレベーターとか使いまくってるんじゃないでしょうか？
- ・技術は学ぶ場がたくさんあっても思想は学ぶ場はあまりないと思う。普通の授業でも教員から学生への

一方通行のやりとりで終わるのでなく、お互いの考えている事を話し合えるようになってほしいと願う。先生から学生へ「～についてどう考えるか？」などの疑問をもっと投げかけてほしい。それについて話す時間をとってほしいと思う。

- ・「大学生」としての「特権」とは何かも含め、考えたいと思います。
- ・初めて参加しましたが、思っていたより話しやすかったです。
- ・講義のように全員で前方をみつめる着席ではなく、レストランのようにグループごとにテーブルを囲んで座る構図だったらいろんな人と（内緒）話が進んで楽しそうだなあと考えてます。
- ・発言したいけど少ししにくいかもしれないです。
- ・もっと1つ2つの事に関して賛成・反対みたいに意見交換をしてもいいような気がします。終了後の雰囲気を見ると皆さん言い足りない、もしくはまだ中に何か考えてることがあるようだったので少数で何グループかつくってみてもいいんじゃないでしょうか？
- ・話題の核の手前で終わってしまったような気がします。もう少し具体的に話の内容が盛り上がるかもしれないですね。先生方のご意見も多く拝聴させていただき大変為になりました。
- ・もっと毒を出した方が意見が活発になると思います。
- ・今回初めて参加したが、私はもっと先生たちと会話が飛び交っていると思っていたが、発言のタイミングがわからず発言しにくかった。次回も参加したいと思っているのでもう少し会話を飛ばし合いたいと思った。
- ・4回すべて参加しているのですが、あまり考えがまとまらない状態で発言するのはいつもより緊張しました。なのでやはりグループディスカッションを希望します。そのためには学生への告知等もっと必要だと感じたので私は今日 Twitter でつぶやきたいと思います。
- ・ありがとうございました。

⑤第5回FDカフェ アンケート集計結果

1. 回答者

教職員・教務助手	1
造形学科	7
デザイン学科	2
観光デザイン学科	2
メディアデザイン学科	2
短大美術学科	4
短大専攻科	0

2. アンケート選択項目集計結果

アンケート項目	回答欄1	回答欄2	回答欄3
1	7	10	2
2	12	5	0
3	13	2	3
4	9	6	2
5	7	9	1
6	7	9	1
7	9	4	5
8	16	1	1

3. 自由記述欄

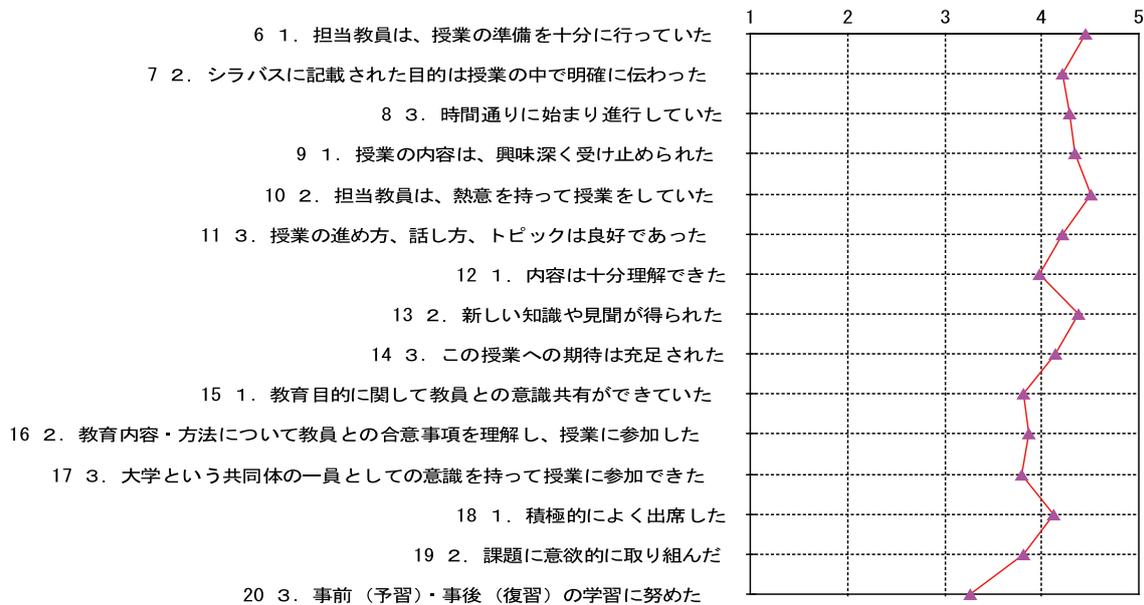
- ・学生生活の「自由」が話題になり次年度もこのテーマを探求してほしい。
- ・いろんな人の意見が聞けて有意義に感じました。初めて来ましたが、質問が簡単なようでとても深く、考えるのに力を使ってしまうですね。なれるようにまた参加したいです。
- ・自分が今自由な時間の中にいるのだということを改めて自覚する事が出来ました。ジェネラリストとスペシャリストの間の「ジェネシャリスト」を目指したいです。
- ・個人的に今回の意見等々は共感できました。あまり私は意見が言えないというか、言われて気づかされる立場が多く、自分が知ることができるようなほうでFD Caféは私のためにあるような感じがします。
- ・来て良かったです。
- ・楽しかったです。時間が足りませんでした。S先生はとても頭が良いと思いました。いっぱいお話聞きたいです。
- ・今回はいつもより人数が少ないと感じました。食堂や学生ホール等にピラを配るのもいいと思います。
- ・それぞれの意見が多いのでまとまりにくいようですね。たくさんの意見は大変いい事ですが、もう一步結論まで惜しいかなという感じがしました。
- ・海外の大学のあり方との比較などを出すと良い刺激になるかも。
- ・もやもやした感じで終わってしまい残念なのか良かったのか、そこさえもやもやです。今日は特にS先生に誘導尋問されていたような気がしました。
- ・FDカフェの期日の告知が遅すぎるように思います。もう少し早めに宣伝できないでしょうか？もっとより多くの人に参加してほしいです。

- ・不自由な点があるとすれば他大学との交流の場がもう少しあれば視野が広がる可能性も高まるのではと思います。
- ・色々な意見を出しているうちにどんどん話が膨らんでいって気がついたら「大学生って何だ？」というよりは「自由って何だ？」という議論になっていた気がします。自分の例を出して話していた人が多く分かりやすかったのですが、元の話に戻しながら議論を進めてはと思いました。
- ・初めての参加ではありましたが学生生活の意義を考える機会というものが欲しく思っていたので非常に面白く時間を過ごす事が出来ました。やる気や目的意識を持っている人々が集まっても基盤となる考えが違う事で全く思いもよらなかった発想を得ることが出来て良かったです。また普段お伺いできない教員の方からの意見を知る事ができたのもとても学びになりました。私としての考えは自由とは制限の中にこそ生まれるもので、視野の拡大を水平・垂直で考えるのであれば、どちらか一方のみでは成立しないのではないかと思います。ありがとうございました。

学生授業アンケート集計データ

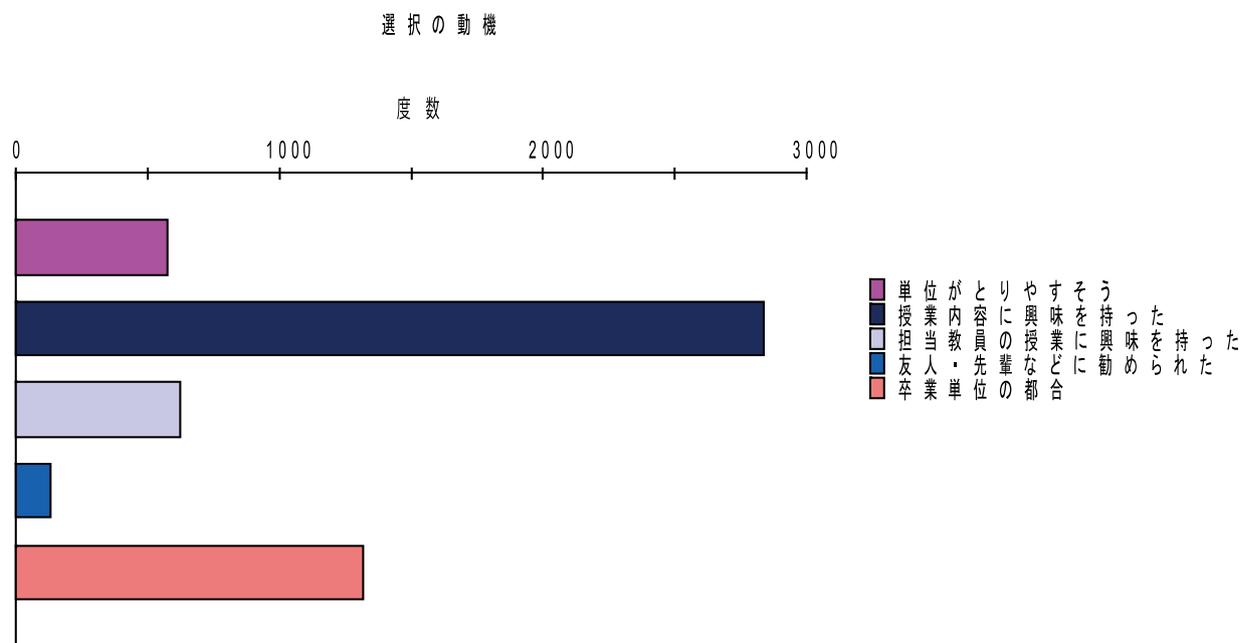
①2011 前期講義系授業評価（全体）

集計 (1)



集計(1)

	件数	平均値
6 1. 担当教員は、授業の準備を十分に行っていた	4337	4.45
7 2. シラバスに記載された目的は授業の中で明確に伝わった	4305	4.21
8 3. 時間通りに始まり進行していた	4281	4.29
9 1. 授業の内容は、興味深く受け止められた	4305	4.34
10 2. 担当教員は、熱意を持って授業をしていた	4282	4.50
11 3. 授業の進め方、話し方、トピックは良好であった	4278	4.22
12 1. 内容は十分理解できた	4297	3.98
13 2. 新しい知識や見聞が得られた	4279	4.37
14 3. この授業への期待は充足された	4253	4.14
15 1. 教育目的に関して教員との意識共有ができていた	4280	3.81
16 2. 教育内容・方法について教員との合意事項を理解し、授業に参加した	4256	3.86
17 3. 大学という共同体の一員としての意識を持って授業に参加できた		3.80
18 1. 積極的によく出席した	4294	4.12
19 2. 課題に意欲的に取り組んだ	4282	3.82
20 3. 事前（予習）・事後（復習）の学習に努めた	4252	3.26



分析項目

選択の動機

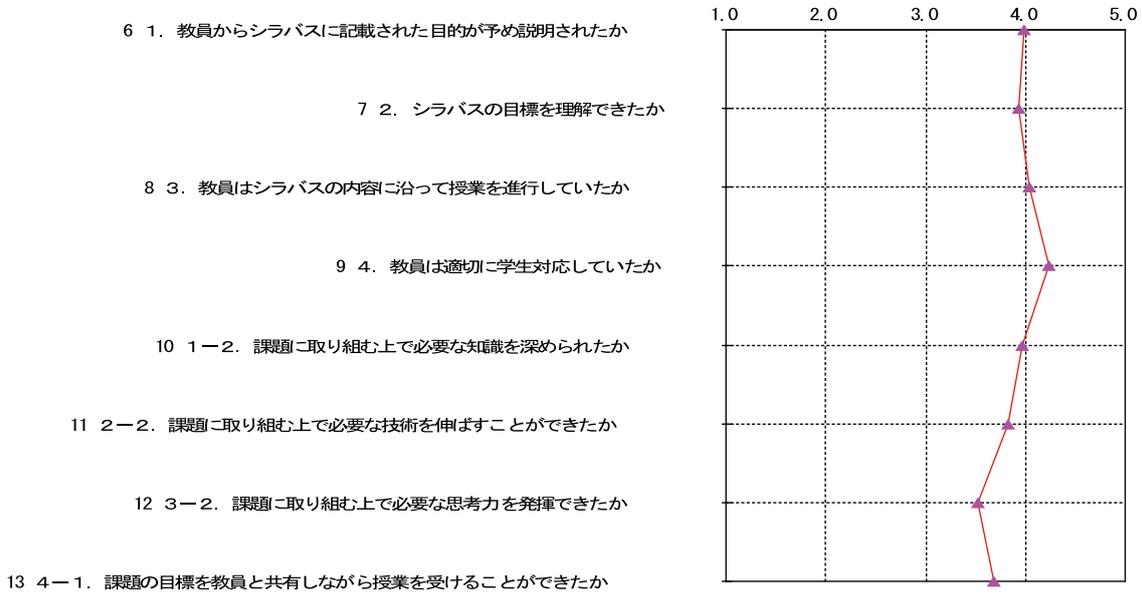
サンプル数

4179 / 4355

カテゴリー	度数	%
単位がとりやすそう	577	13.8
授業内容に興味を持った	2839	67.9
担当教員の授業に興味を持った	625	15.0
友人・先輩などに勧められた	132	3.2
卒業単位の都合	1316	31.5
サンプル	4179	100.0

③2011 実技系授業評価（全体）

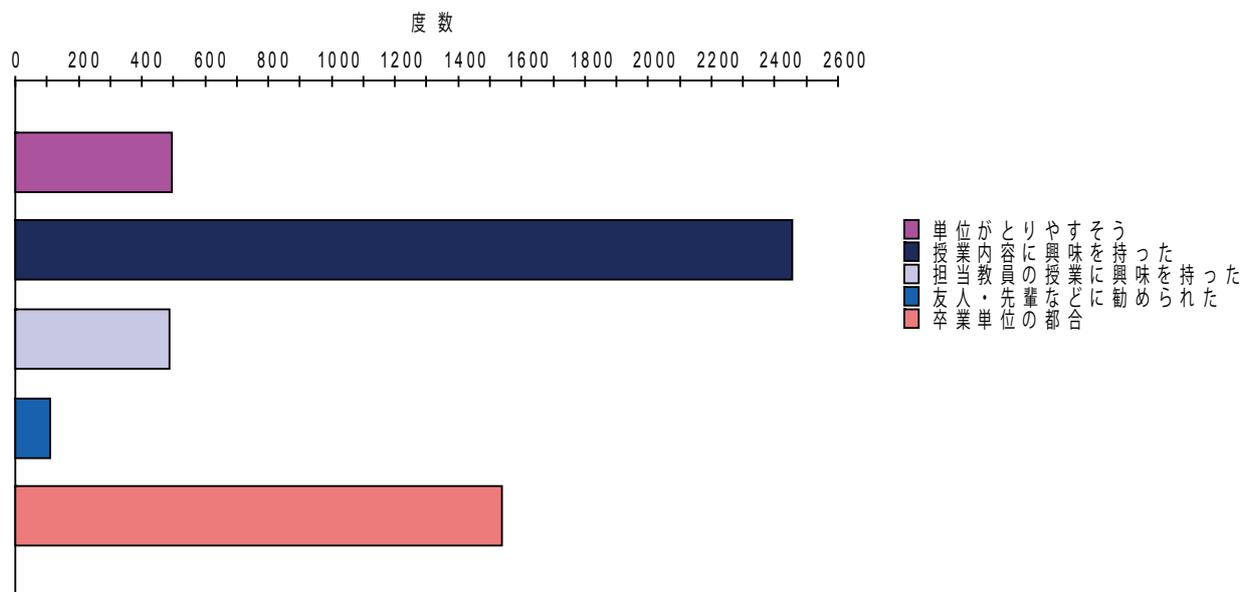
集計 (1)



集計(1)

	件数	平均値
6 1. 教員からシラバスに記載された目的が予め説明されたか	718	3.99
7 2. シラバスの目標を理解できたか	709	3.93
8 3. 教員はシラバスの内容に沿って授業を進行していたか	700	4.04
9 4. 教員は適切に学生対応していたか	709	4.24
10 1-2. 課題に取り組む上で必要な知識を深められたか	715	3.96
11 2-2. 課題に取り組む上で必要な技術を伸ばすことができたか	700	3.83
12 3-2. 課題に取り組む上で必要な思考力を発揮できたか	705	3.52
13 4-1. 課題の目標を教員と共有しながら授業を受けることができたか	708	3.68

選択の動機



分析項目

選択の動機

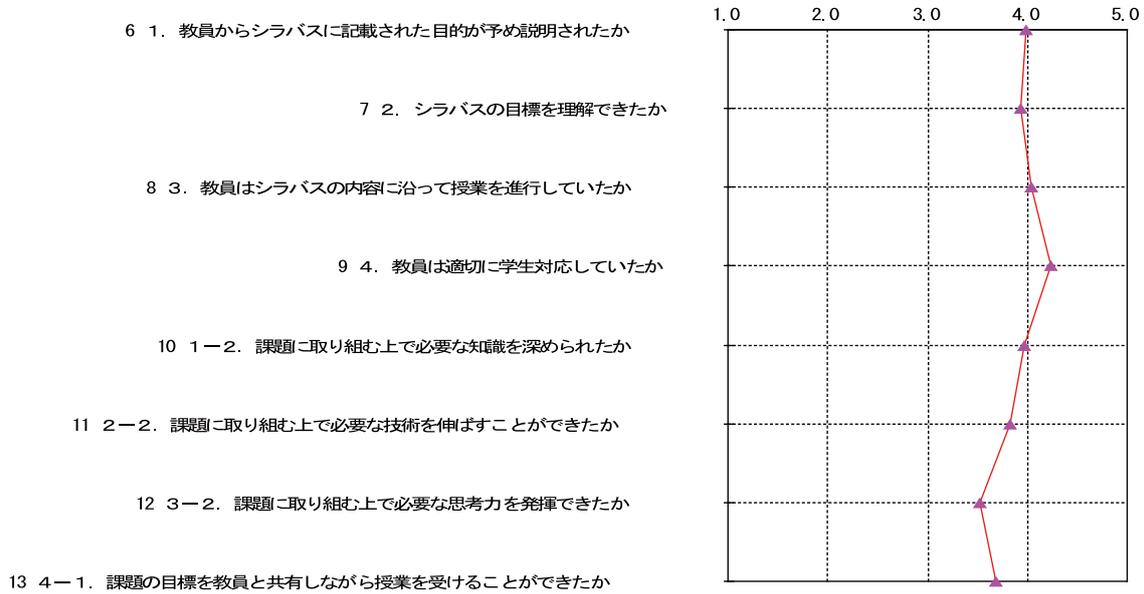
サンプル数

3792 / 3926

カテゴリー	度数	%
単位がとりやすそう	496	13.1
授業内容に興味を持った	2456	64.8
担当教員の授業に興味を持った	488	12.9
友人・先輩などに勧められた	112	3.0
卒業単位の都合	1539	40.6
サンプル	3792	100.0

③2011 実技系授業評価（全体）

集計 (1)



集計(1)

	件数	平均値
6 1. 教員からシラバスに記載された目的が予め説明されたか	718	3.99
7 2. シラバスの目標を理解できたか	709	3.93
8 3. 教員はシラバスの内容に沿って授業を進行していたか	700	4.04
9 4. 教員は適切に学生対応していたか	709	4.24
10 1-2. 課題に取り組む上で必要な知識を深められたか	715	3.96
11 2-2. 課題に取り組む上で必要な技術を伸ばすことができたか	700	3.83
12 3-2. 課題に取り組む上で必要な思考力を発揮できたか	705	3.52
13 4-1. 課題の目標を教員と共有しながら授業を受けることができたか	708	3.68

2nd, Mar., 2012

京都嵯峨芸術大学 FD研修会

3つのポリシーに基づく 教育の質保証の取組

～DP・CP・APの策定、シラバスの作成～

立命館大学 教育開発推進機構

沖 裕貴

日本の大学の置かれている状況

内憂

- 学生・生徒の勉強嫌い
 - 73.5%が勉強が嫌い(2002文科省調べ)
 - 41.0%が塾を含めて一日にまったく・ほとんど勉強しない(2002文科省調べ)
- 18歳人口の激減
 - 人口:206万人(1992)、121万人(2009)、118万人(2019)
 - 定員割私大:46.5%(2009)、38.1%(2010)

外患

- グローバリゼーションの進展
 - 学生の国境を越えた移動
 - 国境を越えた高等教育の確立と質保証の取組(ボローニャ宣言、UNESCO/OECDガイドライン)



高等教育の質保証の観点

認証評価のキーワードは、「体系性」「整合性」「適切性」「有効性」「妥当性」それらのキーワードを鍵にして、「3つのポリシー(DP・CP・AP)の明確化」が求められる。

また、2011.4に施行された(改正)学校教育法施行規則では以下の点が求められる。
 ◎授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関する事(第5号関係)。その際、教育課程の体系性を明らかにする観点に留意すること。
 ◎大学(大学院)は、教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報を積極的に公表するよう努めるものとする事。
 その際、大学の教育力の向上の観点から、学生がどのようなカリキュラムに基づき、何を学ぶことができるのかという観点が明確になるよう留意すること(第172条の2第2項関係)。

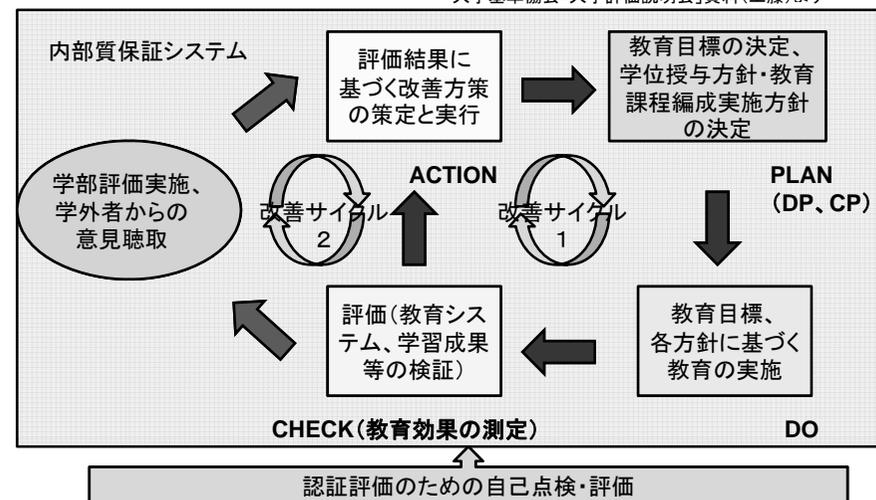
さらに、日本学術会議の「大学教育の分野別の質保証のための教育課程編成上の参照基準について―趣旨の解説と作成の手引き―」によれば

◎「当該分野の学びを通じて獲得すべき基本的な知識と理解」は、当該分野の知識や理解に関して「何かを説明できる」という形で記述すること。

◎「当該分野の学びを通じて獲得すべき基本的な能力」は、「何かを行うことができる」という形で記述すること。

内部質保証システムの構築

大学基準協会「大学評価説明会」資料(工藤)より



PLANの条件 (重点行動目標、DP、CP)

- ◆ 組織(教育)が良くなりそうだと思うビジョンを描くこと
- ◆ 組織の全構成者が目標達成の一翼を担えること
- ◆ 日常のちょっとした努力の積み重ねで達成できること
- ◆ みんながやってみようと思えること

安岡高志(立命館大)

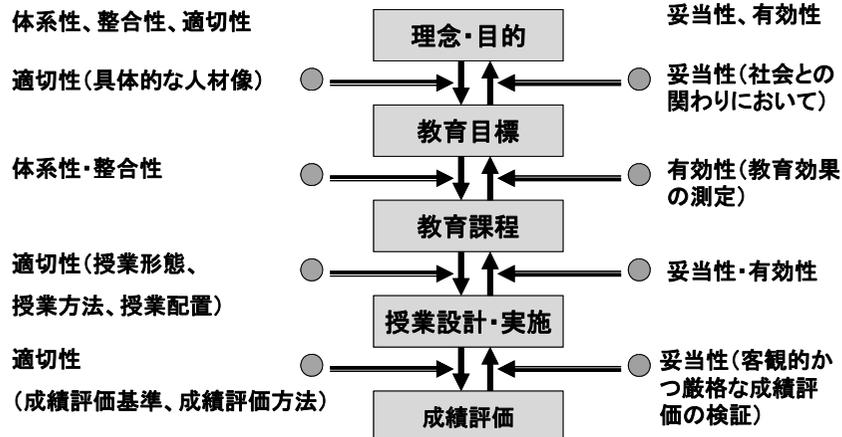


DP、CP、APとは

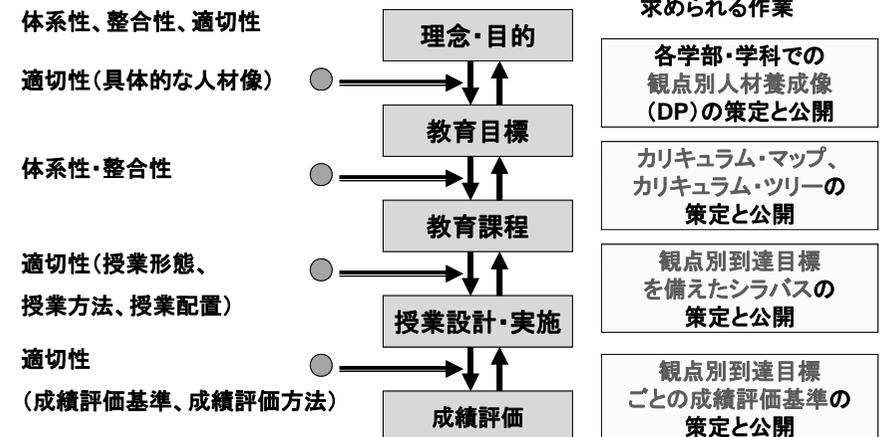
- ◆ **ディプロマ・ポリシー(DP)**:「卒業認定・学位授与に関する基本的な方針」=「学部・学科が教育活動の成果として学生に保証する最低限の基本的な資質を記したもの」=「養成する人材像」
- ◆ **カリキュラム・ポリシー(CP)**:「教育の実施に関する基本的な方針」=「DPを保証する体系性と整合性が担保されたカリキュラム」
- ◆ **アドミッション・ポリシー(AP)**:「DPに沿った学生募集の方針と入学者選抜の方法」

中央教育審議会・大学分科会答申「我が国の高等教育の将来像」(2005)

DP、CPの明確化の方策



DP、CPの明確化の方策



DP、CPの明確化の方策

体系性、整合性、適切性

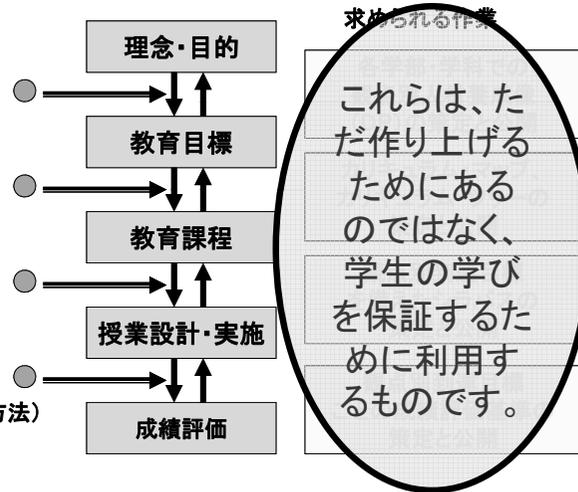
適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性

(成績評価基準、成績評価方法)



DP、CPの明確化の方策

体系性、整合性、適切性

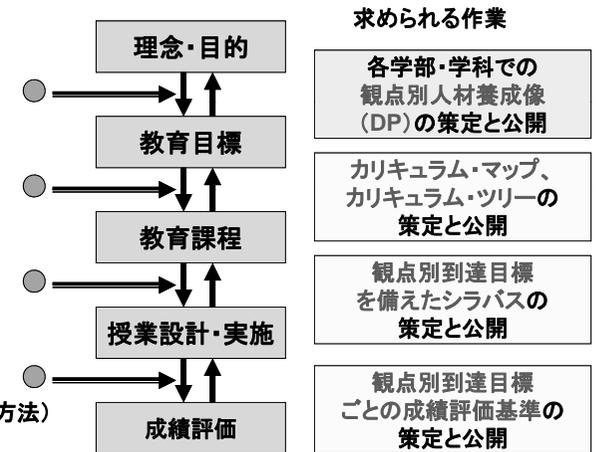
適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性

(成績評価基準、成績評価方法)



観点別教育目標の理論

目標類型と目標領域の観点からの代表的目標例の分類(梶田、1978)より

	達成目標	向上目標	体験目標
認知的領域 (Cognitive Domain)	知識、理解等 (知識・理解)	論理的思考力、創造性等 (思考・判断)	発見等
情意的領域 (Affective Domain)	興味、関心等 (関心・意欲)	態度、価値観、倫理観等 (態度)	触れあい、感動等
精神運動的領域 (Psychomotor Domain)	技能、技術等 (技能・表現)	練達等	技術的達成等

観点別人材養成像 (DP) の例 立命館大学文学部

「知識・理解」

- ◆文化や社会における様々な事象に向き合うための幅広い教養的学知を備えている。
- ◆人間の生に関わる様々な事象を深く理解し、評価するための専門的学知を備えている。

「思考・判断」

- ◆学知を総合した理解の上に思考し、現実の判断に移すことができる。

「技能」

- ◆豊かな交流によって培われた協調性と社会的コミュニケーション能力を発揮できる。

「態度」

- ◆文化の多様性の理解にもとづいた倫理的意識を行動の原理に据えている。
- ◆国家的な枠組みを超え、地球市民として思考・行動しようとする国際的感覚を備えもつ。

観点別人材養成像の例

日本技術者教育認定基準(JABEE)

「関心・意欲・態度」

- ◆技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を説明でき、技術者が社会に対して負っている責任を感じる(技術者倫理)。
- ◆自主的、継続的に学習できる。

「思考・判断」

- ◆地球的視点から多面的に物事を考えることができる。
- ◆与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめることができる。

「技能・表現」

- ◆種々の科学、技術及び情報を利用して、社会の要求を解決するために創造し、表現することができる。
- ◆日本語で論理的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。少なくとも一つの外国語を用い、基礎的なコミュニケーションを行うことができる。

「知識・理解」

- ◆数学、自然科学及び情報技術に関する十分な知識を持ち、それらを応用することができる。
- ◆該当する分野の専門技術に関する十分な知識を持ち、それらを問題解決に応用することができる。

観点別人材養成像の例

ハーバード大学(コア・カリキュラム、1988)

「関心・意欲・態度」

- ◆違った価値観や伝統や制度を持った異文化に関して深い認識を持つことができる。

「思考・判断」

- ◆明晰かつ批判的に思考することができる。
- ◆自然と社会と人間との関わりを理解し、知識を得る方法と考え方を説明することができる。

「技能・表現」

- ◆正確に意思の疎通を図ることができる。
- ◆コンピュータ等を用い、数量的な処理を行うことができる。
- ◆一つ以上の外国語を用い、コミュニケーションすることができる。
- ◆正確に書くことができる。

「知識・理解」

- ◆正確に理解することができる。

(注)上記のものはBok学長が示した能力を冲が観点別に整理したもの。

観点別人材養成像(DP)の例

滋賀県立大学工学部電子システム工学科

- | | |
|-----|--|
| A | 人間存在と環境・社会について深く理解し、豊かな人間性を身につけること |
| A-1 | 人間の心身および人間と自然や社会とのかかわりなどについて、興味に応じて多面的に学習し、複雑化・流動化していく現代社会の中で将来の指針を見出していく能力を身につけること |
| A-2 | 技術が環境や社会に与える影響について理解し、技術者としての責任感と倫理観を身につけること |
| B | 国際的に活躍する地球市民に必要な外国語によるコミュニケーション能力の基礎を身につけること |
| C | 電子システム工学分野の基礎となる数学、物理学、化学および情報処理技術に関する知識とそれらを応用する能力を身につけること |
| D | 電子システム工学分野の幅広い基礎知識を習得し、さらにそれらを基礎として高度な専門知識を身につけること |
| D-1 | 電気・電子・情報工学をカバーする電子システム工学分野の幅広い技術について、基礎知識とそれらを課題解決に応用する能力を身につけること |
| D-2 | 電気・電子・情報工学をカバーする電子システム工学分野の幅広い技術の中から興味に応じて選択した個別技術について、高度な専門知識とそれらを課題解決に応用する能力を身につけること |
| E | 電子システム工学分野の実験、実習の実践を通して、工学課題を設定・遂行・解決する能力を身につけること |
| E-1 | 電気・電子・情報工学をカバーする電子システム工学分野の幅広い実験の実験の計画遂行能力と、結果の解析・考察・説明能力および報告書の作成能力を身につけること |
| E-2 | 電子システム工学分野の技術者に要求される課題の理解力と、与えられた制約下でその工学的な解決法を見つけて計画的に仕事を進め成果としてまとめる、エンジニアリングデザイン能力と実行力を身につけること |
| F | 自分の論点や考え方について論文や口頭でわかり易く論理的に発表しディスカッションを行う、コミュニケーション能力を身につけること |
| G | 技術者としての明確な目的意識を持ち、生活にわたって自発的に学習する能力を身につけること |

DP策定の留意点

1. 4年間の学士課程教育で保証する最低限の学習成果を記述すること(学科あるいはコース・専攻→学部の順、学科と学部の整合性の確保)。
2. 4つの観点別に、学生を主語にして「～できる」という行為動詞で記述すること。
3. それぞれの観点別人材養成像は、どの科目群で育成するかを考えておくこと。
 - カリキュラム・マップ
 - カリキュラム・ツリー
 } カリキュラム・ポリシー
4. それぞれの観点別人材養成像は、どのように達成度を検証するかを考えておくこと(教育効果の測定)。
5. 作り上げることが目的ではなく、何度も見直すことをいとわない。
6. (必ずしも厳格に観点を踏襲する必要はない)

観点別教育目標 (DP) の作成例

立命館大学映像学部

- ◆ 映像メディアおよび情報通信技術、外国語に対する基本的なりテラシー能力を修得する。
- ◆ 映像文化の歴史に通じ、社会の動きから伝えるべき主題を見つけ出す感性と知性、および的確な表現方法と媒体を選びとる基本的な能力を修得する。
- ◆ 映像の制作に関する基礎から応用までの知識、技術、技能を身につけており、映像をめぐる将来的な社会環境の変化および技術革新に対応しうる柔軟な能力と姿勢を獲得する。
- ◆ 映像の制作、流通、販売のそれぞれの現場で求められる基本的な知識と技能を修得する。
- ◆ 映像文化に対する理解とともに、映像を活用して地域や社会との有機的な関係を創造していく視点と行動力を修得する。

DP策定の手続き

(立命館大:生命科学部を例として)

人材育成目的(学則より)

生命科学部は、豊かな教養と生命科学分野の幅広い素養を基礎に専門的力量を有し、生命科学と関連分野の発展に寄与するとともに、人間の幸福と自然が調和した持続可能で豊かな社会の実現に貢献する人材を育成することを目的とする。

各学科で育成することを目的とする人材は以下の通りである。

(ex.生物工学科:化学、生物学、生化学、医科学などを基礎に生物工学を教育研究し、環境と生物・人間社会との関連性を理解しながら、生物工学の方法を応用展開できる人材)

公開するDP

1. 豊かな教養や国際化の進展に対応できる。
2. 数学・自然科学の基本原則を十分に理解している。
3. 生命科学を学ぶ上で基礎となる基礎的知識(化学、生物学、基礎医科学など)を修得している。
4. 生命科学がヒトや環境に及ぼす影響やその結果についての社会的責任を理解している。

「思考・判断」、「態度」

生物の構造や機能を解明し、バイオテクノロジーの新たな領域を開拓することができる)

DP策定の手続き

(立命館大:生命科学部を例として)

人材育成目的(学則より)

生命科学部は、豊かな教養と生命科学分野の幅広い素養を基礎に専門的力量を有し、生命科学と関連分野の発展に寄与するとともに、人間の幸福と自然が調和した持続可能で豊かな社会の実現に貢献する人材を育成することを目的とする。

各学科で育成することを目的とする人材は以下の通りである。

(ex.生物工学科:化学、生物学、生化学、医科学などを基礎に生物工学を教育研究し、環境と生物・人間社会との関連性を理解しながら、生物工学の方法を応用展開できる人材)

公開するDP

1. 豊かな教養や国際化の進展に対応できる。
2. 数学・自然科学の基本原則を十分に理解している。
3. 生命科学を学ぶ上で基礎となる基礎的知識(化学、生物学、基礎医科学など)を修得している。
4. 生命科学がヒトや環境に及ぼす影響やその結果についての社会的責任を理解している。
5. 各学科の専門性に合わせた専門力量を修得している。

(ex.生物工学科:化学の視点から生物の構造や機能を解明し、バイオテクノロジーの新たな領域を開拓することができる)

DP策定の手続き

(立命館大:生命科学部を例として)

人材育成目的(学則より)

生命科学部は、豊かな教養と生命科学分野の幅広い素養を基礎に専門的力量を有し、生命科学と関連分野の発展に寄与するとともに、人間の幸福と自然が調和した持続可能で豊かな社会の実現に貢献する人材を育成することを目的とする。

各学科で育成することを目的とする人材は以下の通りである。

(ex.生物工学科:化学、生物学、生化学、医科学などを基礎に生物工学を教育研究し、環境と生物・人間社会との関連性を理解しながら、生物工学の方法を応用展開できる人材)

1. 学科、コース単位に策定する。
2. 学則の人材育成目的をもとに、観点別に学生を主語に書き直す。
3. 4年間の学士課程教育の修了時に最低限身につけるべき資質・能力を書く。
4. ワークショップ形式で行うと、他学部とのシェアができ、効果的。
5. ワークショップ自体はシェアを含めて1時間程度で実施可能。

DP、CPの明確化の方策

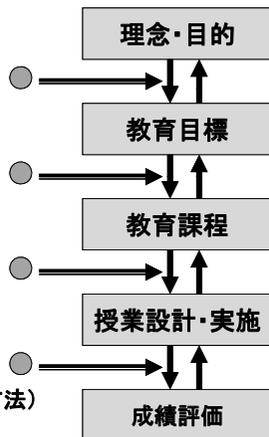
体系的、整合性、適切性

適切性(具体的な人材像)

体系的・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性
(成績評価基準、成績評価方法)



求められる作業

各学部・学科での
観点別の具体的な
DPの策定と公開

カリキュラム・マップ、
カリキュラム・ツリーの
策定と公開

観点別到達目標
を備えたシラバスの
策定と公開

観点別到達目標
ごとの成績評価基準の
策定と公開

科目の観点別到達目標の例

「芸術論特殊講義」(山口大学の例 by岩部センター長)

◆授業の概要

この講義では、2008年度に開催される展覧会を紹介し、特に企画趣旨や出品作品、作家について解説します。

◆授業の一般目標

- (1)幅広い分野の作品に親しむ。
- (2)各展覧会の企画趣旨について理解する。
- (3)美術展や美術館の制度と背景について理解する。

◆授業の到達目標

1. 認知的領域: 知識・理解

- (1)基礎的な美術史の用語を理解し、それをを用いて作品を説明できる。
- (2)企画展、常設展、公募展、巡回展、回顧展、テーマ展などの展覧会を区別できる。

2. 認知的領域: 思考・判断

展覧会の企画趣旨を読み解き、それに対する自らの考えを述べるができる。

3. 情意的領域: 関心・意欲

県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる。

日本の大学教員の思い違い(私も含めて！)

1. 「自分の学問への思い入れに応じて到達目標を決める」、「学生の実態に合わせて到達目標を決める」はどちらも間違い。
2. 「AやA+を間違いなく付けることが大学教員の役目」という誤解。
3. 「欧米のretention rateは高いほど大学の教育力の高さを示す」が、それは、各授業の到達目標が明確で、厳格な成績評価をしているから。「日本はretention rateは高いが、教育力は低い。」
4. DPから到達目標を設定し、厳格に成績評価をして初めて学生の変化が分かり、教学改革につなげることができる。それこそが教育の質の保証の第一歩。

観点別到達目標作成の留意点

1. DPとの関連で科目の到達目標を設定する。
2. 15回の授業の終わりにできるようになってもらいたい行動や状態(合格することで身に付く力)を、**学習者が主語**で「○○できる」という形式で書く。
3. 「理解する」などの概念的な言葉でなく、観点別の「**行為動詞**」を参照して、できるだけ観察可能な行動で表現する。
(例)「江戸時代のしくみを理解する」→「江戸時代のしくみを図解できる」、「乗法の意味がわかる」→「乗法の意味を表す作問ができる」
4. 観点別に、できるだけ単文で表現する。

観点別の到達目標の練習問題

「自転車に乗るときのコツをつかませる」
という到達目標はどこが変？

【問題点】

【書き直し】

【領域・観点と解説】



科目の観点別到達目標の例

全学共通教育科目－言語・情報教育科目－外国語教育科目

◆ Overall Goal of the Course

This course aims to develop students' ability to listen and comprehend spoken English of a high level of difficulty, such as news broadcasts, speeches, dialogues and lectures.

◆ Learning Outcomes

Students will:

- I. **Be able to** listen effectively to a variety of academic listening texts and recognize their features (Psychomotor Domain)
- II. **Be able to** take notes on, and summarize the material (Cognitive Domain)
- III. **Be able to** actively participate in discussions related to the material (Affective Domain)

◆ Instructional Methods and Organization

The Course will be taught using a variety of instructional methods including lecture, listening, pair/group/class discussion, summary writing and note-taking and the keeping of a listening journal.

◆ Assignments

Assignments will include keeping a listening journal, summary writing and writing reflective pieces based on material covered in classes.

◆ Assessment

- Participation (including preparation and class participation) -20%
- Listening Journal -20%
- Quizzes -20%
- Final Exam -40%



DP、CPの明確化の方策

体系性、整合性、適切性

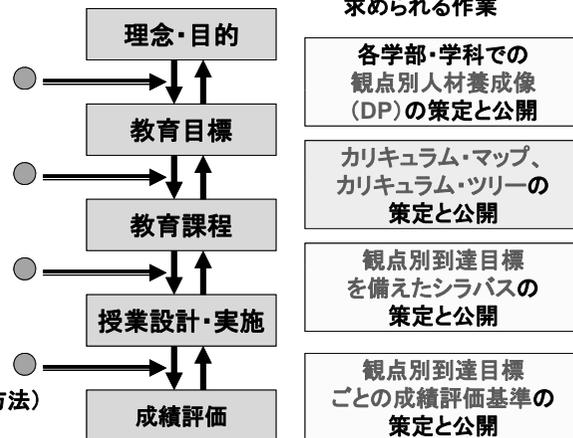
適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性

(成績評価基準、成績評価方法)



カリキュラム・マップ、ツリーとは

- ◆ 領域(観点)別に記述された、ディプロマ・ポリシーと各授業の到達目標との対応表を「カリキュラム・マップ」と呼ぶ。
- ◆ カリキュラム構築には、①目的(人材養成像)、②scope(カリキュラム・マップ)、③sequence(カリキュラム・ツリー)が必須。
- ◆ 認証評価の点検・評価項目における「4 教育内容・方法・成果」-「教育課程・教育内容」-「1)教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか」の挙証に対処するものである。
- ◆ マップもツリーも作り上げることが目的ではない。これをもとにカリキュラムの整合性、体系性を見直し、徐々に改善していくためのツールである。

電子システム工学科 授業科目別学習保証時間および各授業科目の学習・教育目標一つ一つに対する関与の程度(その2)

区分	授業科目名	単位数	必修・選択等の別	学年・学期	合計時間数(時間)	学習保証時間(時間)			学習・教育目標に対する関与の程度									
						学習内容の区分			A1	A2	B	C	D1	D2	E1	E2	F	G
						人文科学 社会科学 語学	数学 自然科学 情報技術	専門分野										
学部共通基礎科目	材料科学概論	2	選択	1・前期	21		21						○					
	機械システム工学概論	2	選択	1・前期	21		21						○					
	電子システム工学概論	2	必修	1・前期	21		21						◎					
	確率統計	2	必修	1・後期	21		21					◎						
	微積分Ⅰ	2	必修	1・前期	21		21					◎						
	微積分Ⅱ	2	必修	1・後期	21		21					◎						
	線形代数Ⅰ	2	必修	1・前期	21		21					◎						
	線形代数Ⅱ	2	選択	1・後期	21		21					○						
	基礎力学	2	必修	1・前期	21		21					◎						
	基礎電磁気学	2	必修	1・後期	21		21					◎						
	電子と化学結合	2	選択	1・後期	21		21					○						
	基礎化学	2	必修	1・前期	21		21					◎						
	分析化学	2	選択	1・前期	21		21					○						
	基礎電気電子回路	2	必修	1・後期	21		21					◎						
	物理学実験	2	必修	1・後期	42		42					◎						
	微積分統論	2	選択	2・前期	21		21					○						
	工業数学	2	必修	2・後期	21		21					◎						
	微分方程式	2	選択	2・前期	21		21					○						
	分析・環境化学実験	2	選択	2・前期	42		42					○						
	科学技術英語	2	必修	3・前期	21	21						◎						
工業数理	2	選択	3・前期	21		21					○							
技術者倫理	2	必修	3・後期	21	21						◎							
産業技術マネジメント	2	選択	4・後期	21	21						○							
※無機化学Ⅰ	2	選択	2・前期	21		21					○							
専門科目 学科基礎科目	電子システム工学セミナー	2	選択	1・前期	63			63							○			○
	電磁気学Ⅰ	2	必修	2・前期	21			21					◎					
	電磁気学Ⅱ	2	選択	2・後期	21			21					○					
	電気回路Ⅰ	2	必修	2・前期	21			21					◎					
	電気回路Ⅱ	2	選択	2・後期	21			21					○					
	電子回路Ⅰ	2	必修	2・後期	21			21					◎					
	量子力学概論	2	選択	2・前期	21			21					○					
	物性デバイス基礎論	2	選択	2・後期	21			21					○					
	半導体基礎	2	必修	2・後期	21			21					◎					
	コンピュータハードウェア	2	必修	2・後期	21			21					◎					
	アルゴリズムとデータ構造	2	必修	2・前期	21			21					◎					
	プログラミング言語	2	必修	2・後期	21			21					◎					
	デジタル信号処理	2	選択	2・後期	21			21					○					
	情報理論	2	選択	2・前期	21			21					○					
	電子システム工学実験Ⅰ	2	必修	2・前期	63			63							◎			
	電子システム工学実験Ⅱ	2	必修	2・後期	63			63							◎			
	電子システム工学演習Ⅰ	1	必修	2・前期	21			21										◎
	電子システム工学演習Ⅱ	1	必修	2・後期	21			21										◎
	電子回路Ⅱ	2	必修	3・前期	21			21					◎					
	電気電子計測Ⅰ	2	必修	3・前期	21			21					◎					
	電気電子計測Ⅱ	2	選択	3・後期	21			21					○					
	電気エネルギーシステム工学	2	選択	3・前期	21			21					○					
	半導体デバイス	2	選択	3・前期	21			21					○					
	制御工学	2	選択	3・前期	21			21					○					
	電力工学Ⅰ	2	選択	3・前期	21			21					○					
	電力工学Ⅱ	2	選択	3・後期	21			21					○					
	情報通信工学	2	選択	3・前期	21			21					○					
コンピュータアーキテクチャ	2	選択	3・前期	21			21					○						
数値解析・数値計算	2	選択	3・後期	21			21					○						
コンピュータソフトウェア	2	必修	3・前期	21			21					◎						
電子システム工学実験Ⅲ	2	必修	3・前期	63			63							◎				
電子システム工学実験Ⅳ	2	必修	3・後期	63			63								◎			
電子システム工学演習Ⅲ	1	必修	3・前期	21			21					◎						
学科専門科目	電磁波工学	2	選択	3・後期	21			21					○					
	電気機器	2	選択	3・後期	21			21					○					
	応用電子機器	2	選択	3・後期	21			21					○					
	集積回路設計基礎	2	選択	3・後期	21			21					○					
	電子デバイス	2	選択	3・後期	21			21					○					
	マルチメディア	2	選択	3・後期	21			21					○					
	インターネット工学	2	選択	3・後期	21			21					○					
	集積化プロセス工学	2	選択	4・前期	21			21					○					
	プラズマ工学	2	選択	4・前期	21			21					○					
	パワーエレクトロニクス	2	選択	4・前期	21			21					○					
	光エレクトロニクス	2	選択	4・前期	21			21					○					
	ロボット工学	2	選択	4・前期	21			21					○					
電気関係法規・施設管理	2	選択	4・後期	21			21					○						
卒業研究	8	必修	4・通年	252			252						◎		◎	◎	◎	

※複数学科共通科目

電子システム工学科 学習・教育目標を達成するために必要な授業科目の流れ

学習・教育目標	授業科目名							
	1年		2年		3年		4年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
A-1	人間探求学	健康・体力科学 I	健康・体力科学 II	「人間学」の必修科目以外から4科目選択必修				
A-2	環境マネジメント総論					技術者倫理		産業技術マネジメント
B	第一外国語 I ※1 第一外国語 II ※1 第二外国語 I ※2		第一外国語 III ※1 第一外国語 IV ※1 第二外国語 II ※2		科学技術英語			
C	情報処理演習 I 微積分 I 線形代数 I 基礎力学 基礎化学 分析化学	情報科学概論 確率統計 微積分 II 線形代数 II 物理学実験 基礎電磁気学 基礎電気電子回路 電子と化学結合	情報処理演習 II 微積分統論 微分方程式 無機化学 I 分析・環境化学実験	工業数学	工業数理			
D-1	材料科学概論 機械システム工学概論 電子システム工学概論	電磁気学 I 電気回路 I	電磁気学 II 電子回路 I 電気回路 II	半導体基礎 量子力学概論 情報理論 アルゴリズムとデータ構造 電子システム工学演習 I	物性デバイス基礎論 デジタル信号処理 コンピュータハードウェア プログラミング言語 電子システム工学演習 II	電気電子計測 I 電子回路 II 制御工学 電力工学 I 電気エネルギーシステム工学 半導体デバイス 情報通信工学 コンピュータアーキテクチャ コンピュータソフトウェア 電子システム工学演習 III	電気電子計測 II 電力工学 II 数値解析・数値計算	
D-2						電磁波工学 電子デバイス 電気機器 集積回路設計基礎 応用電子機器 マルチメディア インターネット工学	プラズマ工学 光エレクトロニクス パワーエレクトロニクス 集積化プロセス工学 ロボット工学	電気関係法規・施設管理 卒業研究
E-1	電子システム工学セミナー	電子システム工学実験 I	電子システム工学実験 II	電子システム工学実験 III				
E-2					電子システム工学実験 IV		卒業研究	
F							卒業研究	
G	電子システム工学セミナー	電子システム工学演習 I	電子システム工学演習 II				卒業研究	

※1 英語必修。ただし、留学生は、英語および日本語から選択必修。

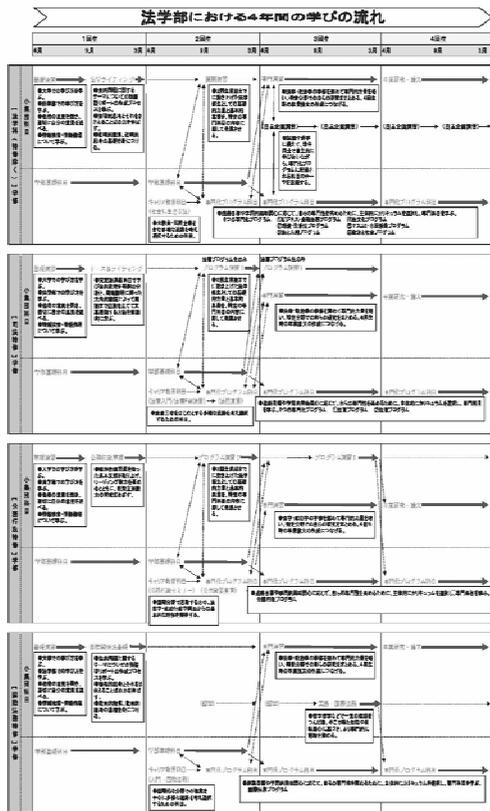
※2 ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、初習英語(留学生のみ)、英語(留学生のみ)、日本語(留学生のみ)から選択必修。

カリキュラム・マップの例 山口大学教育学部数理情報コース

教育学部・数理情報コースのGraduation Policy(GP)								
授業科目名	授業科目の主題	授業科目の到達目標	数学の基本理論を理解し、数学的思考、計算等が適切に、かつ正確にできる	数理的現象や実際の身の回りの現象を数理的・数学的に考察し、分析することができる	文献および資料収集が必要に応じ、的確にできる	計算機について基礎的事項を理解している	プログラミングの基本を修得している	教育工学的手法の基本を理解している
情報処理演習	1. OSの基本的操作を学ぶ 2. ワードプロセッサの使い方を学ぶ 3. 表計算ソフトの使い方を学ぶ	1. ワードプロセッサを使って基本的な文書が作れるようになる 2. 表計算ソフトを使って簡単な表計算が出来るようになる。		1. △ 2. △		1. ◎ 2. ◎		
教育情報基礎	1. UNIXの基礎的な利用の理解 2. 数式を含んだ文書を容易に作成可能な文書整形システムLaTeX2εの利用法の理解	1. UNIXの利用者としての利用法を説明できる 2. 簡単なC Shellのプログラムを読んで理解できる 3. LaTeX2εを用いて数式を含んだ文書の作成法を説明できる					1. ○ 2. ◎ 3. △	
教育情報基礎演習	1. UNIXの基礎的な利用法の修得 2. 数式を含んだ文書を容易に作成可能な文書整形システムLaTeX2εの利用法の修得	1. UNIXを利用者として実際に利用することができる 2. 簡単なC Shellのプログラムを実際に作製できる 3. LaTeX2εを用いて数式を含んだ文書を実際に作製することができる					1. ○ 2. ◎ 3. △	

カリキュラム・マップの例 立命館大学文学部(東洋史学専攻 一部)

科目区分	科目名	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6
入門科目	東洋史学入門					○	○
	リテラシー入門Ⅰ				○		
	リテラシー入門Ⅱ				○		
小集団科目	研究入門Ⅰ					○	○
	研究入門Ⅱ					○	○
	基礎購読Ⅰ			○	○		
	基礎購読Ⅱ			○	○		
	専門演習Ⅰ			○			
	専門演習Ⅱ			○			
	専門演習Ⅲ				○		○
	専門演習Ⅳ				○		○
卒業論文	卒業論文				○		
概論	東洋史概論Ⅰ	○					
	東洋史概論Ⅱ	○					
	東洋史概論Ⅲ	○					
	東洋史概論Ⅳ	○					
講義	漢文			○			
	東洋史学史		○				○
購読	東洋史購読演習Ⅰ			○			
	東洋史購読演習Ⅱ			○			
特殊講義	東洋史特殊講義		○			○	
講義・スキル系科目	東洋学のための言語入門			○			
	東洋学のための情報処理				○		
	アジアの文学						○
	実践中国語Ⅰ			○	○		
	実践中国語Ⅱ			○	○		
	実践中国語Ⅲ			○	○		
	実践中国語Ⅳ			○	○		



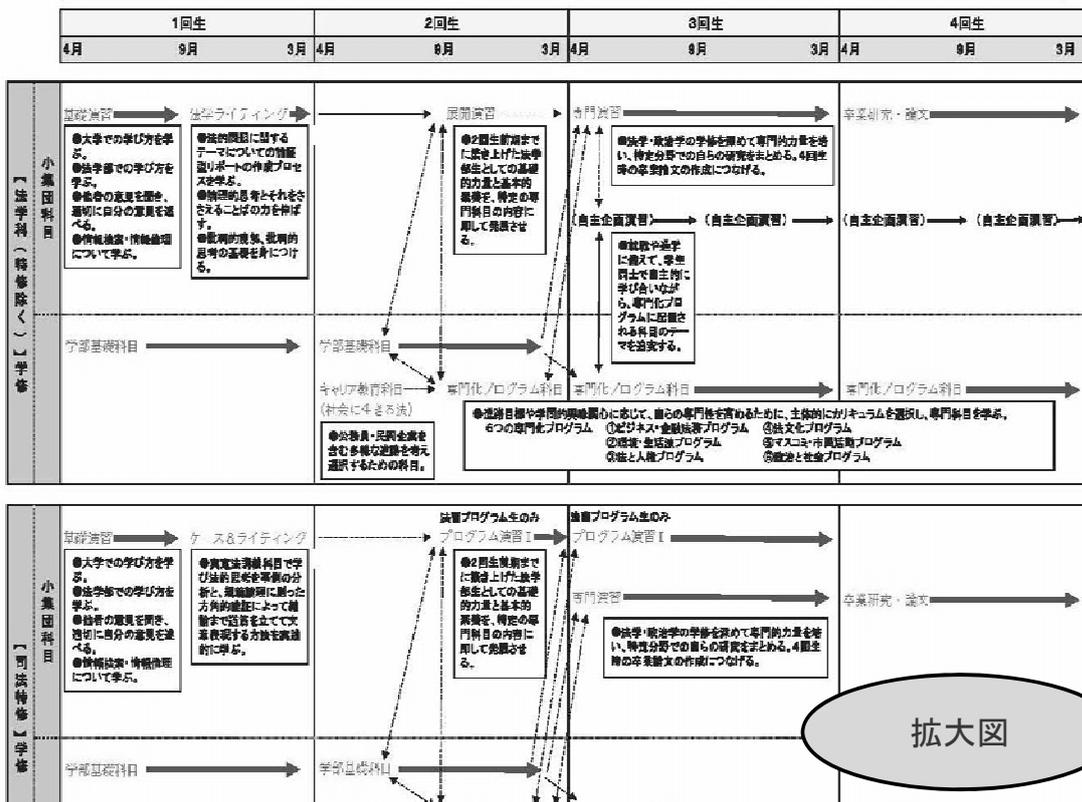
カリキュラム・ツリーの例

立命館大学法学部

「学びマップ」より

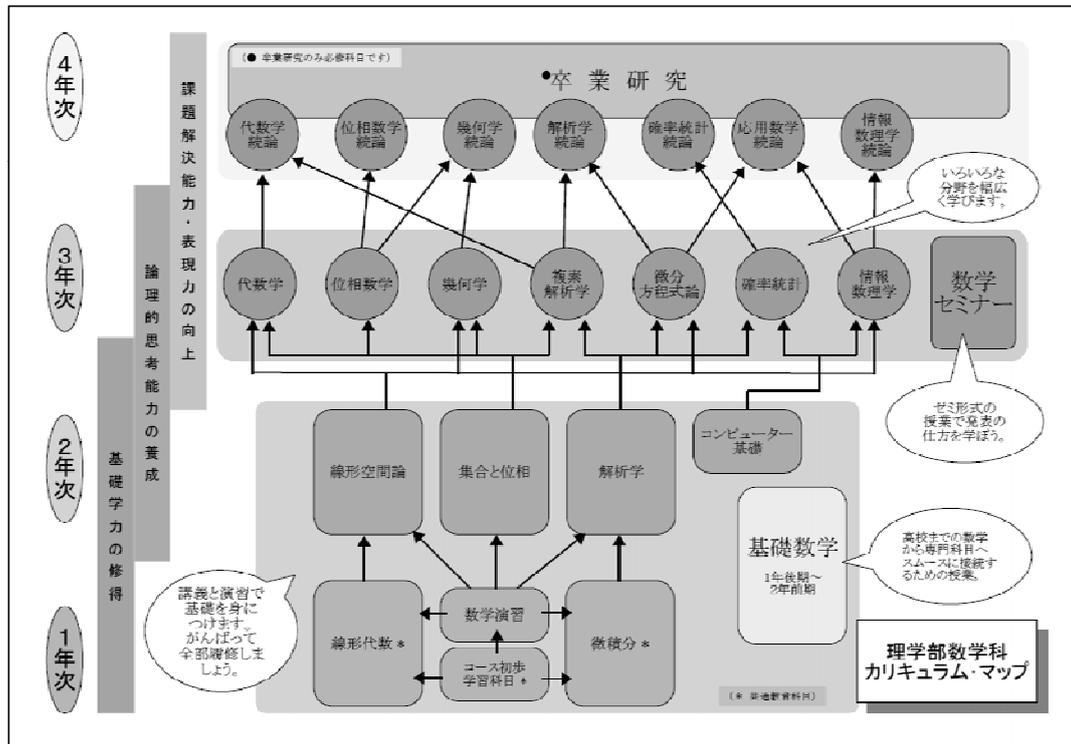


法学部における4年間の学びの流れ



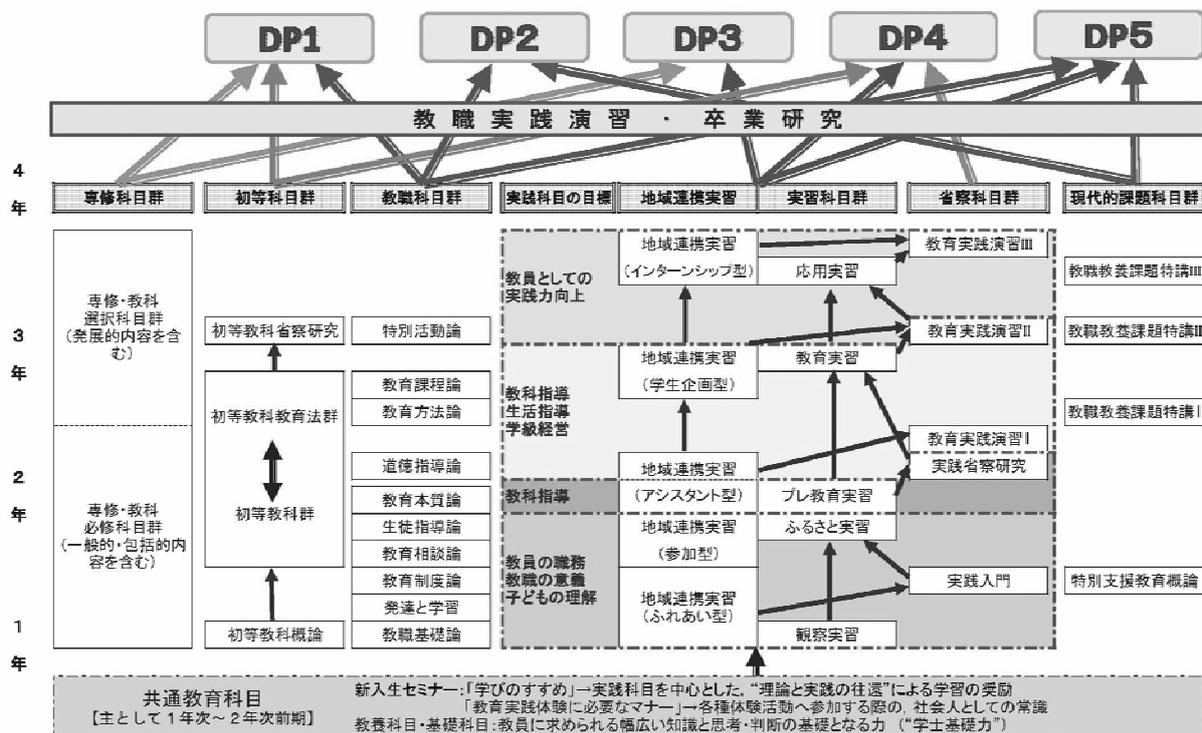
カリキュラム・ツリーの例

愛媛大学理学部数学科



カリキュラム・ツリーの例

愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程



DP、CPの明確化の方策

体系性、整合性、適切性

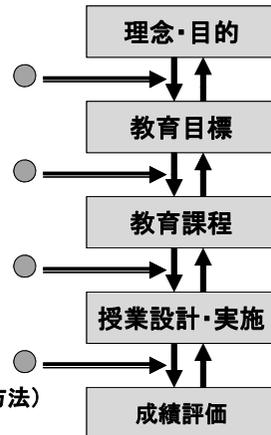
適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性

(成績評価基準、成績評価方法)



求められる作業

各学部・学科での
観点別人材養成
(DP)の策定と公開

カリキュラム・マップ、
カリキュラム・ツリーの
策定と公開

観点別到達目標
を備えたシラバスの
策定と公開

観点別到達目標
ごとの成績評価基準の
策定と公開

大学における成績評価に関する法令

1. 大学設置基準(第二十五条の二)

- I. 大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。
- II. 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。

2. 学校教育法施行規則(第68条の3)

学校教育法第55条の3に規定する卒業の認定は、次の各号に掲げる要件のすべてに該当する場合に限り行うことができる。

- I. 大学が、学修の成果に係る評価の基準その他の学校教育法第55条の3に規定する卒業の認定の基準を定め、それを公表していること。
- II. 省略
- III. 学校教育法第55条第1項に定める学部の課程を履修する学生が、卒業の要件として修得すべき単位を修得し、かつ、当該単位を優秀な成績をもって修得したと認められること。

3. 学校教育法施行規則の改正に伴う大学等の教育情報の公表(H23.4~)

- I. 授業科目、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画に関すること。(第5号関係)
- これらは、大学設置基準第25条の2第1項等において、学生に明示することとされているものであること。その際、教育課程の体系性を明らかにする観点に留意すること。年間の授業計画については、シラバスや年間授業計画の概要を活用することが考えられること。
- II. 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること。(第6号関係)
- これらは、大学設置基準第25条の2第2項等において、学生に明示することとされているものであること。その際、必修科目、選択科目及び自由科目の別の必要単位修得数を明らかにし、取得可能な学位に関する情報を明らかにすることに留意すること。

公正で、厳格かつ客観的な 成績評価の方法

ルーブリック(rubric)評価

- 情意的領域の目標や向上目標の到達評価を含め、厳格かつ客観的な成績評価に有効。
- 評価の方法や基準に関する学習者への説明責任を果たす。
- 学習者に事前に示すことにより、学習者の意欲付けにも活用。
- 評価規準(criteria、description: 学習活動に応じたより具体的な到達目標=評価指標)
- 評価基準(standards、scales: どの程度達成できればどの評点を与えるか)の策定。

Rubric Template (Huba & Freed, 2000)

	1: Beginning	2: Developing	3: Accomplished	4: Exemplary
1. Stated Objective or Performance	Description of identifiable performance characteristics reflecting a beginning level of performance	Description of identifiable performance characteristics reflecting development and movement toward mastery of performance	Description of identifiable performance characteristics reflecting mastery of performance	Description of identifiable performance characteristics reflecting the highest level of performance
2. Stated Objective or Performance				
3. Stated Objective or Performance				



成績評価の実際の手順

<手順1> 評価手段、評価比率を決める(シラバスに掲載)

到達目標の観点ごとに、①どんな評価手段を用いるか、②その評価比率をどうするかを決める。

<手順2> 第1段階のルーブリックを作る(シラバスに掲載)

到達目標の観点(=評価規準)ごとに、100点満点中の評価比率に相当する点数を最高点として、その60%未満に相当する点数を「Fレベル(不合格)」、60%~70%に相当する点数を「Cレベル」、70%~80%に相当する点数を「Bレベル」、80%~90%に相当する点数を「Aレベル」、90%~100%に相当する点数を「Sレベル」と設定し、「F」「C」「B」「A」「S」に相当する具体的な行動目標を書いた評価基準(standards)を作成し、学生に提示する(第1段階のルーブリック)。

<手順3> 第2段階のルーブリックを作る(受講生への事前通知が望ましい)

各レベルに応じて試験やレポート課題に評価規準と評価基準を書き、学生に提示する。加点法と減点法がある(第2段階のルーブリック)。

<手順4> グレーディング(到達度評価か相対評価)を行う(受講生への事前通知が望ましい)

各到達目標の点数を合計するか、各到達目標の評価を総合評価して、総合的な「F」「C」「B」「A」「S」を判定する(グレーディング)。

成績評価の例1

「芸術論特殊講義」(山口大学の例 by岩部センター長)

◆授業の概要

この講義では、2008年度に開催される展覧会を紹介します。特に企画趣旨や出品作品、作家について解説します。

◆授業の一般目標

- (1) 幅広い分野の作品に親しむ。
- (2) 各展覧会の企画趣旨について理解する。
- (3) 美術展や美術館の制度と背景について理解する。

◆授業の到達目標

1. 認知的領域: 知識・理解

- (1) 基礎的な美術史の用語を理解し、それを用いて作品を説明できる。
- (2) 企画展、常設展、公募展、巡回展、回顧展、テーマ展などの展覧会を区別できる。

2. 認知的領域: 思考・判断

展覧会の企画趣旨を読み解き、それに対する自らの考えを述べるができる。

3. 情意的領域: 関心・意欲

県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる。

成績評価の例1 (手順1)

「芸術論特殊講義」

◆授業の到達目標

1. 認知的領域: 知識・理解

- (1) 基礎的な美術史の用語を理解し、それを用いて作品を説明できる。
- (2) 企画展、常設展、公募展、巡回展、回顧展、テーマ展などの展覧会を区別できる。

2. 認知的領域: 思考・判断

展覧会の企画趣旨を読み解き、それに対する自らの考えを述べるができる。

3. 情意的領域: 関心・意欲

県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる。

到達目標	評価手段	評価比率
①基礎的な美術史の用語を理解し、それを用いて作品を説明できる。	定期試験 (60%)	20%
②企画展、常設展、公募展、巡回展、回顧展、テーマ展などの展覧会を区別できる。		15%
③展覧会の企画趣旨を読み解き、それに対する自らの考えを述べることができる。		25%
④県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる。		課題レポート(40%)

成績評価の例1 (手順2-1)

「芸術論特殊講義」(到達目標の①および②に関する第1段階ルーブリック)

到達目標(評価規準)	評価基準 F	評価基準 C	評価基準 B	評価基準 A	評価基準 S	評価比率
基礎的な美術史の用語を理解し、それを用いて作品を説明できる。 (評価手段: 定期試験)	(~11点) 美術史の用語を用いて作品を説明できていない。	(12点~13点) いくつかの間違いもあるが、基礎的な美術史の用語を用いて最低限の説明している。	(14点~15点) 大きな間違いがなく、基礎的な美術史の用語を用いて説明ができています。	(16点~17点) ほぼ完璧に基礎的な美術史の用語を用いて説明ができています。	(18点~20点) 本作品を美術史的に説明する模範解答である。	20%
企画展、常設展、公募展、巡回展、回顧展、テーマ展などの展覧会を区別できる。 (評価手段: 定期試験)	(~8点) 展覧会が区別できていない。	(9点~10点) いくつかの間違いもあるが、各展覧会の定義を最低限押さえている。	(11点~12点) 大きな間違いがなく、各展覧会の定義を踏まえて区別ができています。	(13点~14点) ほぼ完璧に定義を踏まえた区別ができています。	(15点) 展覧会の区別について模範解答である。	15%

成績評価の例1 (手順2-2)

「芸術論特殊講義」(到達目標の③および④に関する第1段階のルーブリック)

到達目標(評価規準)	評価基準 F	評価基準 C	評価基準 B	評価基準 A	評価基準 S	評価比率
展覧会の企画趣旨を読み解き、それに対する自らの考えを述べる(評価手段:定期試験)	(~14点) 企画趣旨に対する自らの考えを適切に述べていない。	(15点~17点) いくつかの論理的な問題や事実誤認あるいは誤字脱字もあるが、企画趣旨に対する自らの考えを最低限述べている。	(18点~20点) 大きな論理的な問題や事実誤認がなく、企画趣旨に対する自らの考えを述べている。	(21点~23点) ほぼ完璧に企画趣旨に対する自らの考えを述べている。	(24点~25点) 展覧会の企画趣旨に対する自らの考えを述べる模範解答である。	25%
県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる(評価手段:課題レポート)	(~24点) 展覧会を見に行っていない(0点)か、行ってもレポートを提出していない(0点)。あるいは評価できるレベルに達していない。	(25点~27点) 実際に展覧会を見に行き、企画趣旨を読み取り、作品に関する最低限の批評を述べている。	(28点~31点) 実際に展覧会を見に行き、大きな間違いなく企画趣旨を読み取り、作品に関する批評をまとめている。	(32点~35点) 実際に展覧会を見に行き、ほぼ完璧に企画趣旨を読み取り、作品に関する自らの批評をまとめている。	(36点~40点) 実際に展覧会を見に行き、企画趣旨の読み取りや作品批評に関して模範的なレポートである。	40%

成績評価の例1 (手順3-1)

定期試験の問題例と第2段階ルーブリック(加算法)

- 到達目標:①基礎的な美術史の用語を理解し、それを用いて作品を説明できる(定期試験20%)。
- 問題例:「以下の作品3点について、美術史の用語を用いて作品を説明しなさい」
- 第2段階ルーブリック例(加算法-「配点」)、事前通知が望ましい

評価規準(下)	0	1	2	3
正確な美術史の用語を用いることができる。	用語の間違いが3つ以上ある(0点)。	用語の間違いが2つある(2点)。	用語の間違いが1つある(4点)。	用語の間違いが全くない(6点)。
作品の特徴を適切に指摘することができる。	作品の特徴を指摘できていない(0点)。	作品3点中1点について適切に特徴を指摘できている(1~2点)。	作品3点中2点について適切に特徴を指摘できている(3~4点)。	作品3点とも適切に特徴を指摘できている(5~6点)。
論理的な説明ができる。	論理的な文書になっていない(0点)。	作品3点中1点については論理的な文書になっている(1~2点)。	作品3点中2点については論理的な文書になっている(3~4点)。	作品3点とも論理的な文書で説明している(5点)。
誤字脱字がなく、段落も明確で読みやすい文章を書くことができる。	誤字脱字が3カ所以上あるか、段落が不明確な箇所が3カ所以上ある(0点)。	誤字脱字が2カ所あるか、段落が不明確な箇所が2カ所ある(1点)。	誤字脱字が1カ所あるか、段落が不明確な箇所が1カ所ある(2点)。	誤字脱字もなく、段落も明確につけてある(3点)。

成績評価の例1 (手順3-2)

課題レポートの問題例と第2段階ルーブリック(加算法)

- 到達目標:④県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる(課題レポート40%)。
- 問題例:「展覧会を見に行き、企画趣旨について自らの考えを述べるとともに、美術史の用語を用いて気に入った作品5点について批評しなさい。なお、レポートは5000字程度にまとめて、パンフレットとともに提出すること」
- 第2段階ルーブリック例(加算法-「配点」)、事前通知が望ましい

評価規準(下)	0	1	2	3
企画趣旨に対する自らの考えを述べる(評価手段:課題レポート)	企画趣旨に対する自らの考えを適切に述べていない(0点)。	いくつかの間違いはあるが、企画趣旨に対する自らの考えを最低限述べている(1~5点)。	大きな間違いがなく、企画趣旨に対する自らの考えをほぼ適切に述べている(6~10点)。	完璧に企画趣旨を読み取り、それに対する自らの意見を適切に述べている(11点~15点)。
正確な美術史の用語を用いることができる。	用語の間違いが3つ以上ある(0点)。	用語の間違いが2つある(2点)。	用語の間違いが1つある(4点)。	用語の間違いが全くない(6点)。
作品の特徴を適切に指摘することができる。	作品の特徴を指摘できていない(0点)。	作品5点中1点ないし2点について適切に特徴を指摘できている(2、4点)。	作品5点中3点ないし4点について適切に特徴を指摘できている(6、8点)。	作品5点とも適切に特徴を指摘できている(10点)。
論理的な説明ができる。	論理的な文書になっていない(0点)。	作品5点中1点ないし2点について論理的な文書になっている(1、2点)。	作品5点中3点ないし4点について論理的な文書になっている(3、4点)。	作品5点とも論理的な文書で説明している(6点)。
誤字脱字がなく、段落も明確で読みやすい文章を書くことができる。	誤字脱字が5カ所以上あるか、段落が不明確な箇所が5カ所以上ある(0点)。	誤字脱字が3、4カ所あるか、段落が不明確な箇所が3、4カ所ある(1点)。	誤字脱字が1、2カ所あるか、段落が不明確な箇所が1、2カ所ある(2点)。	誤字脱字もなく、段落も明確につけてある(3点)。

成績評価の例2 (手順3)

小レポートの問題例と第2段階ルーブリック(減点法)

- 到達目標:①教育の方法・技術に関する理論について、その歴史や特徴を説明することができる。②現代の教育問題に関して、教育的な観点に基づき、自らの意見を述べる(小レポート/小テスト40%、毎回4点満点)。
- 問題例:「あなたは、日本の子どもたちの学力や学習意欲が低下した原因には、学習指導要領を除いてどのようなものがあると考えますか?3つ考えられるものを挙げ、その理由を述べてください」
- 第2段階ルーブリック例(減点法)、毎回、小レポート/小テストの課題に印刷

- 3つ原因が挙げてあり、その理由が述べられているか
 - 1つしか挙げていない 2点減点
 - 2つしか挙げていない 1点減点
- 原因について深く考察できているか
 - 授業で取り上げたものを反復してあるだけ 1点減点
 - 理由がよい加減であったり、独りよがりの見解が書いてある 1点減点
- 論理構成と書き方が適切か
 - 誤字脱字が多い 1点減点
 - 字が読みづらい 1点減点
 - 段落がない 1点減点
 - 論旨が不明確である 1点減点
 - だ、である体で書かれていない 1点減点



到達度評価(再評価方式)

	定期試験			定期試験合計	課題レポート	合計点	到達目標①の評価	到達目標②の評価	到達目標③の評価	到達目標④の評価	総合評価
	問題1	問題2	問題3								
学生A	16	11	19	46	31	77	A	B	B	B	B
学生B	12	10	15	37	0	37	C	C	C	F	F
学生C	12	11	16	39	27	66	C	B	C	C	C
学生D	17	15	20	52	32	84	A	S	B	A	A
学生E	14	11	17	42	27	69	B	B	C	C	C
学生F	5	6	10	21	20	41	F	F	F	F	F
学生G	18	15	23	56	37	93	S	S	A	S	S
学生H	19	14	22	55	32	87	S	A	A	A	A
学生I	14	11	18	43	28	71	B	B	B	B	B
学生J	12	11	18	41	25	66	C	B	B	C	C

到達度評価(総合評価方式)

	定期試験			課題レポート	到達目標①の評価	到達目標②の評価	到達目標③の評価	到達目標④の評価	総合評価
	問題1	問題2	問題3						
学生A	16	11	19	31	A	B	B	B	B
学生B	12	10	15	0	C	C	C	F	C
学生C	12	11	16	27	C	B	C	C	C
学生D	17	15	20	32	A	S	B	A	A
学生E	14	11	17	27	B	B	C	C	C
学生F	5	6	10	20	F	F	F	F	F
学生G	18	15	23	37	S	S	A	S	S
学生H	19	14	22	32	S	A	A	A	A
学生I	14	11	18	28	B	B	B	B	B
学生J	12	11	18	25	C	B	B	C	C

評価の相違

問題1は、定期試験で、到達目標①に関するもの。「以下の作品3点について、美術史の用語を用いて作品を説明しなさい」

問題2は、定期試験で、到達目標②に関するもの。「以下の言葉の意味を説明しなさい」

問題3は、定期試験で、到達目標③に関するもの。「下記に示したある展覧会の企画趣旨について、内容を読み解き、それに対する自らの意見を述べなさい」

問題4は、課題レポートで、到達目標④に関して「展覧会を見に行き、企画趣旨について自らの考えを述べるとともに、美術史の用語を用いて気に入った作品5点について批評し、

成績評価の例 1 (手順4)

• グレーディング(成績評価)

- 到達度評価の場合

➢ <再評価方式> 合計点について60点未満を「F評価」、60点台を「C評価」、70点台を「B評価」、80点台を「A評価」、90点台を「S評価」とする方法

✓ メリット: 合計点の素点が提出できる。デメリット: 各到達目標についての評価を再集計しなければならない。

➢ <総合評価方式> 各到達目標の達成度を総合評価する方法。例として、到達目標①~④の評価がそれぞれ「B」「B」「A」「B」ならば総合評価を「B」とするなど。

✓ メリット: 各到達目標の評価から判断できる。デメリット: 到達目標間の配分が困難。

- 相対評価の場合

➢ <相対評価方式> 合計点について60点未満を「F評価」、60点以上について合計点の素点をもとに構成比率を決めて割り当てる方法。例として、「C」:30%、「B」:40%、「A」:25%、「S」:5%など。

✓ メリット: 合格者の質の保証をした上での作業であり、科目ごとの評価にばらつきがなくなり、GPAの信頼性を上げる。デメリット: 科目の到達目標や難易度が十分調整されなければ意味がない。



成績評価の例 1 (手順4)

• グレーディング

- 到達度

学習成果の評価(『大学の情報公開義務化と三つの方針』、平成22年度教育研究委員会報告書、日本私立大学連盟、2010):

公表が義務付けられた、学習成果の評価基準としては、例えばA、B、C、Dなどの評価を、何点以上何点未満と記載して済ませることも可能であろうが、それでは大学教育の質保証を行ったことにはならない、ということも事実である。そのためには、大学自体の評価は社会に任せるとして、大学の学習成果の評価基準については、同一の基準を学部・学科・課程等、さらには大学の全教員が共有することによる相対評価等も利用して、教員個人による成績評価の「偏り」がGPA等の全体的評価に影響を及ぼさないようにするという方法も検討するなどの工夫が求められよう。イギリスやアメリカ等の大学においては、成績評価に相対評価が取り入れられている例が少なくない

✓ メリット: 各到達目標の評価から判断できる。デメリット: 到達目標間の配分が困難。

- 相対評価の場合

➢ <相対評価方式> 合計点について60点未満を「F評価」、60点以上について合計点の素点をもとに構成比率を決めて割り当てる方法。例として、「C」:30%、「B」:40%、「A」:25%、「S」:5%など。

✓ メリット: 合格者の質の保証をした上での作業であり、科目ごとの評価にばらつきがなくなり、GPAの信頼性を挙げる。デメリット: 科目の到達目標や難易度が十分調整されなければ意味がない。



客観的かつ厳格な成績評価のための チェックリスト

- ① 到達目標が観点別に、あるいは少なくとも学生を主語に「~できる」という形で書かれているか(必須事項)
- ② 到達目標ごとに評価手段と評価比率が決められているか(必須事項)
- ③ 到達目標を評価規準ととらえて、評価規準ごとに評価基準(F~A,S=第1段階ルーブリック)が決められているか(必須事項)
- ④ 評価手段ごとに具体的な採点基準(加点法、減点法=第2段階ルーブリック)が決められているか(推奨事項)
- ⑤ ①~④が学生に事前に提示されているか(推奨事項)
- ⑥ 表計算ソフト等を用いて間違いのない成績処理を行っているか(推奨事項)

"Introduction to Rubrics - an assessment tool to save grading time, convey effective feedback and promote student learning - ", Dannelle, D. Stevens and Antonia J. Levi, 2004

Rubric for Film Presentation

Task Description: Working in groups of four or five, students will develop and present to the class an analysis of a Japanese movie about World War II. This analysis should go beyond a simple synopsis of the movie to discuss how well or poorly the film reflects a particular point of view about the war. You are expected to do additional research to develop this presentation and to use visual aids of some sort. All group members are expected to participate in the presentation.

	Exemplary	Competent	Developing
Individual presentation skills 20%	The presenter spoke clearly and intelligibly, modulating voice tone and quality, maintaining eye contact, and using appropriate body language. The use of humor and competent handling of technology also contributed to the excellence of the presentation. The presenter used all the time available but did not go over the time limit.	The presenter was intelligible but mumbled or droned, spoke too fast or too slow, whispered or shouted, used inappropriate body language, or failed to maintain eye contact, inappropriate excessive, or too little humor or technical problems detracted from the presentation. The presentation ran over or under the time limit but not dramatically.	The presenter mumbled or droned, spoke too fast or too slow, whispered or shouted used inappropriate body language, or failed to maintain eye contact to the point where intelligibility was compromised. Too much or too little humor or technological problems seriously detracted from the presentation. The presentation ran seriously over or under the time limit.
Group presentation skills 20%	The presentations followed a logical progression and allowed each member an equal opportunity to shine. Group members treated each other with courtesy and respect and assisted each other as needed.	The presentations followed a logical progression but were unbalanced in the way time or content was assigned to members, or the division of labor was fair but impeded the logical progression of the argument. Group members were mostly respectful and helpful toward one another, but there were lapses.	The presentations followed no logical progression, seriously overlapped one another, or allowed one or a few people to dominate. Group members showed little respect or courtesy toward one another and did not assist one another even when it was clear that a group member was in trouble.
Group organization 20%	The group thesis, topics to be covered and the direction the individual presentations will like are clearly stated at the beginning and carried through in the test of the presentation.	The thesis, topics to be covered, and the direction the individual presentations will take are clearly stated at the beginning but not carried through in the rest of the presentation, or the thesis, topics to be covered, and direction emerge in the presentation but are not clearly stated in the introduction.	The thesis, topics, and direction are unclear, unstated or not evident in the body of the presentation.

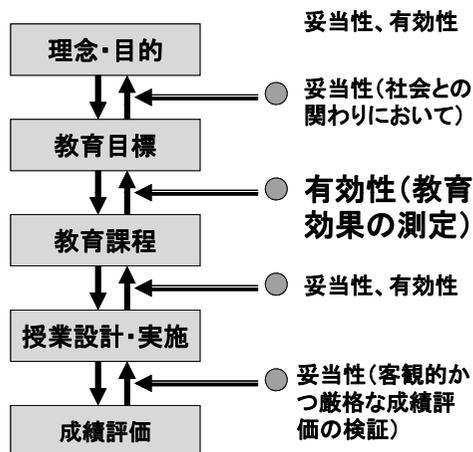
Figure 6.2 Three-level rubric with circled feedback.

※ルーブリックの活用: ①学生への返却でどんな学習成果を身につけたかを明示(上記例)、②ルーブリックを介したライティング・センター等との共同学習支援(課題、授業外学習)

DP、CPの明確化の方策

評価指標

DPの達成度の挙証
PDCAの「check」が求められる



インスティテューショナル・リサーチ (IR)

• Institutional Research (機関調査)

- 「機関の計画策定、政策形成、意志決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ」(Saupe,1990)
- 「リサーチ」といっても、単なる学術研究あるいは調査ではない→実践指向の強い組織的な調査分析活動
- 財政計画策定や認証評価対応のためのデータ提供から教授・学習に関するアセスメントまで幅広い。
- そのなかでも、教授 (teaching) ・学習 (learning) 領域を中心に扱うのが「教学IR」(立命館大)

岡田、2011

教育効果の測定方法

• 学生のラーニング・アウトカムズを評価する

- 1. 学習到達度テスト(工学、理学、経済学等)**
 - 直接指標。標準化されたAHELOや各大学開発のもの
 - 認知的領域の「知識・理解」中心。
- 2. GSA、CLA (generic skillsに関する直接指標)**
 - 「関心・意欲・態度」や「技能・表現」も測定。
- 3. 学生調査(自己申告アンケート)**
 - アスティンのI(input)-E(environment)-O(output)モデル
 - 間接指標。Eではカリキュラム、授業の経験、授業外の経験、大学の特徴。CSS、CEQ、GDS。
 - 直接指標と同様、generic skillsの測定にも利用可。
 - 教学改善の指標に利用可。
- 4. 学生調査(心理学的尺度)**
 - カリキュラム外の学習成果も明示化(個人)。
- 5. 核になる授業の厳格かつ客観的な成績評価**
 - ゼミや基礎演習、臨地実習等におけるルーブリック評価

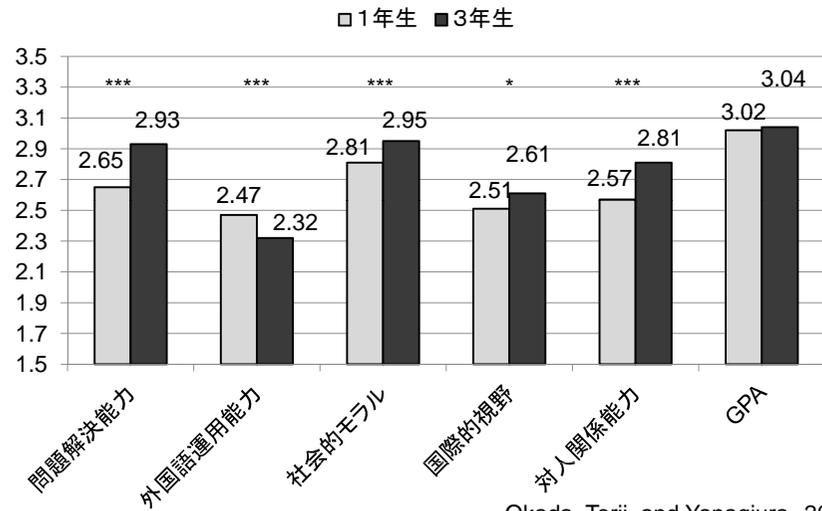


卒業時実施の「学びの実態調査」で聞かれるDP達成度の質問 (立命館大学)

立命館大学 法学部 観点別人材育成目的(DP)	A	B	C	D
1. 日々生起する個々の法現象および政治現象における問題の所在を的確に把握しうるための法学および政治学の知識および思考方法を身につける。	1	2	3	4
2. 法学および政治学の諸分野のうち、自らの問題関心を深め、自らの進路を切り拓くための専門分野に関して、知識とそれを応用する能力を身につける。	1	2	3	4
3. 専門性の枠にとらわれない広い視野を背景として、自らと異なる文化的背景、信条、意見をもつ他者とコミュニケーションを図り、その意見を尊重しつつ、主体的に自らの意見をまとめ述べる事ができる。	1	2	3	4
4. 「平和と民主主義」の理念に照らして法化社会における規範のあり方を主体的に考え、それを実現に移すことができる。	1	2	3	4
5. 自らの適性を客観的に見極め、自らの進路を主体的に切り拓き、自ら設定した目標に向かって主体的かつ系統的に学習する意欲と方法を身につける。	1	2	3	4
6. 論理的で正確な日本語を用いて、自らの意見を発表し、討論し、文章化することができる。	1	2	3	4
7. 外国語による基礎的コミュニケーション能力を身につけ、専門に関わるテーマについて外国語で理解し、討論する意欲を持つ。	1	2	3	4

A:全く達成されなかった、B:あまり達成されなかった、C:ある程度達成された、D:かなり達成された

学年により学習成果はどのように異なるか



各学習ごとにDPの達成度をチェックする仕組み（山形大学）

学習・教育目標	達成度評価対象	単位数	重み	設定ポイント数	分類	基準ポイント	1	1	2	2	3	3	4	4
							年前期	年後期	年前期	年後期	年前期	年後期	年前期	年後期
工学の基礎力	機械工学基礎Ⅱ	2	0.5	1.0	A	14.3								
	数学Ⅲ	2	1.0	2.0										
	機械工学基礎	2	0.4	0.8										
	計算力学	2	0.3	0.6										
技術者倫理等	文化・行動領域(教養)	2	1.0	2.0	B1	20.9								
	政治・経済領域(教養)	2	1.0	2.0										
	生命・環境領域(教養)	2	1.0	2.0										
	英語A(教養)	2	1.0	2.0	B2									
	ゼミナール	2	0.2	0.4										

個人ごとに達成度をリーダーチャートにしてフィードバック

学習成果の評価項目例（宮崎学園短期大学）

I. 認知的領域（論理的思考と問題解決力）

- ①情報の信頼性の判断ができる。
- ②習ったことを実際にやってみて、納得することができる。
- ③やりたいことではなく、自分のできることを明確に述べるができる。
- ④思考したことと疑問に思ったことを文章に表すことができる。
- ⑤多様な情報を適切に整理、分析、応用できる。
- ⑥分からないことを図書館で調べ、明らかにすることができる。

II. 認知的領域（調べる）

- ①図書館をはじめ様々な方法で情報を集めることができる。
- ②インターネットを効果的に活用し、確かな情報を収集することができる。
- ③疑問に思ったことや分からないことを人に質問したり、図書館等で調べたりして確かなものにすることができる。
- ④自分の課題解決のため、種々の方法で調べることができる。

APの明確化の方策

- ◆ アドミッション・ポリシー(AP)にも観点別教育目標が有効
- ◆ 認証評価の主要点検・評価項目の「5 学生の受け入れ」(大学基準協会)への対応
 - (2)学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集および入学者選抜を行っているか。
 - －学生募集方法、入学者選抜方法の適切性
 - －入学者選抜において透明性を確保するための措置の適切性
 - (4)学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

APの明確化の方策

◆ アドミッション・ポリシーを観点別教育目標で表すメリット

- 高等学校を修了した学生の資質や能力は、学習指導要領に観点別行動目標で明記されている
- 観点別行動目標で示されたディプロマ・ポリシーと比較しやすい
- 入試形態ごとのアドミッション・ポリシーの総和が学部のアドミッション・ポリシーと考える(出口のディプロマ・ポリシーは同じだから、でこぼこは大学の教育で補完すべきもの)

◆ 入試形態ごとに学部での学修に最低限必要とされる能力、資質、適性を、高等学校の学修の成果に基づいて観点別に記述する(「関心・意欲・態度」はAO入試や推薦入試、「知識・理解」は一般入試等)

愛媛大学農学部のアドミッション・ポリシー・チェックリスト

農学部		1月28日													
		前期日程		後期日程		併進ⅠA		併進ⅠB		AO(地域マネジメント)		併進Ⅱ		AO(水産)	
		ゼミ	教科	ゼミ	面接	小論文	面接	小論文	面接	ゼミ	面接	ゼミ	面接	ゼミ	面接
(知識・理解)	1. 高等学校で履修した主要教科・科目について、教科書レベルの基礎的な知識を有している。	◎	○	◎		○	△	○	△			◎			△
	2. 次のいずれかに該当する。														
	A. 高等学校で履修した主要教科・科目について、教科書レベルの基礎的な課題を解くことができる。	○	◎	○		△						○			
	B. 農業・生物資源または工業、商業などに関する基礎的専門知識・技術を有している。								○	△					△
(思考・判断)	ある事象に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる		△			○	△	△	△	△	○			○	○
(技能・表現)	自分の考えを、日本語で他者からわかりやすく文章表現ができる。		△			○	△	△	△	△	○			○	○
(関心・意欲・態度)	地域社会や国際社会における食料・資源・環境に関する様々な問題に関心を持ち、身に着けた知識や技能の解決に役立てたいと考える。					○		◎		◎	◎			○	◎

高知大学人文学部のアドミッション・ポリシー・チェックリスト

人文学科の教育及び人材育成目標
 国文学・言語学・歴史学・地理学・文学・宗教学などの、人文科学の伝統を継承し、人間や社会・文化に関するさまざまな問題を多角的に考察し、その動機を明らかにし、その意義を明らかにし、その可能性のある卒業論文作成までを指導します。人文科学に専攻する者としての専門的知識と創造的な能力を養い、社会・文化に貢献できる人材を育成します。

人文学科の受け入れ方針	入試影響
知識・理解 人文科学分野にあたって基となる「国語」「外国語」および、他人の個性や立場に合わせた他の科目多量な授業で修得し、その基礎的事項を履修している学生を受け入れます。	推薦入試Ⅰ 一般入試Ⅰ 面接
思考・判断 物事や論議に深入り、判断する能力を備えている学生を受け入れます。	入試影響 一般入試前期 センター試験 本学独自の試験(英語・国語)
関心・意欲・態度 広く人文科学に関心をもち、人間や社会・文化に対する創造的意欲や探究心をもち学生を受け入れます。	入試影響 一般入試後期 センター試験
技能・表現 主に言語による正確で論理的な表現技術を身につけている学生を受け入れます。	入試影響 一般入試後期 センター試験
教科外活動 特長を活かして自らに課した勉学、教科外活動を通じて、広範な知識や関心などを身につけた学生を受け入れます。	入試影響 一般入試後期 センター試験

入試影響	入試影響
推薦入試Ⅰ 一般入試Ⅰ 面接	一般論議と深い知識・理解で能力や適性などを客観的に判定します。 - 高等学校における各教科について程度が優れ、進学意向や学習意欲が良好であるかを判定します。 - 人文科学に対する高い関心や学習意欲、および、将来設計を有しているかを判定します。 - 志望で論理的なコミュニケーション能力を身につけているかを判定します。 - 専門的な知識や技能を身につけていることによる意欲があるかを判定します。
入試影響 一般入試前期 センター試験 本学独自の試験(英語・国語)	基礎的な学習の達成度、大学教育を受けるのに必要な能力・適性を判定します。 - 高等学校における国語・外国語、および、大学で学ぶ分野に関連する教科について、十分に習熟しているかを判定します。 - 人文科学を学ぶうえで必要となる広範な知識や能力を身につけているかを判定します。
入試影響 一般入試後期 センター試験	基礎的な学習の達成度、大学教育を受けるのに必要な能力・適性を判定します。 - 人文科学に関する知識や関心、意欲や能力、および、日本語による文章表現力を有しているかを判定します。 - 志望動機や学習意欲が十分であるか、および、日本語によるコミュニケーション能力を有しているかを判定します。

教育開発支援センターのミッション

教育開発支援センターは、教育目標が達成できる成熟組織となるように、全学の学部・研究科・教学機関と協働し、自らもその一員である本学の「学びのコミュニティ」の成長を支援する。



教育開発支援センターのミッションステートメント

教育開発支援センターは、教育目標が達成できる成熟組織となるように、全学の学部・研究科・教学機関と協働し、自らもその一員である本学の「学びのコミュニティ」の成長を支援する。

4段階の成熟度レベル（質的評価）

1. 形式的な検討であったり、検討が行われていないレベル
2. 具体的な検討が行われたが、学部教員全体の合意が得られていないレベル
3. 実行性が検討され、合意が得られ、周知されているレベル
4. 社会のニーズの変化に対して機敏に対応するための継続的、組織的な体制が整っているレベル



ご清聴ありがとうございました。

沖 裕貴

oki@fc.ritsumei.ac.jp

平成 24 年 4 月 10 日発行

発行者：京都嵯峨芸術大学 平成 23 年度 FD 委員会

神谷三郎

仲政明

山本直樹

倉山裕昭

佐藤文郎

本文・編集：佐藤文郎（京都嵯峨芸術大学・芸術学部）

編集助手・レイアウト：大西葵（芸術学部メディアデザイン学科 H22 年度卒業生）